

第47回

日米学生会議

THE 47TH JAPAN-AMERICA STUDENT CONFERENCE

日本側報告書



1995年夏——

Reflecting on the Past, Forging Our Future

「時代の創造」

～歴史に学び、理想の実現へ～

第47回日米学生会議日本側報告書

<目次>

I. メッセージ集		1
日本側実行委員長からのメッセージ	細野 恭平	2
米国側実行委員長からのメッセージ	John Harding	3
村山富市内閣総理大臣からのメッセージ		4
ビル・クリントン大統領からのメッセージ		5
II. 硫黄島訪問		7
「和解の象徴」1995年8月18日、硫黄島訪問——		8
硫黄島宣言		13
<i>IWO JIMA DECLARATION</i>		14
硫黄島訪問までの道のり		16
III. 第47回日米学生会議の総括		21
第47回日米学生会議の総括	海老原 憲	22
検証「第47回日米学生会議」	山田 通代	27
「相互理解」の理解	藤本まどか	32
IV. 会議を振り返って		33
私が見たアメリカ、1995年夏	北澤咲弥花	34
相互理解	藤本 直子	39
日米学生会議と平和創造	来嶋 光江	40
日米学生会議が平和創造にできること	大沢枝里子	41
世界の中の日米関係	難波江功二	42
世界の中の日米関係	平野 功	44
憧憬	細野 恭平	48

V. 分科会報告

53

国際関係	大保 敦子	54
国際社会における民族の共存	細野 恭平	55
グローバル社会におけるビジネス	海老原 憲	57
民主主義社会における市民参加のあり方	藤本まどか	58
犯罪 ～環境、社会、そして私たちの責任～	山田 通代	59
健康と医学・医療	高野 利実	61
教育	田中 智子	63
情報とコミュニケーション	柳井 哲史	64
哲学から探る人間の可能性	土井 洋平	66
ライフスタイル ～人間と社会～	磯部 美香	68

VI. プログラム報告

69

ジェンダーDAY	磯部 美香	70
科学技術フォーラム	高野 利実	76
APEC DAY	山田 通代	86
マイノリティーDAY	土井 洋平	94
ボランティアDAY	田中 智子	100
平和プログラム	藤本まどか	103
日米関係フォーラム	海老原 憲	108

VII. その他の活動報告

高野 利実 113

第47回日米学生会議の足跡	114
本会議中の活動	116
連続講演会	120
準備活動	121

VIII. 第47回日米学生会議参加者

123

日本側参加者	124
米国側参加者	125

IX. 会議開催にご協力下さった方々

126

編集後記

高野 利実 133

I. メッセージ集

日本側実行委員長	細野 恭平
米国側実行委員長	John Harding
内閣総理大臣	村山富市氏
米国大統領	Mr. Bill Clinton

日本側実行委員長からのメッセージ

"Reflecting on the Past, Forging Our Future"—太平洋戦争の終結から現在に至るまで、我々の先人たちはいかなる道程を経て今日にいたり、新たな歴史を刻むべき我々はいかなる目標に向かって前進してゆけばよいのでしょうか。戦後50年を迎えた今日、私たち次世代を担うべき若者に課せられた使命とは一体何なのか。それが、今回の会議において私たちが追い求めた究極の命題であり、私たちはその想いを冒頭の総合テーマに込めた。

「誰もが生活にある程度満足しているのに、不安と焦燥に駆られているのが日米両国の現状である。」というあるアメリカのジャーナリストの発言が記憶に残る。この50年間、人々の生活水準は確実に向上した。かつてないほどの経済的繁栄を享受し、医療技術や衛生状態の進歩、福祉の発達などにより人々の平均寿命は飛躍的に延びた。労働条件は改善され、教育も普及し、大学への進学者も増加した。日本はこの50年間に、アメリカの手厚い庇護の下で、幸福な理想の社会に憧れ、夢を追い求めた結果、世界でも指折りの豊かさに恵まれた国家になった。いわゆるアメリカンドリーム最大の成功者は実は日本であるのかもしれない。

だが、その日本は今岐路に立たされている。ソビエト連邦の崩壊により社会主義と資本主義の争いに終止符が打たれ、反共の砦としての役割を担っていた自民党による長期の一党独裁も終わりを告げた。沖縄での米軍兵士による暴行事件を契機に、在日米軍の存在意義や日米安全保障条約のあり方が問われている。東アジアの奇跡の主演であった日本経済も90年代に入り失速した。大蔵省や各種金融機関は未だにバブル時代のつけを処理しきれずに彷徨を続けている。

自民党、日米安保、経済的繁栄——これまでの50年間の日本を語る代名詞とも言える諸要素が絶対でなくなった今日、日本はその座標を失いカオスの中をさまよいはじめている。

確かなことはもはや戦後ではないということであろう。戦後と一言で括ってもその定義の仕方は十人十色であろうが、そのうちの一側面から判断すれば、明日は今日よりも良くなると信じて疑わなかった時代が終焉を迎えたといってもよい。よりよい生活を目標にしている以上、その直線上に終点は見つけられない。戦後の復興の時代から今日に至るまで、豊かな生活を目標して邁進してきた日本は、自らが歩んできた直線上の終点までの道のりのあまりの永遠さに愕然とし、その結果として国民は常に不満を募らせているのである。

このような時代背景ゆえに、戦後の繁栄に支えられ今年で47回を数える日米学生会議も転換期を迎えている。私たちの理念は今も昔も日米間の恒久的な相互理解を構築することに変わりはないが、両国にとって、その他の国々との関係を鑑みた際の日米関係の相対的地位の低下により、会議もその方向性、突き詰めて言うなら存在意義が問われる時期に来ていると痛感する。日米関係が戦後という単語で総括される局面から脱却したのと同様に、会議も戦後50年を経た今、従来とは異なった新しい価値の創出が必要とされているのである。

なぜ日米なのか。なぜ学生でなければならないのか。将来において理想とされる日米関係とは一体どのようなものなのか。さらに言えば、この混迷の時代に、私たちは何を目標として、何を機軸として生きてゆけばよいのか。渦巻く時代の波に飲み込まれることなく、これらの命題を常に意識していくことが会議の参加者に問われる姿勢であると同時に、今後、日米学生会議として上述の命題に対する答えを社会に対して主張し続けていくことが大切なのではないだろうか。

最後になりましたが、第47回会議開催に際して多大なご協力をいただきました外務省様、文部省様、地元での開催を積極的に支援してくださいました仙台市の皆様、立命館大学の皆様、ご賛助金を賜りました財団・企業の皆様、日頃から貴重なご指導を賜りました国際教育振興会の皆様、その他、様々な形でご支援いただきました全ての皆様にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

第47回日米学生会議実行委員会
日本側実行委員長 細野 恭平

米国側実行委員長からのメッセージ

The 47th JASC successfully gave expression and form to the theme for the 1995 Conference, "Reflecting On the Past, Forging Our Future", and the Executive Committee and delegates rose to the occasion creating a conference equal to the historic year in which it was held!

Every year is unique, nonetheless, there was something spectacular about the 47th conference. In part, the 50th anniversary of the end of the Pacific War placed JASC more directly in the spotlight of media attention and symbolic significance. Activities such as the trip to Iwo Jima were "spectacular"--both in the sense of rare opportunities motivating us to perform to our highest capabilities, and situations creating stress and uncertainty where we could well become a "spectacle."

Of course, the heart of JASC is formed and expressed outside of the spotlight's glare. This summer's experience highlighted the conclusion of a two-year process for the Executive Committee. Inevitably working through misunderstandings and trans-Pacific tensions, the American and Japanese planners found ways to learn from and understand each other as they forged the framework for the one-month experience. Confounding shallow stereotypes of "Japan as imitator," the visionaries on the Japanese Executive Committee implemented a particularly ambitious schedule of events. Creating their own ideas as well as accommodating those of their counterparts, the American Executive Committee members, and delegates, demonstrated the powerful interaction that can arise during unstructured, as well as structured, times.

Ultimately, the unique personalities, skills, and aspirations of each delegate turned the skeletal conference into a living experience. Even while embodying its unique form and memories, the life of the 47th conference bares resemblance to that of the 1st conference in 1934, and every subsequent and future JASC. The conference enjoys the quality of an ongoing spirit of friendship and understanding.

I look forward to the continuing growth, life-long friendships, and gathering influences which stem from last summer's conference. I learned a great deal from my friends and our shared activities. We crammed so many rich experiences into such a short period of time that I expect to be unpacking the insights for many years!

One insight focuses on the importance of living together for an extended period of time. However helpful electronic mail can be, physical proximity allows greater communication, understanding, and friendship-- and facilitates our ability to come together in more abstract ways. Time spent together with a minimum of distraction allows us to plumb depths beyond the introductory greetings.

Location, as well as physical proximity, proved powerful. From the USS Arizona Memorial in Pearl Harbor to the Peace Park and Museum in Hiroshima, we visited places imbued with power. Through open communication and hard work, we tried to turn this power to potential. It is difficult to define the exact nature of this potential, but I hope each of us is able to realize it in our careers and in our lives.

I would like to thank all those who made the conference possible, and all of the delegates who made the conference! The 47th JASC offered innumerable rewards. It was meaningful and playful, full of frustration and full of satisfaction. It was alive. Yes, in short, the JASC experience was a spectacular, condensed and accelerated form of life itself.

John Harding
Chair, American Executive Committee for the 47th JASC



村山富市内閣総理大臣からのメッセージ

「第47回日米学生会議」の開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本年は戦後50年にあたり、日本と米国にとり歴史的な節目の年であります。この半世紀の間、日米両国は、自由と民主主義という共通の価値観に基づき、政治、安全保障、経済、地球規模の問題の解決等幅広い分野における強固なパートナーシップを確立するにいたりました。本年初めの日米首脳会談において私とクリントン大統領との間で確認したとおり、今後とも日米関係を将来に向けた協力関係として更に発展させていくことが、世界の平和と安定のためにも極めて重要であると考えます。

日米学生会議は、次世代を担う若者たちが言葉や文化の違いを越え、自由に議論しそして互いに理解し合おうとする場です。国際社会が真の平和と繁栄を享受するためには、両国の個人と個人の信頼と相互理解に立脚した友好関係の確立を地道に進めてゆくことが何よりも大切であります。日米80名の学生が、改めて戦後の日米関係に思いを馳せると共に、新しい国際社会のあり方につき約1ヶ月間にわたって、互いに率直に意見交換されるということに、私としても深い感慨と期待をおぼえるものであります。

これからみなさんが生きてゆかれる社会では、様々な問題に直面することでしょう。しかしながら、いつの時代でも社会を変えてきたのは、理想を秘め正義を実現しようとするくじけなかったひとりひとりの使命感です。私は、皆さんにもそんな一人になってほしいと考えます。会議のご成功をお祈りします。

1995年7月

村山富市

ビル・クリントン大統領からのメッセージ

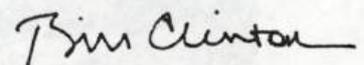
Greetings to everyone gathered in Sendai, Japan, for the forty-seventh annual Japan-America Student Conference. I am delighted to join the participants in celebrating fifty years of peace between our two countries.

In this era of sweeping global change, it is more important than ever for our citizens to gain an understanding of the relationships that link the nations of the world. This conference provides an invaluable opportunity for students to share their interests in other cultures and to become active members of the international community.

I applaud the members of the JASC for your dedication to strengthening the Japanese-American alliance and to exploring our nation's common goals for the future. Working together, you can help to reinforce the strong bonds between Japan and the United States and build a dialogue that will carry us into the next century. The trust and fellowship fostered by your efforts offer a vital opportunity for realizing a future of continued prosperity and lasting peace.

Best wishes for a productive and memorable conference.

Bill Clinton, July 1995





第47回日米学生会議参加者（開会式にて）



第47回日米学生会議実行委員（閉会式にて）

「和解の象徴」

1995年8月18日、

硫黄島訪問——

機内の小さな窓から外を眺めると、そこには透き通るように碧い珊瑚礁の海が延々と広がっていた。太陽光線は海面で反射し、その光景をいっそう幻想的なものに変えていた。

「このように両国の本土から遠く離れた場所で、50年も前に日米の兵士が悲惨な争いを繰り広げていたなんて信じがたいことだ。」ジョン・ハーディング（ペンシルバニア大学）はハンモックのような座り心地の悪い座席に腰掛けて目をつぶった。

C-130の機内は倉庫のようであった。両壁沿いに一列ずつ、そして、機の中央に背中を向かい合わせる形で二列、合計四列のハンモックのような臨時の吊り椅子が用意されていたが、向き合う椅子と椅子の間は狭く、私たちはお互いに膝を斜めに傾けた不自然な姿勢を3時間近くも続けていた。プロペラの轟音がうるさく響き、機の上部の配管をくり貫いたエアダストから吹き出すクーラーの音が、プロペラ音に独特の不気味なアクセントをつけていた。

海老原憲（早稲田大学院）は、自分の首から釣り下がった認識票と呼ばれるタグを握りしめていた。銀盤に認識番号のみが刻まれ、万が一墜落した際には身分証明書に変わるこのタグは、「アメ横」のミリタリーショップで良く見かけるそれに似ていた。ジェニファー・デミング（スタンフォード大学）は到着後に基地の前の国旗掲揚塔に掲げる米国の国旗Stars and Stripesを大事そうに抱えていた。

1995年8月18日、終戦から50年と3日たったその日、代表団32名は太平洋戦争の激戦地硫黄島に向かう自衛隊機C-130の機内にいた。硫黄島は大戦中、日米双方にとって日本の本土爆撃のための前衛基地という観点から戦略上非常に重要な地点であった。海岸から戦艦で押し迫る米軍と、それを迎え撃とうとしてゲリラ戦を展開する日本軍兵士が、約40日間の総力戦を展開し、双方あわせて、27,721名が戦死、22,898名が戦傷を負ったとも言われる。現在は自衛隊の基地のみが存在し、一日一回、自衛隊の定期便が基地と本土の間を行き来するだけである。

私たちの硫黄島訪問の目的は、終戦から50年目を数える今年、日米の若い世代の代表として、将来の両国関係を案じて真摯に議論する若者の様子を、かつての激戦地硫黄島から両国世論に訴えかけることであった。本年度の第47回日米学生会議においては、「Reflecting on the Past, Forging Our Future」を総合テーマに定め、これまでの日米関係を振り返ると同時に、次世代に向けての新たな価値の創造を念頭に置きつつ、会議が進められた。私たち代表団の32名は、飛行機の収容人数の関係で残念ながら今回の硫黄島訪問に参加できなかった他の日米学生会議参加者ともども、約一カ月にわたる会議を通して、将来の日米関係のあり方

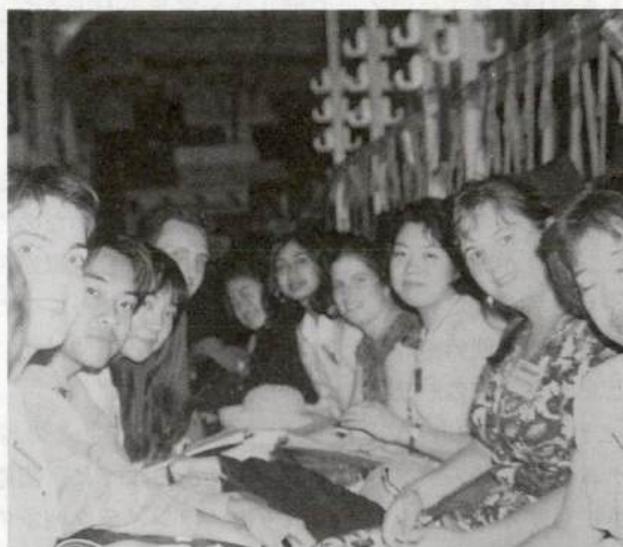
を模索してきた。1934年の設立以来、60余年にわたって日米間の相互理解を目指して活動してきた日米学生会議にとっては、今回の訪問はこれまでの活動の集大成といっても良かった。

C-130機内には私たち32名の他に、宮澤喜一元首相や外交評論家の岡本行夫氏、米国大使館のデミング書記官、さらには多数の報道関係者が乗っていた。宮澤喜一氏は日米学生会議OBであるが、宮澤氏が参加した第6回・7回は戦前最後の会議であり、満州事変をきっかけに緊張感を増しつつあった日米両国が戦争に突入する直前に行われたのだった。

「まもなく、硫黄島に到着いたします。」突如として機内放送が流れた。機内に緊張が走り、急にあわただしさが増し始めた。皆、高まる興奮と緊張で、形容しがたい不安に駆られていた。

機体は硫黄島上を数回旋回したあと、滑るように島に降り立った。心臓音の高鳴りと反比例して、プロペラの轟音はその振動数を減らしていく。柳井哲史（麗澤大学）は島に降り立った瞬間の心境について「言い様のない気持ちの高ぶりを感じて、絶叫したくなるほどだった。この訪問が自分にとって、どのように影響してくるだろうかという期待半分、不安な気持ち半分であった。」と振り返っている。

しばらくの静寂の後、ゆっくりと後部ハッチが開いた。真っ青な空と、まぶしすぎるくらいに基地を照らす太陽の光が私たちの目に飛び込んできた。強烈な日差しも浜から吹く風のため心地よい。「思ったよりもずっと爽やかだ。」難波江功二（浜松医科大）は思った。



C-130機内にて

自衛隊のマイクロバスにあわただしく分乗し、基地の敷地内の厚生館と呼ばれる建物へと向かった。到着後、宮澤氏に一人ずつ挨拶をすると、私たちは弁当もそこそこに、島内見学へと向かうバスに乗り込んだ。極度の緊張のあまり、食事は十分に喉を通らなかった。一分一秒の時間が貴重に思われた。

マイクロバスの車窓からの光景は、南国そのものであった。深緑の灌木と燃えような砂地、そして真っ青な海とのコントラストは、この島がかつての激戦の地であったことを一瞬忘れさせた。小林洋子（名古屋大学）は、想像力の限りをつくして、会議中の勉強会で観た硫黄島での戦闘の記録フィルムの映像を、眼前の景色と重ね合わせようとしていた。

あるバスの中では、米国人のジャーナリストが案内役の自衛隊員に、硫黄島における朝鮮人強制労働者について質問を投げかけた。案内役の方は、そのような事実は聞くところではないと説明していた。私たちが事前の勉強会で見た米国海軍の記録フィルムによれば、当時の硫黄島には軍事基地建設のため、2000人とも言われる強制労働者が徴用されていたとのことである。

10分ほどして、私たちの最初の目的地、日本戦没将校慰霊碑（天山慰霊碑）にバスは到着した。硫黄島という島名がつけられるほど地中の硫黄分が多いため、草木は大きく育たず、島内のあちこちには砂漠のような地肌が見えかくれしていた。小さな丘を登ったところに天山慰霊碑があった。この慰霊碑は、天井が大

きくくり貫かれた、独特の形をしている。自衛隊の方の説明によれば、くりぬかれた天井は、地下壕の蒸し返るような暑さの中で水と光を切望しながら戦死していった兵士たちの苦しみの象徴であり、その霊を慰めるため、水と光を求めることができるようにこのような構造になっているとのことであった。遠くには、どこまでも続く青い海が広がっている。50年の昔、この静かな海の彼方から無数の米軍艦隊が押し寄せてきたという光景を想像することは、戦争を知らない私たちにとっては困難なことであった。無数の日本人兵士、米国人兵士が海の彼方にある故郷に思いを寄せながらこんな辺鄙な島で戦死を遂げたと思うと胸が痛んだ。献花、献酒を行った後、全員で冥福を祈った。

ケビン・サリ（カンザス大学）はフジテレビの取材班からの質問に対して、両手にもった数珠を強く握りしめながら「かつてこの地で、日米の若い兵士たちが国家の命令されたままに何も知らずに死んでいったのは本当に悲しいことです。」と語った。

慰霊碑を後にして、私たちは旧日本軍塹壕へと向かった。バスの車窓から広がる地形は、私たちが観た記録フィルムの中の戦場と酷似していた。この島がかつて戦場であったことがじわじわとリアリティを帯びて胸に迫ってきた。

塹壕は島の道路から少し奥まったところにあった。戦中には医務科壕（海軍硫黄島警備隊医務科壕）として、野戦病院の役割を果たしていた壕で、硫黄島内の壕としては最大規模のものであった。担架で負傷者を運び込む都合から、立って歩けるこの大きさに壕を掘ったというのだから、他の壕の凄惨な状況は想像を絶する。戦争中日本兵はこのような壕を地下にいくつも掘り、米軍兵士が近くを通りかかると用意してある縦穴から突如姿を現して急襲したという。時には手榴弾を抱えたまま壕から飛び出し、戦車に向かって肉弾攻撃をすることもあったらしい。日本軍の神出鬼没さと死を恐れない覚悟に米軍は恐怖し、侵攻を自重した結果、予想以上に戦闘が長引いたと聞く。

最大規模と言っても、それでも数分で一回りしてしまえる程度の大きさである。その内部の暑さに私たちは言葉を失った。地表面を照らす灼熱の太陽光線と火山による地熱のせいなのだそうだ。地下壕では空気はよどみ、形容しがたい重苦しさで息が詰まりそうであった。壕内には日本軍が使用していた、当時の飯盒器具がそのままの状態が無惨にも放置されていた。交戦中に水瓶として使っていたと思われる窪みも幾つかあったが、私達の感覚からすればとても飲めそうな代物ではなかった。当時は更に、この水に兵士たちの死骸が浮いていたのではないかと思うと、胸の詰まる想いがした。

細野恭平（東京大学）は、これまでの彼自身の戦争に対する考え方を、この壕の見学の後、一変させていた。多くの日本国民やベトナム戦争以後のアメリカ人がそうであるように、実際の戦争を目の当たりにしたことがない彼にとって、戦争に対するイメージは湾岸戦争やイランイラク戦争のものが適当であった。お互いに近代的な兵器を取りそろえ、実戦は戦略上のシュミレーションの延長線として、ミサイルなどが空を飛び交うという戦争のイメージを漠然と持っていた。しかしながら、この地下壕を見学した後、そのような近代的な戦闘は、戦争のごく特定の一局面しか現しておらず、実際に兵士が体験する悲惨さは想像を絶するものであるということを感じた。

彼は、このような極限状態の地下壕にいつ殺されるかもしれない恐怖と常に背中合わせで、一ヶ月近く身を潜めていた兵士たちの忍耐力・精神力に圧倒されると同時に、最後には地下壕ごと焼き払われてしまったという兵士たちの苦しみのほんの一部を、この地下壕を訪問したことで共有できたような気がした。また、同様の恐怖を感じていたであろう米軍兵士の心境を想像し、戦時中の兵士の心理状態がいかに追い詰められた極限状態にあるのかを推測することができた。

「戦争は絶対にあってはならない。」私たちはそれぞれに同様な想いを囁みしめ、地下壕を後にした。

代表団が最後に訪れたのは米軍将兵の碑であった。米軍将兵の碑では、学生を代表してヘレン・リー（ハーバード大学）と中山真（早稲田大学）が献花をし、今度は天山慰霊碑の際とは違い、日米の学生が手に手を取り合い、碑の前まで歩み寄り、共に戦没者の冥福を祈った。戦争の悲惨さを地下壕の見学を通して徐々に、そして確実に理解し始めた参加者たちは個々に抱き合い、慰めあい、二度と悲劇を繰り返すまいと心の中で誓った。

米軍将兵の碑から基地への帰路、私たちはいかに歴史というものが風化しやすいものかを実感した。慰霊碑の存在自体、明らかに戦争が遠い過去の出来事であったことを感じさせるが、今もってこの灼熱の大地を掘り返せば、身元の分からない戦没者たちの遺骨が出てくるといふ紛れもない現実、それら匿名の人々にとって、そして彼らの家族や友人にとって、戦争が決して過去のものではないことを私たちに教えてくれた。我々の進む道の左側には摺鉢山が見えた。かつての激戦を象徴する山にも今では木々が静かに生い茂っていた。

予定の時間をかなり超過して基地にもどったため、メイン・イベントのひとつとなるはずであったディスカッションの時間は大幅に短縮されることとなった。用意していた議題もリハーサルの打ち合わせも全て白紙にもどさざるを得ず、カメラと報道陣にとり囲まれた環境での即興の討論には、さすがに誰もが緊張を隠せなかった。代表団32名は宮澤首相を囲む形で円形に椅子を並べて向かい合い、アンドリュー・クロフォード（ウエズリアン大学）、藤本まどか（国際基督教大学）が議長をつとめた。議題は安全保障に関してであった。

安全保障に関する各人の意見は、国籍を問わず非常に様々であったが、全体としてみればやはり日本側の学生には軍隊の存在自体を悪とみなす意見が多く、米側の学生には秩序の維持を目的とした軍隊の保有を正当化する学生が多いように見受けられた。日本側の学生である大石詔子（立命館大学）や北澤咲弥花（東京大学）、柳井哲史（麗澤大学）らが、日本では軍隊や戦争というものを身近に感じる機会が少なく、それゆえに受け入れがたいと発言すると、コニー・ピーソン（ミシガン大学）やマリック・ラシッド（コロンビア大学）は国際的なバランス・オブ・パワーの観点からも軍隊の存在は現時点において必要であると強調した。しかしながら、これらの意見はあくまでも両国内の比較的多数派という範疇を越えるものではなく、日本人でも極東の安全保障のための米軍の必要性を主張する木村伸吾（早稲田大学）や細野恭平（東京大学）などの学生がいたし、アメリカ人でもケビン・サリ（カンザス大学）やジョン・ハーディング（ペンシルバニア大学）のように仏教に傾倒した平和主義者はいた。



戦前の日米学生会議は宮澤氏が参加した回を最後として、その会議が終了してわずか2年後に真珠湾攻撃が行われ太平洋戦争が始まった。日米間の相互理解を謳いながら、当時の強大な国家権力を前に太平洋戦争への突入を妨げることができなかった当時の会議参加者たちの無念は相当なものであったに違いない。しかしながら、その当時、わずか50年の後に日米両国がこれほどまでに繁栄し、あらゆる二国間関係の中で最も重要な関係をお互いに築くということを一括誰が予想し得たであろうか。50年前には戦場であったこの硫黄島で、こうして日米両国の学生が率直に意見を交換しあえる時代がきたことの幸せを、私たちは身を



もって実感することになった。

ディスカッションは、宮澤氏が投げかけた質問…中国を視野に入れた大太平洋の安全保障についての意見交換を最後にして、幕を閉じた。時間が一時間程度と限られていたため十分に中身のある議論ができたとは言いがたいが、その内容よりもむしろ、この場所で日米の学生が議論を交したということに意義があると考えられる。

ディスカッションを終えた後、私たちは表の国旗掲揚塔の前に整列し、日米両国の実行委員長が硫黄島宣言を読み上げた。この宣言文には第47回日米学生会議参加者一人一人の様々な思いや願いが込められていた。

海から来る心地よい浜風に掲揚された日米両国の国旗がはためく下で、代表団32名は硫黄島宣言の一句一句をかみしめながら、一ヶ月間にわたる会議での活動について振り返っていた。初めて出会うアメリカ人に、必死になって英語で自己紹介をしたこと。打ち解けあって楽しく飲み明かしたこと。なかなか共通見解を見いだせず涙を流したこと。企画のために夜遅くまで知恵を出し合ったこと。様々な瞬間が走馬燈のように参加者たちの脳裏を駆けめぐっていた。

Japan, U.S. students reflect on meaning of Iwojima battle

By Rolfe Lal

Yomiuri Shimbun Washington Bureau

"I am really glad that we are here today as friends, a completely different purpose than 50 years ago," said Robbi Miller of Harvard University, holding the hand of Aki Yamada of Keio University in a cave on Iwojima.

Miller, 21, and Yamada, 22, were among delegates of a joint conference of Japanese and U.S. university students, accompanied by former Prime Minister Kiichi Miyazawa, who commemorated the 50th anniversary of the end of World War II Friday on Iwojima, site of one of the war's most bitter battles.

The students, who are delegates of the Japan-America Student Conference (JASC), offered flowers in ceremonies for both the Japanese and Americans who died in the battle for the volcanic island, and visited a cave used as a hospital by the Japanese. Following the tour of the island, they discussed issues such as the role of the United States and Japan in global security, and the future of Japan-U.S. relations.

Miyazawa, a member of the conference before the war, reflected on some of his memories of the conference, and the importance of individual experiences such as the bilateral conference in building international understanding.

Through living, traveling, and learning together over the month-long conference, students from both sides aim to create and strengthen bonds between Japan and the United States at the grass-roots level.

The Japan America Student Conference was inaugurated in 1934, when tensions

between the two nations were escalating. A group of university students in Japan decided to take the matter into their own hands and invited American students to Japan for the first bilateral student conference between the countries, in the hope that such an exchange might help cool off tensions. Each year the conference alternates between Japan and the United States. The conference has continued annually for the past 61 years, with the exception of the war years.

This year's JASC focused reflection on the past 50 years of peace in order to build a new future. The 39 delegates from the United States began the conference in Hawaii with a visit to Pearl Harbor, then joined with the 39 members of the Japanese side for commemorative visits to Hiroshima and Iwojima, which was accessed by military transport provided by the Japanese Self-Defense Force. Other sites of this year's JASC included Tokyo, Kyoto, and Sendai.

The students chose Iwojima as a final destination to close the chapter on the last 50 years. The island, a barren land of volcanic ash and caves, is used only as an SDF base. After the island was captured by U.S. troops in March of 1945, the fall of Okinawa became imminent. The gruesome battle for Iwojima took the lives of 20,000 Japanese defenders and 6,800 Americans.

Delegates did much reflecting on the tragedy, but there was a promising note for the future. "It would be impossible for us to fight in a battle like Iwojima," said delegate Harumi Furuya, of Harvard, "because now we see each other as individual human beings and not as flags."

1995年8月27日付Daily Yomiuriの記事
(米国側実行委員ローリー・ラルが執筆)

硫黄島宣言

五十年前、日米両国はこの硫黄島において、激しい戦闘を繰り広げました。硫黄島戦は両国にとって軍事戦略上極めて重要なものでした。1945年2月16日から3月26日にかけて、ハリー・シュミット大将率いる米国第五海兵大隊と栗林忠道中将率いる第百九師団は、この島で相対峙しました。硫黄島での36日間の戦い、そして太平洋戦争全体で繰り広げられた悲劇は決して言葉で言い表すことはできません。ここでの戦いに命を捧げた兵士の多くは、私たちと年代代の若者であり、彼らの死は、戦争の残虐さ、そして平和の尊さを強く私達に訴えかけます。

今日、日米学生会議参加者である私達は、敵としてではなく、友人としてここに集まりました。そして、五十年前に命を失った人々に敬意を表し、このような悲劇が二度と起こることのない、新たな時代を創り出そうとしています。日米学生会議は、日米関係が悪化しつつあった戦前に設立され、以後六十年以上にわたり、両国をより近づけるための若い指導者を生み出すことに力を注いできました。私達の硫黄島訪問は、戦後の日米両国の協力と前進の五十年を記念するものです。今や私達は、政治、地域安全保障、経済、貿易、科学技術、環境など数々の分野において良きパートナーであります。そして、長期的視野に立った日米協力は、国際社会の平和と安定になくてはならないものです。戦後の日米関係は、相互の利益の上に成り立ってきたとはいえ、その道のりは決してなだらかなものではありませんでした。日米の文化、目標、意志決定方法などの違いによって、両国の政治、経済、安全保障、その他様々なレベルで複雑な誤解や緊張が生まれています。両国の指導者が、このような緊張の根底にあるものを深く検証することはまれであり、誤解に基づくステレオタイプによって両国の摩擦が増幅されています。日米の差異が強調される一方、共通点は見落とされがちです。

私達は、日米両国の若者の代表として、文化の差を認識しつつ、誤解の本質を明らかにすることで、摩擦を減らそうとしています。そして外交や安全保障、あるいは経済問題といった、実務的、専門的な議題のみにとどまらず、意見の衝突や誤解の深部へと届くような意義深い対話をするべく努力してきました。このような長期的な議題は時として、当面重要と考えられる議題のために見捨てられがちです。しかし、理解と意思疎通に向けての小さな努力が日米関係の調和に大きく貢献すると信じています。

一ヶ月の日米学生会議を通して、参加者は寝食を共にし、議論し、お互いから学び、笑いと涙をともに分かち合う貴重な経験をしました。その中で私達は深刻な意見の相違や摩擦にたびたび直面しましたが、これらから逃げることなく、正面から対処してきました。心の中の不安を露にし、開かれた討論を通じてこれらの緊張の原因を検証し、同じ誤解を繰り返さないように努力してきました。それというのも、私達が、二国の公人としてではなく、相互の文化や社会を深く学び理解しようとする個人として集ったからです。私達は、学生として、いかなる政治的あるいは制度上のしがらみにも束縛されず、自由かつ率直に意見を交わすことを許されています。そして故郷や大学に戻り、会議で得られた貴重な経験や参加者によって育まれた理想を多くの人々と分かち合うのです。私達日米学生会議参加者は、これから様々な分野で社会的責任を担う際に、私達の共有した経験、個々の友情を力とし、次世紀における日米関係の維持、改善の為に個々が重要な役割を持っているのだという信念を未来へ伝えていきます。

太平洋戦争終結五十周年にあたり、若い世代の代表である私達は、戦争がもたらした苦しみを噛みしめ、日米両国の変わらぬ平和への願いを改めて確認したいと思います。日米両国間には、五十年間の近密なパートナーシップにもかかわらず、未だに多くの課題が残されています。日米関係は極めて複雑であり、過去と未来の緊張を和らげるためには、さらなる理解へのたゆまぬ努力が必要とされています。私達は過去に縛られるべきでも、それを忘れるべきでもありません。私達は、将来の国際社会における私達の責任の大きさを認識するとともに、これを果たしていく覚悟です。私達は、柔軟な精神と相互理解への決意をもって、次世代の二国間関係を創り出すことを誓います。

平成7年8月18日

第47回日米学生会議

日本側実行委員長 細野 恭平

米国側実行委員長 ジョン・ハーディング



IWO JIMA DECLARATION

Fifty years ago, our two nations met in fierce conflict on this island. The Battle of Iwo Jima took place due to the island's strategic importance to both Japanese and American military objectives. From February 16 to March 26, 1945, the American Fifth Marine Amphibious Force, commanded by Lt. Gen. Harry Schmidt, met the Japanese 109th Infantry Division under the command of Lt. Gen. Tadamichi Kuribayashi. The struggle for the island was bitter and dogged. The loss of life during this 36-day battle -- and during the entire Pacific War -- was a tragedy which can never adequately be expressed in words. Many of the soldiers who gave their lives here were of the same age as we; it is a powerful reminder of the brutality of war and the essentialness of peace.

Today, we, the members of the Japan America Student Conference (JASC), meet not as enemies, but as friends. We seek to pay our respects to those who sacrificed their lives here fifty years ago, and to forge a future in which such a tragedy shall not repeat itself. Founded during the pre-war period of deteriorating U.S.-Japan relations, our conference has endeavored for over sixty years to create young leaders committed to bringing the two nations closer together. Our visit to Iwo Jima marks fifty years of cooperation and progress between the United States and Japan since the close of the war. Today we have become close partners in politics, regional security, business, trade, science and technology, environment, and countless other fields. Moreover, long-term U.S.-Japan cooperation is absolutely essential to global peace and prosperity. Although our post-war relationship has been founded upon mutual interests, our bilateral relations have not always been smooth. Cultural differences, contrasting objectives, and decision-making processes continue to create misunderstandings and tension that complicate our relations in politics, economics, security, and social interactions. Rarely are the fundamental roots of these tensions carefully examined by our leaders, while misleading stereotypes perpetuate frictions. Differences are often overemphasized while commonalities are submerged.

We, as representatives of the young generation of Japan and the United States, recognize that our cultures have differences, but we seek to reduce the frictions in our relations by striving to clarify the roots of these differences. Rather than solely engaging ourselves in debates on technical issues of diplomacy, security, or economics which government officials and business leaders often deal with, we have initiated a meaningful dialogue that penetrates deeper to the core of our disagreements and misunderstandings. Too often this kind of dialogue is forsaken for issues of seemingly more immediate importance. We believe, however, that from a small investment in understanding and

communication, both nations can reap a rich reward.

During our one-month Japan America Student Conference, the participants are accorded opportunities that many leaders rarely have: living together, challenging each other's opinions, learning from each other, and sharing laughter and tears in the small hours of the night. It is in these experiences that we often learn how surprisingly similar we all are. And still, our greatest strength lies in that we do not avoid, escape or ignore these basic controversies and conflicts. We voice our anxieties, examine the roots of these tensions through open discussions, and strive to avoid similar misunderstandings from repeating themselves. We are able to do so largely because we meet not as official, and perhaps impersonal, representatives of two nations, but as individuals profoundly committed to learning and understanding each other's culture and society. We realize that, as students, we are not bound by any political or institutional affiliations, and thus are able to freely and frankly express our honest opinions. When we go back to our home communities and universities, we will share our invaluable learning experiences and the common vision cherished by the young generation of both Japan and the United States. Regardless of which professions we choose and what responsibilities we take on, we will carry into the future our shared experiences, personal friendships, and the conviction that every single one of us has a personal stake in maintaining and improving the U.S.-Japan relations in the next century.

At the occasion of the 50th anniversary of the end of the Pacific War, we, as representatives of the young generation, wish to take this opportunity to acknowledge the suffering caused by the war and reaffirm our desire for continued peace between our countries. Despite our close partnership in the past fifty years, many challenges remain. Our relationship is extremely complex and requires continued efforts at deeper understanding to prevent the tensions of the past and present. We must neither dwell in the past nor forget it. We recognize and accept the great responsibilities we shall assume as future leaders of the global community. We pledge to forge a future in which open-mindedness and a determination to understand each other will be the cornerstone of our relations.

August 18, 1995

The 47th Japan America Student Conference

Chair, Japanese Executive Committee
Kyohei Hosono

Chair, American Executive Committee
John Harding



硫黄島訪問までの道のり

硫黄島への訪問が正式に決定したのは、会議開会も押し迫った7月の中旬頃であった。2月に日米学生会議主催の講演会の講師としてお招きした岡本行夫氏のご尽力と、外務省、防衛庁のご厚意によって実現したのである。訪問の主旨は、日米の若い世代の代表としてかつての激戦の島で手を取り合って過去を振り返り、将来の日米関係を真摯に議論する姿を日米の世論に訴えかけることであった。「政府の役人や、ビジネスマンではなく、これからの日米を担ってほしい若い人たちが一生懸命に話し合っている様子は必ず世論の心に残るはず。」という岡本先生の言葉に私たちは勇気づけられた。

硫黄島には太平洋戦争以後、島民は生活しておらず、現在は自衛隊の基地が存在しているだけである。硫黄島の他にも先の大戦中に激戦地となった島は多数、太平洋に浮かんでいるが、その中でも硫黄島が特筆されるべきなのは日米双方が多数の死傷者を出した点にある。その他のガダルカナル島やサイパン島での戦闘では、戦死者の数は圧倒的に日本人の方が多かった。

終戦50年ということで特に大きく取り上げられたのであろうが、今年に入ってから二度硫黄島に関するニュースを私たちは耳にした。一度目は硫黄島の戦没者の遺族が日米両国から集まり、かつての凄惨な戦いを振り返って、地下に眠る人々に祈りを捧げたとき。二度目は横綱貴乃花と曙が硫黄島で土俵入りをしたときである。日本人横綱の貴乃花と米国人横綱の曙が二人そろって土俵入りをすることで、50年かけて醸成された日米の平和がアピールされたのであった。

会議が始まってまもなく、私たちは硫黄島訪問の準備と会議の公式日程との時間の都合をつけるために、連日夜遅くまで話し合いを行うようになった。やらなければならないことは山積している。メンバーの選出、訪問に向けての勉強会、宣言文の作製、ディスカッション内容の決定や、同行する日米の報道関係者への資料の用意なども必要であった。

メンバーの選出には二段階を要した。私たちの移動に使う飛行機の収容人数の関係上、全員が硫黄島を訪れることはできないことは分かっており、第一段階で日米それぞれから25名を選出した。日本側はほぼ全員が強く参加を希望したために公平にくじを行い、実行委員は5人が参加、残りの5名は本土に待機することに決まった。「硫黄島での私たちの行動はメディアを通して日米の人々に行き渡るわけであるから、できることなら、英語がうまくて日米関係論に精通している人が硫黄島に行ってほしいと強く願ったが、こればかりはくじなので、ただ結果を待つしかなかった。」と細野恭平（東京大学）は後に述懐している。

しかしながら、会議も中盤にさしかかった頃、報道関係者の数や同行する宮澤喜一氏の護衛の人数などの都合上、メンバーの数を日米それぞれから16名ずつに絞らなければならないことになった。既にタスクフォースを組んで、それぞれが準備にとりかかっていた参加者たちは当惑の色を隠せなかったが、身を切るような思いで、それぞれの側が最終人数16名にまで減らした。「残念ながらいけなくなった人の分も自分ががんばらねばならないと責任を感じた。」（ジェイソン・ヘイズ ピュージェットサウンド大学）この時点で硫黄島訪問団メンバーに決定した32人は、それぞれに役割分担して準備にとりかかった。

勉強会は8月に入ってから京都での2度の休日を利用して行われた。議論を行う際の共通の土台を造るために、硫黄島の歴史についてのプレゼンテーションをレイチェル・プルネット（スタンフォード大学）、青山絵美（筑波大学）、北澤咲弥花（東京大学）らが行い、戦闘の様子を綴った米国海軍の記録フィルムを観た。勉強会と並行して、外務省から入る連絡を元に、現地での役割分担や訪問する慰霊碑などを決定し、また硫黄島で行う議論の準備と宣言文の作製も急がれた。

京都の立命館大学で行われたこれら一連の作業は、想像以上に労力を要するものであった。外務省から伝えられる情報がめまぐるしく変化するため、外部との交渉を担当していた実行委員の細野恭平（東京大学）と海老原憲（早稲田大学院）はその対応に追われた。宣言文は、私たちの会議の総合テーマである

「Reflecting on the Past, Forging Our Future.」の理念に沿って、過去の戦争の教訓を今後に生かし、私たち学生がよりよい日米関係の発展に寄与することを誓う内容とすることが決まった。宣言文の起草はアンドリュー・クローフォード（ウエズリアン大学）とハルミ・フルヤ（ハーバード大学）を中心に、来嶋光江（東京大学）、宮地ゆう（慶応大学）らの協力で行われた。何度も何度も草稿を練り直し、連日の徹夜作業であった。

誰もが、迫り来る訪問日と、自分たちに課せられた期待の大きさ、そしてフラストレーションのたまるミーティングのため、疲れ切っていた。そんな参加者達を精神的に支えていたものは、この硫黄島訪問が少なからず日米の相互理解に繋がるに違いないと思う強い確信と、未知の体験への期待であった。

硫黄島訪問に関する話し合いの中で生じる誤解やフラストレーションから、お互いへの不信感が募った時期もあった。「反論したいことがあるのに、英語で即座に切り返せなくて、悔しくて悔しくてたまらなかった。」と山田亜紀（慶応大学）は当時の心境を振り返る。この時点では、そんなふうに相手に対する疑問や不信感が増してゆくことさえも、本当の意味での相互理解に近づく上では避けられない道であったということに、私たちは気づいていなかった。



広島でのホームステイを終えて東京に到着すると、私たちの緊張は一段と増した。もはや訪問当日まで一週間を切っていた。各人の顔に疲労と同時に焦りが見え始めた。8月15日には下見のために細野恭平と東京で外務省や岡本氏との交渉役をしていた泰松昌樹（日米学生会議OB 慶応大学）の二人が、硫黄島を訪れた。一ヶ月にわたる会議の日程もいよいよ大詰めとなり、その夜には来年度の第48回会議の実行委員を決める選挙が行われ、19名の新たな実行委員が選出された。

ディスカッションの内容は難産の末、安全保障と相互理解の二つをベースにして、最終的には後者でまともにもたせることとなった。学生にしかできないような内容が好ましいと考え、当初は相互理解の根本的な意味を問うようなディスカッションも想定していたが、結局のところ現実的な選択肢として安全保障を最初にもってくることにした。ディスカッションの内容が両国の国民にも伝えられることを考慮すれば、「中途半端で稚拙な中身では失笑を買うことになってしまうのではないか。」と窪田尊（筑波大学院）は危惧したが、それは杞憂に終わった。直前に行った予行演習では、代表ひとりひとりが熱をこめて自前の安全保障論を展開していた。

NHKやフジテレビ、産経新聞などが取材にやってきた。また、出発前日には硫黄島訪問計画に対して最大のご尽力を頂いた岡本行夫氏にも加わっていただき、宣言文の内容のチェックや当日の役割分担、スケジュールの確認などを入念に行った。「いよいよ明日が本番と思うと、高揚する気持ちを抑えるのに必死だった。」

（平野功 同志社大学院）「欲を言えばきりが無いが、自分たちが今日までやってきたことに対して満足していたので自信はあった。」（ローリー・ラル メリーランド大学）

1995年8月18日、出発当日の朝は快晴であった。5時30分にバスが出発するため、まだ暗いうちから滞在先の代々木オリンピックセンターは騒然としていた。直前までかかった準備のために殆ど眠っていない者も何人もいた。「この緊張感とプレッシャーの中で、眠気は全く感じなかった。バスが入間基地に近づくにつれて、どうしようもない気持ちの高ぶりを感じた。」とスーザン・デュバル（ワシントン大学）は当日朝の心境を語った。

東京に残る者の見送りを受けながらバスは埼玉県の入間基地に向かった。時間に十分な余裕を持たせた出発であったため、朝の早い時間、主要道路はそれほど込んではいなかった。今一度眠りにつく者もいれば、新聞に目を通す者もいた。途中、スケジュールの最終確認を行い、バスは入間基地に到着した。いよいよであった。入り口では、バスの両脇を囲った自衛隊員の方々が歓迎のファンファーレを鳴らして下さった。

飛行機の準備が整うまでの時間、私たちはそわそわと時を過ごした。全員に認識票と呼ばれる銀盤のタグが自衛官から配布された。身元確認のための道具であろうが、「こんなモノを渡されていい気持ちはしなかった。複雑な心境だった。」（原田芳衣 早稲田大学）私たちはその認識票を首からかけると、一人一人前を出て、ご同行いただく岡本行夫氏や報道関係者の方々に挨拶をした。普段、会議中は全く日本語を話さないような米国側の参加者までが、このときだけはさすがに日本語で自己紹介をしていたのがおかしかった。

飛行機は予定より15分ほど遅れて準備が整ったようだった。硫黄島訪問に緊張する以前に、自衛隊の輸送機C-130に恐怖する参加者も一部見受けられた。確かに輸送機というだけあって、その内部は倉庫のような作りで、どう考えても人を乗せるようにはできていなかった。前方部には宮澤元首相用の特別シートが用意されており、私たち学生や報道関係者たちは後部ハッチから乗り込み、ハンモック状のシートに一応腰を落ちつけた。

ハッチが閉まり、エンジンの音が徐々に大きくなる。天井のパイプから真っ白な水蒸気が無作為に流出している。クーラーのようだが、一見するとガスが漏れているようで気分が悪い。私たちは鼓動が早くなるのを感じた。旅客機ではないので窓は申し訳程度の大きさでしかなく、しかもシートベルト（あえてそう呼ぶなら）をしている状態では外を眺めることは不可能であった。

廣瀬葉子（東海大学）はあれこれ考えることをやめて目をつぶった。数日前に、来夏の第48回会議の日本側実行委員長を勤めることに決まっていた彼女は、一カ月の会議で出会った仲間ひとりひとりの面影を振り返っていた。無我夢中で過ごしてきた会議中には冷静に振り返ってみることもなかった漠然とした理想、相互理解の実現をめざす、という日米学生会議の信念が今まさに硫黄島に飛び立とうとする彼女自身のなかで急速に形を取り始めていた。



宮澤喜一氏（左端）



岡本行夫氏（中央）

一ヶ月に及ぶ会議中の議論や共同生活は、楽しい思いでばかりでなく、一見すると相互理解を後退させ得る要因となるような様々な価値観を創出した。すでに開会式の前から、両国の実行委員が会議の運営方針に対する考え方の違いをめぐって涙ながらにミーティングをしたこともあった。プログラムの内容をめぐるミーティングでは、両国の参加者間に怒りが爆発したこともあった。硫黄島訪問の準備にあたっては、日本側は何度も悔しい思いを味わった。しかし、振り返ってみれば、これらの経験は全て真の相互理解への序曲であり、乗り越えるべきこれらの体験なくしては、私達の誰一人として「相互理解の実現」という使命の重責を自覚することはできなかつただろう。

一口に相互理解といえども、その言葉を定義することは難しい。何をもちて相互理解とするのか。単に仲の良い友達となるだけでは相互理解と呼ぶことはできない。また、自分の考え方をきちんと表明するのは前提だが、それを相手に理解させただけでは、まだ相互理解を実現したとはいえない。「相互理解とは何か」という問いに、「それは私達がどのように相互理解をしたいと望むか次第だ」としか答えられないもどかしさは残る。それは、私達の現実感覚が問われるという意味でも、かなり厳しい答え方でもある。その一方で、より根本的な問題として、そもそも相互理解というのは実現可能なのか、という問いも依然として未解決のままである。それは、決して大げさな謂いでなく、人類の課題であるだろう。日米学生会議は、私達にとって他でもないこの間に正面から体当たりしてゆく場所になったといえる。相互理解は可能だろうか、不可能だろうか、と頭のなかで理屈をこねくりまわすのではなく、「相互理解は実現可能だ、という事例をつくってみせる！」という信念に賭け、日米両国80人の学生が挑戦したのであった。硫黄島訪問と硫黄島宣言は、そのような信念を、代表団のみならず第47回日米学生会議参加者全員が胸に刻み、また戦没者の霊と日米両国の人々とに向けて宣言し、誓い、共にそのような相互理解への道を歩んで行こうと呼びかける意味を持っていたといえる。

「わたし」と「あなた」の間で培われた友情を一本の糸に例えるならば、日米の間にかかる一本一本の友情という糸が、10本、20本と集まったとき、それは一つの巨大な相互理解という名の橋となって太平洋を結び、両国に、さらには世界に真に友好な関係をもたらすことになるに違いない。相互理解の実現という信念を右手に、そして左手には尽きせぬ希望を携え、日米の学生32名を乗せたC-130は一路、硫黄島へと飛び立っていった。



硫黄島を訪問した参加者

日米学生会議の32人 硫黄島を訪問

戦争を知らない子供たち

「玉砕の島」で 相互理解誓う

日米双方で約四万五千人が死傷した太平洋戦争の激戦地・硫黄島(東京都小笠原村)を訪れた日米学生会議のメンバー32人は、初めて見受る断崖(さんどう)に驚き、慰霊碑の前で国旗を掲げて手を握り合った。大戦前、国民の「太平洋の架け橋」となるべくスタートした同会議は終戦五十周年の夏、「玉砕の島」を初めて視察し、互いの違いを認め合った上で新たな関係構築を誓った。OJとして同行した宮沢喜一元首相は「新たな和解の象徴」と孫のような世代の姿に目を細めた。

(社会部 風間正人)

●数珠を手にも ● 一時間半余。C130輸送機の窓から見た十八日、硫黄島上空は抜けるよう

説明を受けると、三十二人の顔付きは変わった。空海北にある日本戦没将兵の天山慰霊碑。交代で献花などをやる学生たちの中で、ひときり悲壮な表情で合掌した米国人学生、ケビン・サリスさん(カンザス大学)の手には、数珠と仏陀像が握られていた。これは仏教徒で数珠は数年前にいたが、なぜ殺したのか。慰霊碑を前に、「憎しみ

が縁で宮沢夫人となった。子さんと元首相の「洋上のロマンス」とともに、城山三郎さんの著書『友情、力あり』に活写されている。当時の米国は、すでに摩天楼が林立し、底抜けに明るい巨大な文明社会。こんな社会が地球上に存在するのだから、突然と立ち戻った(著書から)。その国との戦い敗れて五十年。今、日本の学生は城山さんの本を大層購入し、必読書にした。

宮沢元首相「和解の象徴」と目細める

な青空が広がり、海と空は木は原色に輝いていた。「事前に勉強してはなかったら、パカンスに来たかっつら、山に登るのイメージは、米国の学生は、そのままするの共通したと思う。た。」「一見してかっこいい。激戦地を物語る形跡はないが、土一枚はがせれば米軍の遺骨、二万一千柱が眠る。米軍の一斉砲撃に山容は変わった」と海上自衛官から硫黄島遺骨を積み上げる稲野恭平さん(左)とジョン・ハーディングさん。

講義した学生たちが「神話化された人物」という宮沢元首相だが、同行中は憲兵以外の米兵を鬼か怪物と見ていた。金思っていたと思う。プロパガンダで人間と人間の関係にならなかつたことが、促されて口を開いた宮沢元首相は自らの体験をもとに、こう結んだ。

「平和を希求した会議も戦時下は親善も友好もあつた。たぶん、やむを得ない戦争の象徴が硫黄島で、同じ場所、戦後五十年、同じ場所、新たな日米の関係が『和解の象徴』として示されたのだと思います」



第47回日米学生会議の総括

日米学生会議主催者 田中 浩

著 田中 浩

第47回日米学生会議の総括

田中 浩

第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩... 第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩...

Ⅲ. 第47回日米学生会議の総括

第47回日米学生会議の総括
検証「第47回日米学生会議」
「相互理解」の理解

第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩... 第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩...

図1 本誌活動の分類



第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩... 第47回日米学生会議の総括... 田中 浩... 日米学生会議主催者... 田中 浩... 著 田中 浩...

第47回日米学生会議の総括

第47回日米学生会議実行委員
海老原 憲

1. 準備活動・本会議の総括

1. 運営準備

第47回日米学生会議は仙台市、立命館大学（京都市）、広島市周辺、東京、硫黄島にて開催され、当初よりの懸念であった資金面など運営準備は多くの方々の協力が得られ、成功裏に収めることができたと思います。第47回日米学生会議の隠れた特徴の一つとして、実に多くの協力を賜ることができたことが挙げられ、その協力なくして今回の成功はあり得ませんでした。協力者の皆様にはこの場を借りて御礼申し上げます。

日米学生会議の実行委員会は一年ごとにメンバーが入れ替わるため、恥ずかしながら引継の点においてこれまで問題を呈したことが少なくありません。第47回日米学生会議の運営においても、この引き継ぐべき情報のまとまりの薄さゆえ、苦勞した経験を持つ我々実行委員の今後の課題として「引継」問題に対処して行くつもりです。

ここで、簡単に運営上の総括を試みたいと思います。日米学生会議では、これまでの長い歴史の割には運営ノウハウがパッケージ化されていないということ、実行委員として常に実感してきました。学生が運営をするがゆえ、素人運営になることは避けられないかもしれません。しかし、学生の身分には不相応かと思うぐらいの大金を扱い、多くの参加希望者を募り、また日米学生会議の理念の伝達を担う責任者として、更なる運営主体の整備・強化は当然のことと思います。この問題についてはわれわれ学生会議実行委員会の中でも多く議論されてきましたが、私にとって一年で体制を整えるように努力することは難しかったと報告せざるを得ません。

毎年同様な業務が行われている割に学習効果が薄いことは、今後の運営への課題であると思います。この面での自助努力を後に続く実行委員には期待するというメッセージを送るしかない自分の無力を感じますが、学生の自由な議論を可能ならしめるためにも、多くの協力者の方々との会話を含め、様々な人から寄せられるアドバイスをきちんと反映させていかねばならないと思います。

2. 企画準備

まず、第47回日米学生会議における本会議での活動を簡単に報告すると、講師招聘の上、学生会議参加者以外の人々を巻き込んでプログラムを作り上げた公開プログラムが2つ、講師をお呼びしての勉強会的プログラムが3つ、地域の人々との触れ合いを求めた企画が2つ、学生同士による内輪的な企画が1つ、そして、一部の参加者によって行われた訪問研修が1つ（図1）と、改めて見直すと盛りだくさんであったと思います。

図1：本会議活動の分類

公開プログラム：科学技術フォーラム、APEC DAY
勉強会的プログラム：Peace Day、Minority Day、日米関係フォーラム
地域の人々との企画：ボランティア・デイ、ホームステイ（広島市周辺）
内輪的な企画：ジェンダー・デイ
訪問研修：硫黄島訪問

それぞれを運営するに当たり、第47回日米学生会議では参加者各自の積極的な参加を促すように、タスクフォースという名の小チームを作成しチーム単位で企画の詳細を詰めることを念頭に置き、日本側は参加者10人と実行委員3～4名からなる3チームを編成しました。積極的に関われる企画が固定するため、当初はこのシステムになじめないものも何人かいましたが、会議開催までにはそれぞれ力を発揮しようと惜しみない努力をしたため、各企画において日本側参加者はリーダーシップを発揮することができたと思います。しかしながら、実行委員の不手際も手伝ってアメリカ側で同様のことが設定されておらず、本会議当初は日本側で最初に生じたことと同様の問題点がアメリカ側参加者との間で生じ、結果的にはそこで争点が生じたがゆ

えに、本当の相互理解の瞬間を体験した参加者が多かったのではないかと思います。

正直に言って、この企画運営は大変でした。理由は主に3つ挙げられると思います。1つは上述のように、日本側参加者とアメリカ側参加者とのインターフェースが取れなかったことが挙げられます。これは、われわれ実行委員が一年間を通して懸念していたことであり、争点とならないように様々なコミュニケーションを通じて日米の実行委員ともに理解してきたつもりでしたが、本当の理解に達していなかったこと、そしてそもそもの会議への参加意図の相違があったことが後に分かり、結果としてはその克服を通じて、企画の中身ではなく共同作業をする上でのこつのようなものを体験しました。

2つ目として挙げられるのが、実行委員の期待していたように参加者の協力が得られなかったことです。参加者は皆努力していましたが、われわれ実行委員は企画に関しては実行委員よりも参加者オリエンテッドな運営を期待していました。しかし、実行委員から見ると受け身の参加者が多く、積極的な行動に至るまでに時間がかかったこと、また、必ずしも専門分野や興味の方が一致しないがため参加方針を見失った参加者がいたことは学生による企画立案の難しさを感じました。

最後に、日米ともに企画立案そのものに強いリーダーシップを発揮する人が少なかったことが挙げられると思います。いわゆる「企画屋さん」が少なかったということです。積極的に参加した数人の学生の間では確実な相互理解が育まれていきましたが、その波についていけない学生にとっては本当に大変な夏だったのではないかと思います。

アメリカ側学生の選抜の仕方について文句を付ける権利は私にはないのですが、私が個人的に疑問を持ったことは事実であり、共同作業をする上での人間をマネジメントすることの難しさを体験しました。今後、更なる高度な議論をするためには、知識偏重型のエリートだけでなく、積極的に泥沼に向かっていこうとするようなクリエイター的な要素を持つ学生を集めることも会議成功へのポイントではないかと思います。

これまでやや否定的な総括をしてきましたが、第47回日米学生会議においてはそのような問題点を抱えながらも、リーダーシップを発揮する数人の学生について皆が協力的なムードを作り出し、本番当日の企画実施に際しては成功をおさめることができたことを報告しておきたいと思います。



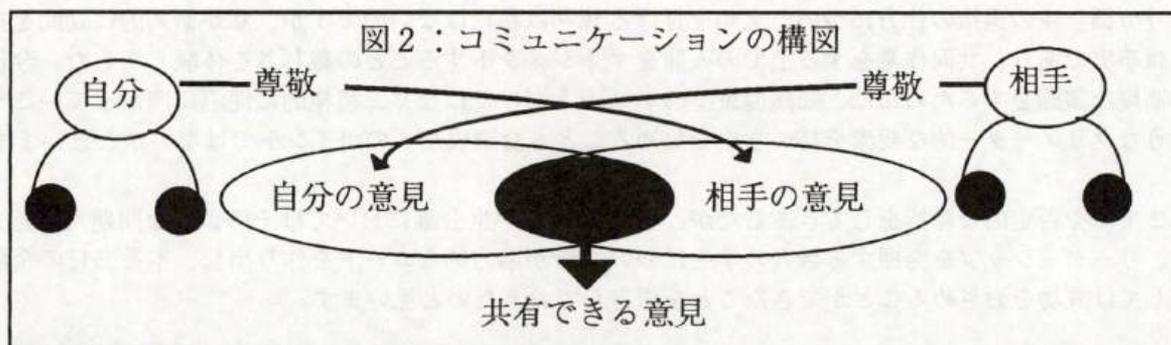
本会議最初の実行委員ミーティング

II. 日米学生会議で学んだこと

1. 外国人との上手なつきあい（相互理解の理解）について

この第47回日米学生会議における最大の収穫は、「相互理解にいたるプロセス」を体験したことではないかと思います。相互理解、特に「外国人との理解」を持つためのポイントとして、米国側学生と共感したのは以下3つの点です。

- ① 自分の意見を必ず表明すること。「意見」というよりは、むしろ「ビジョン」を示すという方がニュアンスとしては近いのかも知れません。絵を描いたり、体を使ったパフォーマンスをしたりして、自分の持つ熱（情熱）を伝えることです。
- ② 相手のことを尊敬すること。いわゆる寛容の精神です。理解するということは自分とは違う部分、そして共感できる部分をはっきりと認識することがまず必要であり、自分との違いは相手の文化に対する尊敬とでもいったらいいのでしょうか、大きな心で認める努力をすることではないかということ、確認し合いました。
- ③ 話し合いは自分と相手との共通点のみに集中すること。そして、どうしたら共感を持つことができるのかということ活動をミーティングの目標に沿いながら創り上げていくこと。（図2参照）



これら3つが、私の学んだ、外国人と上手につき合うポイントではないかと思います。

幸か不幸か、日本という国で普通の学生生活をしているとこの様なポイントに気づくことは少ないと思います。実行委員として俯瞰的な立場からみると、議論をするとついつい自分の意見と相手の違うところを指摘し、自分の意見を押しつけようとしてしまう癖のようなものが我々日本人にはあるのではないかと思います。これはひとえに、外国人との折衝経験の不足から来るものではないかということがこの会議を運営していくにつれ分かってきました。

正直言ってこれは意外でした。言葉（英語）さえしゃべれば相手は自分のことを分かってくれるし、自分も相手のことが分かるだろうと思っていましたし、この様に思っている人が意外に多いことに実行委員をしていて気づかされたのです。この構図では相手に甘えてしまっているということに気づくまで時間がかかりましたし、さらに大変だったのはこの構図に気づいても、それを克服するような行動がスムーズにできないことでした。

後に、中根千枝著「適応の条件」やその他日本人の思考方法に対する文献や、国際交渉に携わった人達の体験記などから、この意外なポイントが日本人に起こりがちなポイントとして明記され、私の上に述べた3点と同様な克服方法を指摘していたことに気づき、多くの先輩たちがこの様な問題点を指摘していることに気づきました。

自分の趣味を話したり、プライベートなことに関してはこの様なことが容易にできますが、安保論であるとか、経済摩擦に対する意見のような、わりとハード（真面目）な話題に関してこの様な点が隠れてしまう傾向を持っていると思われます。これは自分の確固たる思考に基づく意見でないこと、つまり雑誌書物などの受け売りであることが多いことを意味するのみならず、全く異質なものを受け入れていこうとしないように内向きになってしまうことを意味すると思います。その結果感情的に議論が流れる傾向を持ち、日米双方とも、自分とは違うコミュニケーションをしていることで、口には出さないまでも明らかな不快感を感じてしまうのでした。

ただ、念のため言っておくと同様のことはアメリカ人にも多少当てはまります。自分の慣れたコミュニケー

ション・ルールで議論をしていることに気づかないで、不快感を感じてしまうということはアメリカ人側にもみられ、日米どちらが悪いと言うよりは、双方ともに未熟であったのだと考えさせられたわけです。

ただ、アメリカ人は日本人であろうとなかろうと、自分のロジックをきちんと示せば意見の違いを認め、私の意見を理解してくれました。恐らく、人種のるつぼと言われ、事実多くの民族で構成されたアメリカ側参加者は意見の違いを出し合い（これも文献でも触れられていました）そして、その違う意見のうち、最も目的・目標に短距離もしくは効果的に到達できる意見を採用するというやり方を取り、意見が出されたところで、その実行方法について議論がされます。ですから、できるだけ多くの代替案を提示することが重要であると考え、また最終的には採用された意見を言った者がリーダーシップを取る形となりますし、その可能性は全ての人にあるという感覚を我々日本人以上に持っているため、自分の意見が採用されなくても、リーダーシップをとる者に対して非常に協力的でした。

しかし日本人側は違いました。複数の意見が出ることはあまりありませんでした。せいぜい2つぐらいです。ただどちらが正しいのかということについて延々と議論します。これはどちらが実行をする上で、達成しやすいか、あるいは効果が高いかなどの客観的な評価尺度で測るのではなく、意見として「正しいか」が評価の基準となってしまったような気がします。当然意見を申し述べた者はその信念に基づいて提案しているわけですから、他人の意見を飲み込むということは屈辱的なことであると考えてしまうし、目標・目的との接点で話していないために実行結果が必ずしも「正しくはない」ということになってしまう危険性を感じずにはられません。当然その結果、統制された提案を実行するのは一部の者であり、リーダーシップをとる者に対して、アメリカ人ほど協力的ではなかったと思います。

もちろん、アメリカ人参加者全員がそうであったのでもなく、全ての日本側参加者がそうであったわけではありません。これは、積極的に話し合いに参加している者同士の中でのみみられたことで、せっかく積極的な参加態度を示しているにもかかわらず、その積極性がかえってあだとなる可能性を示しているのです。

はっきりとしたことは申せませんが、アメリカ人以外の外国人と理解し合うにも同様だと思います。つまり、まず積極的に自らをさらけ出すこと。そして、さらけ出された相手の主張の背景を尊重することが言葉の問題以上に大事であり、対アメリカ人のみならず、世界中の多くの国の人々にも当てはまると思います。ただし、その背後には意見を提示した後、自分の内にももらず、相手の意見を尊重しようとする、言ってみれば寛容な精神が必要であり、この会議を通して互いに話し合っている目的・目標を常に意識して相手がか不快に感じないように自分のロジック（意見）を展開することの有効性を学んだ気がします。



硫黄島にて

2. 国際交流活動の果たすべき役割

上述の1.外国人との上手なつきあい（相互理解の理解）においては私見を元に展開しました。ここで述べたい国際交流活動の役割もその道からはずれているわけではありません。ただし、これは実行委員という大役を終え、自分が学んだと思うことに加え、他の参加者の意見を総合して展開したいと思います。

国際交流ではいろいろなプログラムがあり、日米学生会議では報告したようなプログラムを行いました。しかし、これらを行う目的とは何かということは今一度考えると、各プログラムで話された議論よりも、一緒に議論をし、その中で互いに心地よい議論の進め方を体験することの方が重要ではないかと思うのです。つまり、各プログラムは所詮相手を理解するプロセスを学ぶための道具だと思っています。どんなに力を込めようがそれは道具であり、本来の目的ではありません。言い換えるならば交流を行うことの戦略を達成するための手段にすぎないということです。ただ、プログラムは手を抜いてよいということではなく、良い道具を使用しなければ良い作品、もしくは良い構想を実現することが不可能なことは想像に難くないでしょう。良いプログラムを創り上げるように自分を投影していくことで初めて道具の性質を知り、国際交流の目的の達成を実感することができると思います。ですから、日米学生会議においては、会議への参加者各自の積極的な反応がどんな場面でも良いから必要です。また、それを通じて集団の中で自分が位置づけられ、相手を理解する以上に相手が自分を理解してくれようとする。そして、「理解」が互いに行われた結果残るもの、それが友情なのではないでしょうか。

基本は日本人同士でも同じです。しかし、外国人との友情作りにおいては日本人同士の際には省いてしまっているところから意識しなくてははいけません。それを知ること、そして恐れずに実行することの喜びを知ること。こういった機会を創出していくのが国際交流活動ではないかと思っています。



III. 歴史に学び、理想の実現へ

「歴史に学び、理想の実現へ」というフレーズは、第47回日米学生会議の総合テーマでした。今回、日米間のみならず日本と世界の間、しかも最前線で活躍されている方々との接触を持つことができたことはそういったことから幸運でありました。われわれは日頃、大学というある種隔離された環境で国際的なことを話し合っても、今一つ現実味を持たないのは、学校で学べることは客観データとその読み方が主流であり、そこから一歩先んじてなぜその行為主体がそのような行動をとったのか、或いはそれに関わった人の思い入れとは何なのかということについて知ることは難しいと思います。

多くの協力者の方々とのお話の中から、私は彼らが皆日本のことを大切にしていることに改めて感じ入り、歳取ってもなお止まぬ行動力の凄さを何人かの方々より感じる事ができたことは、大変幸運だったと思います。歴史に学ぶ、あるいは歴史を知るためにはまずその歴史を作ってきたのが人間であることを忘れてはいけないと思います。しかもそれは特別な人間ではなく、様々な人の想いが交錯して出来上がったものであるということ、そしてそこには多くの人々の情熱が埋まっていることに注目しなくては歴史を学んだとはいえないのではないかと考えます。

ですから、歴史を正しい、間違っていると簡単に決めることや、少なくとも教科書レベルの知識のみで決めてしまうことは気を付けなくてはなりません。大事なのは自分にとって、先人達の智慧がどのように生かせるかを考え体得し、そして各自の持つ理想を実現するときに、まっしぐらに突っ走ってしまうのではなく、一度ぐらひは踏みとどまって考え直すことであると、この体験を通じて考えさせられました。

「歴史に学び、理想の実現へ」という言葉は、過去に起こった事件や事実或いはその感想など、歴史のデータベースを作り上げることに主眼があるのではなく、データベースを超えた智慧の部分を、先の見えない未来・或いは理想を描く際の手助けとし、志を同じくするものを中心として、各個人の個性を尊重し合うことで生じるチームワークに役立て、不確実なものをつ一つなくしていくことを意味していると、第47回日米学生会議を一年にわたり運営してきた結果、さらに強く思います。



第47回日米学生会議では、その入り口の方法論を体験的に学習できました。参加した学生はこれから、そこで蓄えた智慧を活かし、また後に続く人達へ伝えながら理想の実現に向け貢献しようと努力を惜しまず、歴史を創っていくことを日米で共有し、会議を終了することができました。

検証「第47回日米学生会議」

第47回日米学生会議実行委員

山田 通代^{ほか}

I. 社会とJASC

60余年の長い日米学生会議の歴史の中で、しばしば指摘されてきたこと——それは、日米学生会議そのものに対する両国関係者の異なった認識、つまりJASC観の違いである。「違う」ということについては語り継がれて来ただけに、第47回日本側実行委員もその存在を承知していた。しかしわれわれは、この報告書を通し、単に「違ったから難しかった」と感想を述べるにとどまらず、日米学生会議での「違い」の経験を切り口に、日米社会の相違点と、学生会議のような企画と社会の関係について考えてみたい。

日本側実行委員が直面した「社会への壁」

第46回日米学生会議——われわれ第47回日本側実行委員10名が最初に参加した会議は、両国隔年開催の慣例によって米国で開催された。夢のような会議。夢のような1カ月。これがわれわれの会議のイメージであった。対立、議論、新しい発見。学生として何にも縛られず、自由に語り、抱き合い、泣き、笑う。両国の将来に少なからぬ興味を抱く若者が、やりたいと思うことはほとんど何でも好き放題にできる会議であった。その場所が米国であったために。

実行委員に選出されたわれわれは、日本での新たな夢の会議を思い描いて帰国した。しかし、帰国当初、会議開催の施設探し、財務活動、賛助・協力者探しは困難をきわめた。寄付一つもらうにしても米国のような税制が敷かれていないこともあって、減税対策にもならない無償の、それもすぐには投資効果が出ない学生会議への援助は、バブルも去ったこの不況の中、当然のことのように敬遠された。80人の学生が1カ月の間、寝食を共にしながら各地を行脚して会議を行う。膨大な予算。対象が学生であるから、参加者に多額の参加費を要求することはできない。「学生の会議は学生らしく、米国開催のように学校の施設を使うことで、費用の削減を図ろう、またそのほうが、会議に適した部屋や図書館もあるし、安くてボリュームのある食事もできる筈だ。」そう思っても、われわれを受け入れてくれる大学を見つけることまでもが無謀な挑戦であったのだ。

これらの困難に直面して、日本側実行委員の会議観は一変した。現実を受け入れない限り、47回会議の実現が不可能であることを実感したからだった。夢のような会議をしたいのはやまやまだった。しかし、それでは前に進めない。

「学生のお遊びに投資はできない」とでも言わんばかりの苦言を頂き、われわれは奮起した。お遊び？日米の将来を真剣に考える「柔軟で若いアイデアをもった」学生の挑戦を遊びというのか？投資価値なしというのか？実行委員の脳味噌は全開状態になった。社会との駆け引きが始まった。彼らのサポートなしに、学生会議は実現できない。では彼らをどのように納得させるのか？学生の限界への挑戦だった。日本社会はわれわれに何を求めるのか？学生にしかできない価値あることは何か？学生のアイデンティティー探しの戦いが始まった。企業にも、政府にもできない何かをわれわれがエージェントになってやってみせる。日本側実行委員の志気は高まった。彼ら社会人を説得するには、彼らのやり方を覚えるのが先、とビジネス書を読み、企画書、依頼書、ビジネスレターの書き方、ビジネスマナーを覚えていった。財務活動、協力者探しの活動は、社会への説得活動であった、ともいえるだろう。使命感も湧いてきた。選ばれた日本側代表としての誇り。日本の代表として、この会議を、どんなことがあっても、成功させなければならない。日米学生会議の伝統の重みをかみしめ、戦前から継承されてきた会議への数々の支えに感謝しつつ、われわれ日本側実行委員のJASCへの思い入れはさらに強まった。弛んだ大学生活とは裏腹の、緊張感に満ちた社会との接触。普通、大学卒業までに、インターン制度などを通じた社会との関わりを持たず、学生を一から企業が育てる形式の日本社会において、「普通の学生」をやっていたら決して経験できなかった社会との接触は、われわれに一種の充実感、誇りと責任感を抱かせた。



日米間でのJASC観の違い

日本側は会議創設者の一人、板橋並治氏が理事長を務める財団法人国際教育振興会の保護のもと、会議の企画・運営はすべて実行委員に委任され、財務活動などの活動を展開するのであるが、米国側は、財務・経理等の事務管理は専任職員を擁するJASC Inc.という団体が、政府・学会・ビジネス界の援助を受けながら運営している。米国側実行委員は、日本側のように、学校の授業を休んでまで財務活動に走り回る必要もなく、厳しい大学の授業に専念できる代わりに、日本側実行委員が財務活動を通じて得たほどの社会認識、社会勉強ができるわけではなかった。当然、両者の間には認識のギャップが生まれた。少なくとも、米国側には、「学生にもこんなことができるんだ、価値ある行為を社会に提供できるんだ!」と声高に叫ぶ必要はなかった。日本開催時に日本側実行委員が日常生活を犠牲にするほどの作業を、米国側実行委員は行わなくて済むわけである。米国社会は、こうした学生活動・異文化理解や環境問題等を扱う社会貢献活動全般に対する理解と支援の体制を整えているのだ。

われわれ日本側実行委員の活動は、米国側との認識の差や、それに伴うフラストレーションを生み出したが、また、何者にも代え難い経験を提供してくれたことは事実だ。しかし、ここで、触れておかねばならないのは、社会が学生に何を求めるのか、ということである。どんな学生に価値を見いだすのか。われわれは、この会議の実現のために、しばしば、学生の本分である学業を犠牲にせねばならなかった。授業を欠席して財務活動へ出かけねばならなかった。そこで得た経験がどれだけ貴重であれ、この現実には考慮されてしかるべきである。空洞化し、アカデミズムと厳格さを失った日本の大学の枠を超えて、生活の中に何か刺激のあるものを見だし、大学生としての自分たちの限界に挑戦したかった日本側実行委員。日本社会が大学生というものの生かし方を考える上でのヒント、そして、学生が社会と自分の関係を再考する上での材料がここに見えるのではないだろうか。

公開企画「APEC DAY」を通じて

以下は、第47回日米学生会議実行委員会が関西地区を担当した田中と山田が、本会議の公開企画の一つであった「APEC DAY」の企画を手にも、東京の実行委員のメンバーの協力のもとに行った活動から得た事実とその分析である。

「バブルは崩壊した。日本の大学生は、のほほん、と遊んでいるという一般的な世間の認識がある。そんな状況下で、たとえ伝統と歴史に支えられた日米学生会議も、その意義を問い直すことを迫られていた。なぜ今、このような会議を、多額の予算を計上して行わなければならないのか。この世の中の誰が、学生のお遊びに、支援をして下さるのか。」本企画は、上記のような「現実」に直面した第47回日米学生会議日本側実行委員会が、第47回日米学生会議が目指すべきものを模索する中で産み出した企画である。

94年夏から95年初頭における日本国内の政治・経済状況は、日米の二国間関係というよりも、新しい国際社会の胎動、つまり、アジア太平洋ブームともいえるべき流れが顕著であった。世間に出回る各種の情報から、われわれなりに時代分析をすると、約50年前、日米交戦状態になろうかという時に、両国の学生が共同生活をしながら会議をし、戦争への道をくい止めようとしたあの頃とは、会議の持つ意味・性格が変わっていることは明らかであった。「日米関係? まあまあいいんじゃないか。それより、君たち、やっとここまで来たんだ、日本も、アメリカだけではなくて他の国や地域のことにも関わりを深く持つべき時が来たんだよ。」「アメリカ人と夏休み、共同生活? サマーキャンプかね? 今じゃそんなことはお金さえ払えば誰だって経験できる。君たちの特殊性は何だね?」こんな声が聞かれた。どうするのか、本当にわれわれは、現在、存在意義を持った学生団体であるのか? そんな自問自答をしながら、実行委員の苦闘は続いた。企画書を書いた。ビジネスプレゼンテーションの本も読んだ。何が評価され、日米学生会議という組織に意味付けをしてくれるのかを考えた。それが達成されることは、世間が抱く「学生には何もできない」という認識と、学生が抱く「社会の厚い壁の前で学生は無力だ」という自己認識を突き崩すことを意味した。私たちにだってできる。学生とは、企業も、政府も、どの教育機関もできないような役割を果たせる可能性を持つ。学生が、そのア

イデンティティーを追求しながら作り上げる企画は、他の何物にも代え難い価値を提供するはずだ。それに、企業が、経済団体が、財団が投資することには、確実に意味があるはずだ。——そうして実行委員は本企画の動機、目的、効果を書いた企画書を手を、関西地区各所を駆け回った。企業の会長室で模造紙と企画書を使い、息継ぎする暇もなく行った緊張のプレゼンテーション、煙草盆を前にした経済人との会談、そして、大銀行の一室でわれわれの言葉に要職者の首が縦に動いた瞬間。やがて全てが順調に動き始めた。何のコンセプトもなく、単に会議の楽しさを知る経験者の雑談だけでは、手強い社会を動かすことはできなかったのだ。山は動き始めた。APECという、今という時代と関西の地域性に合致するものを扱い、そこから現代の日米を理解しようというわれわれのコンセプトに対し、多くの人に関心を寄せて下さったのである。



Ⅱ 対立から「相互理解」へ

日本側は、実行委員の昨年の会議の経験から、参加者が自分の興味に合わせて勝手に企画づくりのグループに参加すると、本会議中に、各種の準備会議の時間が重なり、ミーティングが機能しない、という弊害を懸念した。そこで、仙台・京都・東京という地域ごとに企画グループを作って参加者を割り振り、そのグループの単位で各地域2~3個のプログラムについての企画を行うという「リージョナルタスクフォース制度」を導入し、本会議中の度重なるミーティングでの疲労と、Overcommitment で結局どの企画にも集中できない、という状況を避けようとしたのだった。これは、日本人参加者に、学校での専攻と企画との距離による戸惑いを与えはしたが、「少々自分の興味のないことでも、何か学べるかもしれない、この機会に大いに見聞を広めよう」という姿勢によって克服されたように思う。

本会議、日本側と米国側は茨城県猿島郡に集った。数日間の合同オリエンテーションでお互いを知り合っ

てまもなく、それは、本企画会議を始めようという時であった。

「えっ？米国側は、参加者を地域ごとの企画グループに分けていない？」

「あれほど米国側実行委員には説明してきたはずじゃないのか？」

早速、米国側実行委員に事情を聞いた。最初は、曖昧に、グループ分けをしなかった事実を説明していた米国側委員の一人が、徐々に本心を明かし始めた。

「日本側の言いたいことはわかる。でも、このシステムでは参加者が納得しないと思う。一応ここへ来るバスの中で、僕らは、タスクフォースリストを作ったけど、それは、参加者の興味に合わせてアンケートを取ったあとで、日本側のことも考えて無理矢理彼らを地域ごとにグループ分けしたものだ。」

日本側実行委員は呆気にとられた。

「なぜ？46回会議であれほど非効率なミーティングの状況を経験した彼らが、その欠点を改善するための日本側案を、今になって拒否するのか？」

その日の「リージョナルタスクフォース」会議は強行された。問題が起きたのは、「Gender DAY」「科学技術フォーラム」の企画の詰めを行う仙台地区ミーティング、「APEC DAY」「Minority DAY」「Volunteer DAY」の企画を抱える関西地区ミーティングにおいてであった。

関西地区ミーティングには、米国側は20名ほどの学生が参加。多数の学生が集まった理由は、関西地区開催企画としてMinority Dayがあるためだった。米国側のある参加者がこう言った。

「あのミーティングに集まったアメリカ側の参加者に、APEC DAYに興味があって参加している人はほとんどいないよ。」

言葉を失う暇もなく、第1回の企画会議は始まり、すぐに日米の認識の違いがあらわになった。実行委員同士の応酬。

「なぜこんなことに？」

その間、両国の参加者は両国実行委員の口論と、先行きの見えないミーティングの前にただ無意味な数分を過ごす羽目になった。その後、ある米国側参加者が日本側実行委員にこう告げた。

「APEC DAYに興味のある参加者がいないわけではない。ただ、彼らは、他地域での企画にも興味があった。日本側は一人を一地域のタスクフォースに入るよう求めたから、彼らは、しかたなく、第一希望の企画のある地域のミーティングに参加しているんだ。だってそうしなきゃいけないからじゃない？」

確かに、APECに興味がある参加者は、東京で行われる予定の日米関係フォーラムにも興味があるだろう。また、仙台のGender Dayにも興味を持つかもしれない。愕然とした。その後米国側実行委員のある者が言ったこの言葉が頭に焼き付いている。

「米国側は、自分の意志に反して、ある企画やある地域の仕事に無理矢理グループ分けされるのを自由の剥奪と感じるのだ。」

「それに興味のない人が企画を進めるよりも、その企画に能力が十分に生かせる人間が、その企画に携わるほうが、絶対に良い物が出来るはず。」

自分の興味と多少ずれるタスクフォースに入ることになっても何の文句も言わず、それどころか、そこから、何とか何かを学ぼうとして葛藤した日本側とは大違いだった。その後、実行委員会会議を重ねた末、日本側は、地域タスクフォース制をそのまま維持し、米国側は、興味にあわせて各企画に参加することになった。各ミーティングの重複をさけるため、各企画会議は違う時間に行うことを原則とし、そのため、米国側参加者で複数の企画会議に夜遅くまで参加しなければならない者も出て、体力的・精神的フラストレーションを引き起こした。米国側の実行委員や参加者のなかには、なぜ、日本側が公開企画などというやっかいで大きなものにあえて日米学生会議で取り組むのか、何故、夜空の下で、おおらかに語り合う時間を割いてまで、公開企画を中心とした企画ミーティングに夜中まで時間をかけなければならないのか、納得のいかない者も多かったようだ。これには日米のJASC観・日米の社会の構造の違いが関わっているのは確かであった。しかし、違うからといって、米国側の思う通りにしていけば、今始まったばかりの会議は途中でつぶれてしまう。外部からの参加者を招き、地域社会からの期待も大きい公開企画の意義についての長い長い説得や度重なる議論を行い、参加者は、何とか企画の実現に向けて、日米一体となってやっと動き出した。当日配布のパンフの共同製作、司会者の原稿づくり、講師との事前打ち合わせや接待、当日の外部参加者の名簿管理、グループディスカッションのリーダーと議論の方針決定、当日のバス・食事手配・ゲスト参加者宿泊関連の雑務・企画前日のオリエンテーション・報道関係者への対応・プレゼンテーションの為の設備手配・本企画への賛助協力団体への挨拶まわり……。Student Presentationの共同準備や自主的な勉強会・リサーチも行われ、睡眠もままならない状態であった。こうした企画に付随する膨大な作業を、分担したり、共同作業で行った。

仙台地域ミーティングでの対立も、関西のものに似て、米国側の「自由の剥奪論」の主張と、日本側の、現実を考慮した「思いやり役割分担論」の対立であった。この地域ミーティングでは、非公開企画「Gender Day」の準備において問題が噴出した。日本側は、この企画の為に、大変な議論を重ね、改善を加える準備活動を行った。企画担当の日本側実行委員曰く、

「振り返れば、日本人独自の、きちんと間違いのないように事前に準備しておかなければ不安だ、という感覚（問題がおこれば応用を利かせて何とかその場を切り抜けよう、という感覚はあまりない）と、全会議日程の中で最初の企画であるということからくる意気込みもあったと思う。」

日本側は米国側が、日本ほど準備活動に時間が割けないのを知っていた。この会議は「日米」学生会議である。もちろん日本側だけで企画作りをしないよう、米国側に対してそれなりに配慮した。後から思えば、これは、日本側が、日本側の論理で勝手に考えて与えた、米国側への「お膳立てされた自由」だった。

「何故こんな時間だけが与えられてそこだけを考えなければいけないのか？」

「良い企画は、こんな決まりきった構成からじゃなくて、皆の自主的なアイデアや感情、経験、わき出てくるものから作り上げられるべきだわ。こんなお決まりに、どう従えというの？この会議は日本側だけのものじゃない。私達の準備活動は始まったばかりなのに、日本側は米国側が、企画づくりに参加する権利を奪うのか。」

日本人にとっては、相手の意志を汲み、何も言わずに配慮する、ということが一種の美德である。当たり前前で、何の違和感もない。かえって配慮することを、「これでいいですか？」と相手に確かめながら行うことは、自分が相手に対して行う行為を「見せつける」ことにもなりかねず、陰徳をよしとする日本文化においては敬遠される。日本側参加者は無意識のうちに、「日本人らしく」振る舞っていたのだった。日本において、相手を察して配慮しても、問題が起こらないのは、やはり日本が、米国と比較したときに、相対的に同質的な社会であることが原因であること、これが経験によってわかった。

「よかれと思ってしたのに。頑張ったのに。今までの努力はどこに？」

日本側からはこんな声が聞かれた。

結果として、「APEC DAY」と「Gender DAY」は、両国の相互理解のもとに成功を収めた。この2つの企画を通してわれわれが学びとったことは、日本側が米国文化に対する認識が甘く、また、日本側の論理を、無意識のうちに押しつけていたこと、また米国側が、実行委員らを通じ、日本側がどのような思考・意志決定を行うのか、といった異文化理解に対する参加者の認識向上を図る作業を怠ったり、日本側の直面していた会議環境への理解が不十分だった為に、共同作業を行うときになって対立が避けられなかったということである。（米国側は、日本に来る前のオリエンテーションで異文化理解のためのセミナーを受講してきた。しかし、皮肉なことに、既に、その時には、この日本での会議での対立は不可避なものとなっていたのである。） 今後、両国実行委員は、準備活動において、相手側実行委員との信頼関係をさらに深めるとともに、事前に現代日本（米国）人の意志決定方法や特性を理解しておくよう努めるべきであろう。対立は、われわれが経験したように、ある程度は乗り越えられる。しかし、激しい対立を経験した後、その相手との深い信頼関係を築き上げるのは困難を伴う。前もってできるのならば、両国の学生が、アカデミックな企画に関する専門書を読んだりするだけでなく、その根本に流れるお互いの文化を知るための準備をする必要があると思う。学生会議の企画に限らず、日米の政府間交渉や日米の企業間取引の場においてもこのような問題は頻繁に起こり、対立や、相手の文化に対する誤解や偏見を生み出しているのではないかと思う。そうした困難に直面したとき、単に相手を責め、自己の正当性を主張するだけでなく、なぜそのような状況が引き起こされたのか、ということ、当事者間で、腹を割って議論することが重要である。信頼の醸成・構築はそこから始まり、そこから利益を得るのは、まさに理解への努力を惜しまなかった当事者なのである。





「相互理解」の理解

第47回日米学生会議実行委員

藤本 まどか

会議中の「相互理解」体験としてよく語られることに「文化や言語の壁を超えて、互いの人格にふれあうような交流ができた」ことの喜びがある。また多くの人が、誤解、いさかい、没交渉などの、「相互理解の不成立」を体験したとも語る。しかしそれらの体験も「誰さんとこんなことがあってね〜」という思い出の言語で語られるうちは、まだ内在化されるに至ったとは言えないようだ。そこには、体験された興奮や感傷、怒りや悲しみがぶりかえしてくることはあっても、感情の呪縛から自由になった「醒めた目」はまだない。

私たちの、相互理解への理解は、今もなお刻一刻と変貌を遂げている。会議後半年に満たない今、私たちの多くが、まだ「目を醒ます」途上にいるのであり、その歩みのベクトルも人それぞれであることは言うまでもない。この報告書は、そういう意味では、相互理解の理解へと至る私たちの歩みをより自覚的に見つめようとすることによって、様々な理由から「思い出」のままに放置してしまいがちになるあれらの体験を、未来に向かって開いていく試みと言えないでもない。

もちろん「相互理解」への理解、または定義は決して一義的ではありえないだろう。一ヵ月にわたる会議中、そこには非日常的な空間が演出され、私達は驚きと、喜びと、戸惑いのなかで、何か普通でない人間関係を体験することになった。思い起こせば、良きにつけ悪しきにつけ、私達はこの会議中に、実に多様なコミュニケーションの様相を体験したのだった。中でも特に、文化や言語、組織内での立場の違いなどによって経験された数々のコミュニケーション・ギャップは、各人の相互理解観へ挑戦を突きつけた。

会議終了後の十月には、この報告書を作るに当たって、最後の「理念合宿」を実行委員が行った。その時点では「相互理解の達成とは自分の流儀を相手にわからせることではない」という当時の私たちの新しい「発見」がもっぱら話題にのぼり、今回の報告書にも、最低限そのことは実行委員からのメッセージとして記しておいてよいのではないかということになった。陳腐な、という冷笑は甘んじて受けるとしても、ある期間を会議から離れて生活したことにより、絶望的にもつれていた感情の渦から紡ぎ出された「ことば」の重みにはそれなりの意味があると考えらる。

私たちの相互理解観をゆさぶるような何が会議において何が起こったのかということ、エピソードとしてここに展開すれば分かりやすいのかもしれない。しかし今、それら個々のできごとを敢えて振り返り詳らかにすることに、どのような意味があるだろうか、と問うことの方が、現実的のように思われる。私たちは、私たちがあのかき感じたままを、いかなる意味でも脚色せずに自分自身に語ってやることができるだろうか。相互理解の理解について考えるとき、どんな迂路をたどっても私たちはこの問いに行き着くからだ。

分かりやすいようなことからは実は何事も分かりはしない、という屁理屈を真面目にこねることは、何かが分かったつもりになることほどには害はないと思われる。もし私たちがあのかき感じたままを、いかなる意味でも脚色せずに自分自身に語ってやるのが可能であると感じるならば、それは目が醒めつつあることの証であり、理解の始まりがそこに来るのだろう。もしそれができないと感じるならば、私たちはせめて何も言わずに、自分の感じたことをよくよく思い起こし、そして感じたそのままの形で大切に覚えておく方が、ましではなからうか。

相互理解のプロセスを体験することは自己理解を助ける、と私たちは知っている。JASCでの体験が貴重だと言うときに、私たちは大抵そのことを念頭に置いているものである。それは日本人としての自己理解、という文脈で語られることもあるし、個人の問題の場合もある。そして私たちが、自己理解するということ、をどのように理解し、またその結果どのように自己理解するかということが、会議の終わった今、相互理解を理解する上での次なる問題となってきたにちがいない。そういうわけだから、思い出を語ることはどのように自己理解を助けるだろうか、あるいは助けないのだろうか、と問うてみるのは無駄ではないだろう。

数多くの貴重な問いを、問うことができるのは幸せなことだ。そしてこれらの問いが、61年間で47回の会議を実現させてきた、日米学生会議の多くの参加者たちによって共有されていることを思う。ひとつひとつの問いが階段のステップのようなものであるとすれば、それは、深みに下ってゆくにせよ、高みに昇ってゆくにせよ、一段先の見えない階段のようなものではなからうか。今足元にある問いから目の前に一步を踏んだとき、はじめてその次が現われる。問いを飛び越すことはできないし、なによりもまず、次の一段がそこにあると信じるのでなければ先には進めない。孤独な営為であるからこそ、どこかでやはり自分と同じに問を踏みしめているであろう仲間を思うことは、心のなかに希望を絶やさぬためにも必要なことなのだ。階段が伸びゆく先は誰にもわからない。それでも、「どこかへ！」と念じつつ踏みしめるその新たな一步の他に、私たちJASCerがこの社会に貢献できるものを、私は知らない。

私が見たアメリカ、1995年夏

北澤 咲弥花

IV. 会議を振り返って

私が見たアメリカ、1995年夏

北澤 咲弥花

相互理解

藤本 直子

日米学生会議と平和創造

来嶋 光江

日米学生会議が平和創造にできること

大沢 枝里子

世界の中の日米関係

難波江 功二

世界の中の日米関係

平野 功

憧憬

細野 恭平



私が見たアメリカ、1995年夏

北澤 咲弥花

第47回日米学生会議での一ヶ月間を、簡潔に言葉に表すことは私にはできない。

空港で互いに再会を誓って別れてからほんの二ヶ月。それなのに今、私の心の中でのあの時間は、遠く懐かしい日々のように感じられる。そこだけ空気が違うみたいだ。まるで、その形も色も抱いた感じも、頬を埋めたときのおいさえもありありと覚えているのに、決して触れることのできない子どもの頃大切にしていたぬいぐるみのようだ。

そう、何一つ忘れてはいない。毎日が新鮮な発見と快い緊張でいっぱいだった。思いつきもしないような発想に、目を見張った。次々に気付く一人一人の魅力に、釘付けになった。その度ごとに、決して忘れないように一つ一つ心に大切にしまった。

そして、毎日がまた、もどかしさと戸惑いと躊躇の連続でもあった。やりきれない思いを数え切れないほど重ねた。

そうして私は何を学んだのだろうか。参加者それぞれにJASCはなにかを遺したはずだ。私には何を遺してくれたのだろうか。そんなふうに考えて目を閉じていたら、大切に心のなかにしまったはずの1995年の夏が、再び甦ってきた……。

こぼれんばかりの笑顔浮かべてアメリカ側参加者が到着した日のことを思い出す。気さくで、大声で話す彼らが広間に陣取った瞬間、日本側の誰もがこれからの一ヶ月間を思って期待に胸を高鳴らせたに違いない。

一方で同時にそれは、私に得体の知れない不安を芽生えさせた瞬間でもあった。

様々な肌や瞳や髪の色を持つ学生たちが、英語で意思を伝わしている。アメリカだ、そう思った。がっしりした体格のAfrican-Americanの男の子、ブロンドのIrishの女の子、華奢なKorean-Americanの女の子……私たち日本人に比べてその外見の多様性はやはり圧倒的だ。そうした人々が一つの国から来ている、という事実を冷静に見れば、日本ではほぼ同義と扱われている「国民」「人種」「民族」の概念が見事に分けて捉えられていることに気付く。すなわち、彼らに共通するのはただ一つ、アメリカ合衆国の国民であるという事実のみなのだ。（しかも、10年以上も住んでいるにも関わらずアメリカ国籍を持たない者もいた。）当たり前前に認識していたはずなのに、改めてこうして見せつけられると、初日だというのに早くも私はめまいをおぼえた。

なにをもって「アメリカ」「アメリカ人」を定義できるのか。

そもそも、そうした概念は実在しないのではないだろうか。

「アメリカ」を一つにくくろうとすること自体が、誤りなのかもしれない。

こうした問いかけは、会議が進むにつれて、ますます私を悩ませた。そして今も、完全に解決したとは言えない。だから、このエッセイでも、「アメリカ人」「日本人」という表現をすることがそもそも適切ではないかもしれないが、ここではあえて、「アメリカで育ったこと」「日本で生まれ育ったこと」という曖昧な定義をもって「アメリカ人」「日本人」としたいと思う。

「日本人とアメリカ人が理解しあうことなど、根本的に不可能なのかもしれない」

時にはそうやって弱気になっている自分がいた。

まさか、こんな疑念を抱くようになるとは、思ってもみなかった。やるせなかった。気の合うもの同士で他愛のない冗談を交わして苦しいくらい笑っているとき、プログラムに向けてのミーティングで真剣に議論しているとき、私の心の深層では常に葛藤があった。柔軟な発想、真っ正面から相手にぶつかってくる明快で深いコミュニケーション方法、逡巡や余計な気回しのない快活な屈託のなさ。そうした彼らのまばゆい輝

きに私は圧倒され、そして私は彼らをためらうことなく瞬時に愛した。同時にもう一人の自分がいつも私を冷やかに見つめていた。うわべだけのお喋りなど無意味だ。どんなに笑おうと、政治経済について深く議論しようと、私の疑念は晴れないだろう。このまま一ヶ月過ごしてしまうつもりなのか……。

アメリカに触れたのは初めてではなかった。実際に住んでいた経験から、また過剰と思えるほどに大量に存在する「アメリカ論」の書物から、いわゆる「アメリカの特殊性」はある程度理解しているつもりでいた。そのはずが、ふたを開けてみればこうして苦しんでいるのである。情けなかった。

漠然とした違和感が表面化する瞬間、私たちはなすすべもなく立ち尽くすのが常であった。

「ジェンダー・デイ」「マイノリティ・デイ」のために数カ月前から関連する社会問題を学び、ミーティングを重ねてきた日本側だった。しかし当日、アメリカ側の数人の参加者によって、肉親の同性愛やレイプ、人種差別を直接体験した告白が続けざまになされた。感情をあらわにして辛さや怒りや哀しみを全員の前で吐き出す彼らに、そして涙でその告白の勇気をたたえ、両手をさしのべて抱き合うことでその苦難を分かちあおうとする他のアメリカ側参加者に、私はどうしようもない違和感と、おそらく一種の疎外感を覚えずにはいられなかった。

彼らが間違っているとは思わない。

ただ、そこにあるのはわたしの入ってゆけない、入ってはならない世界だ。



彼らの苦難を想像し、同情することはできても、そのすべてを理解することはできない。感情の波に流されて涙を流し、彼らを抱きしめることはできても、それが何になるだろう。母親が同性愛者であるという事実や、彼らの縮れた髪、濃い肌や瞳の色を「望ましい」かたちへと変えることなど私にはできようもないのだ。JASCは永遠には続かない、しかし彼らの苦しみは続くのだ。かりに自分の中ではすでに乗り越えた苦しみであったとしても、問題の本質は未解決のままアメリカ社会をこれからも蝕んでゆくに違いないのだ。自分の無力を思い、一方でアメリカ社会に巣くう問題の根深さを思うと、やりきれない気持ちで胸がいっぱいになった。もちろんそれらは日本にも存在する問題ばかりではあるが、それにしてもこれ程まで身近に体験



者がいるという事実にはまず驚いた。しかしそれにも増して、味わった苦しみを多くの赤の他人に向けて表現する彼らの行動に私は困惑した。相手は涙を流すかもしれない、しかし決して自分に代わってその苦汁を嘗めてはくれないことなど明白だ。それほど苦しい、そしてぶちまけることで何らかの解決になるというのだろうか。聞く側も聞く側で、どれほどの苦難であったのか分かった上でそれでもやはりその苦しみを受けとめる自信が、あるとでもいうのか。そして、激しい感情の吐露がおさまると、また何事もなかったかのように陽気で楽天的で開放的で笑顔絶やさない彼らを見て、ますます私の疎外感は深まるばかりであった。

こうした傾向は毎日の生活の端々に表れた。彼らは何でも言葉にしようとした。無言で相手の意をくみ取ることよりもむしろ、言葉にして誤解のないように伝えようとしているように見えた。しかし、言外の意味や無言の了解のようなものが当然として存在するという私の、そしておそらく日本側参加者の大多数の認識に照らし合わせれば、アメリカ人の言葉の使い方は時として不必要で軽率に映った。

しかし、こうした疑問を的確に彼らに説明し、誤解のないように伝える自信も切迫した必要性も、私には十分に感じられなかった。JASCでの日々にはそんなもやもやを忘れてしまうような勢いで刻一刻と過ぎ去り、一瞬一瞬が輝きにみちてもいたからだ。しかし、会議日程も折り返し地点にさしかかる頃、私は自らに問いかけた。私はなぜJASCにきたのだろうか。こうして楽しくアメリカ人と団体生活をただ何となく送るためでは決してないはずだ。もっと率直に話したい。疑問をそのままぶつきたい。分からないのなら分からないと伝えたい。それによって生じるかもしれない亀裂を恐れてはならない。そして私は、思い切ったある女の子に聞いてみた。感情を多数に向けて吐き出すことで何をしようとしているのか、聞き手は何を思っるとともに泣くのか。彼女は答えた。私たちアメリカ人は、周りの人々が何を思い、何を恐れ、何を信じて暮らしているのかを知っておかないと不安なのだ、と。アメリカにはいろいろな人がいるから、仕方がないよと笑った。彼女の答えはすぐに私を納得させるものではなかったが、その夜私は一人ベッドの上で考えた。そして、ある文学作品の英訳を思い出してあることにはっと気付いた……。

みじか夜や毛むしの上に露の玉

蕪村

この句は、一見すると「毛むしの背中に露がおりている」という視覚的情報しか与えていないようであり、実は多くの言外の意味を含む。「みじか夜」から私たち日本人は自然に夏の夜を連想する。もちろん細かい解釈は十人十色であろうが、日本で生まれ育ったという意味での「日本人」ならばおそらく、ある夏の夜、毛むしの背中に無数の小さな水滴がついているさまを想像するであろう。そしてその一種滑稽な姿と、夏の夜のあっけなさを重ね合わせた蕪村の感性は理解できない範疇ではない。しかし、この句をアメリカ人に説明するとしたらどうであろうか。単に語句を直訳するだけでその詩情が伝わるだろうか。ここに一人のアメリカ人が英訳を試みた例がある。

The short night;
Upon the hairy caterpillar,
Beads of dew.

"summer"の語句はどこにも見あたらない。そのかわりに"short"という語句が記されている。なぜだろうか。

いうまでもなくその理由は、アメリカ人は夏の夜、と聞いただけでは短さ、あっけなさを感じないと訳者が判断したためである。ふるくから日本では、「花」といえば桜を連想してそこからはかなさを「なんとなく」感じとったり、「秋の夜」というだけでその長さを感じとったりする「伝統的価値」とでもいうべきものが育まれてきた。しかし、果たしてそのような暗黙の「伝統的価値」が、アメリカに存在するのだろうか。もちろん、日本と同様の「価値」が育まれる必要はないのだが、少なくともそうした、言外の意味をアメリカ人が一般的に共有するような観念が、存在するのだろうか。

アメリカ合衆国は独立後220年足らずの新しい国家である。はじめはイギリス国内から新天地を求めてやってきた清教徒たちが、続いてヨーロッパ各国からの移住者が、もともと住んでいたNative Americanたちを退けて広大な大陸を支配し、アフリカ大陸、アジア、南米など世界各地からの移民を絶えずのみこみ、瞬く間に世界の大国へとの上り上がった。彼らには土地との結びつきはなかった。彼らが暮らしていたのは、「伝統的価値」の共有とは無縁の世界であった。彼らにとって唯一の共通点であり、ゆえに彼らを支えていた信念とは、理由は何であれ何かを求めてこの大陸にやってきた、という意志だけであったのではないだろうか。だから彼らは今でも誇りを持って星条旗を見上げ、高らかに国歌を斉唱するのではなからうか。我々は自らの意志でアメリカを選んだのだ、という主張の結晶が、あの旗であり国旗であるのだ。逆に言えば、彼らには他に支えがないのだともいえよう。

共通の「伝統的価値」なるものの欠如、あるいは未成熟といった方が語弊がないかもしれないが、それこそがアメリカ人の心の奥底に常に他者に対する不信感を生み、不安として存在しているのではなからうか。私の不安を生み出していたものはそうした、歴史的に培われたアメリカ人の潜在的な不安であったのかもしれない、そう思った。だからこそ彼らは、目に見えるもの、実際に存在するもの、きちんとした根拠づけがなされているものを好む。目に見えぬもの、意識の中だけで存在するもの、そうしたものを否定しているのではなく、その存在を全面的に肯定するほどまで確かなものではないとみるのである。同じ大陸に集ったという事実以外に確固たる共通点がない人々との暮らしの中で、それは当然の姿であるのかもしれないと思った。そして、自分のいいたいことを何でも言葉にして表現し、相手にもそれを要求することは、言葉の軽率な使い方であるどころか逆に誠実な使い方ではないかと思った。形なきものを疑うということは逆に、いったん形をとったものを信用するということであり、それによって彼らは、口にしようとする言葉に対してその責任を自ら負わねばならないからである。

アメリカがそこにあった。

私に底知れぬ魅力と得体の知れない不安を芽生えさせたアメリカの本当の姿を見た。

アメリカは希望を失わない志高き若者のようだったと思った。

自ら選びとった土地、無数に存在する多様な人々、そこにあって決して負けまい、埋もれまいと自己主張を続ける誇り高き力強さは健在であった。それぞれが自分なりの生き方を何者にも頼らずに探しているように見えた。

そして同時に、JASCを通して私が感じた若者としてのアメリカは、希望に満ちているだけでなく、かつての勢いを失ったのみならず知らぬ間に自分で解決できる範囲を遥かに越えてしまった数え切れない困難を抱えて傷ついた姿をしていた。アメリカは経済力の低下や数々の社会問題の深化にたいしてなすすべもなく呆然としていて、またそうした自らの姿から目を背けているように思えた。彼らが追い求めた理想と、困難を極めるばかりの現実とのギャップが、もはや手もつけられないほどに深まっているのだと思われた。アメリカは光を放ちつつもがいていた。

成田空港で彼らはなかなか去ろうとしなかった。

最後の一人の、こちらを振り返って手を振った、その右手が下りのエスカレーターに乗って見えなくなっても、私の中に実感は湧かなかった。

私は戸惑った。混乱した。

本当に彼らはいく分前までここにいて、笑っていたのだろうか。

全てが幻のようにさえ思えた。

アメリカが遺した残像は、まぶしくそして哀しい笑顔の若者の姿をしていた。

そしてその瞬間、私は彼らとともに過ごした一ヶ月間が不意に思い出へと形を変えるのを感じた。

途端になんとなく寂しくなった……。



あれは二日前のことだった。

第47回日米学生会議の閉会式が行われ、みな最後の盛装に身を包み、めいめいお喋りに花を咲かせていた。

いよいよ会も終わりに近づき、Noreenというアメリカ側の女の子が前に歩みでてしずかに話し出した。彼女は一ヶ月間のいろいろな出来事を、できるだけ多くの参加者の名前を交えながら語った。そして最後に前を見据え、こう締めくくった。

"The 47th JASC is officially over."

別れは哀しいものだ。だから私たちは時として別れの現実を直視せぬままに、時が過ぎるのに任せて忘れていってしまう。

しかし彼女は別れの意味を知っていた。それが哀しい現実であることも、そして同時に新たな前進への第一歩であることも。

その、打ちひしがれながらも毅然とした姿を思い出し、それはそのまま、私の目に映ったアメリカを象徴しているように思えた。

その余韻は今も、鮮やかに私の胸の奥で輝きを放ち続けている。



米国側参加者帰国の日、成田空港にて

「真の相互理解」以前に、本会議を終えて最終的に何を理解したかという、双方がいかに異なるかという事だった。特に、一ヶ月間寝食を共にして共同生活をすると、まさにその違いを毎日に見せつけられる。

日本側は、えてして懐疑的、否定的で、時には自分たちを必要以上に卑下した。そのようにシリアスに物事をとらえていたため、時にはアメリカ側が楽天的で単純に見えることがあった。ただ、彼らが本当に楽天的なのか、実はそう見せている、あるいはこちらが勝手にそう捉えているだけだったのか、わからなかった。

そして、なぜ日本人は、自分たちのことを否定的に考えるのだろうか。

そもそも、日米の違いどころか、日本側参加者でさえ、多種多様な人間が集まってきている。この会議に応募するということですのですでに特殊だ。理屈を好み、疑念を抱き、腹に一物背中に荷物、そのうえプライドも高い。何を言っても返ってくる。その手応えは、快いと同時に、何かをしようとするたびにオブジェクションを受け、かえって物事が進みにくいジレンマを感じるがあった。本会議前、日本側は毎週集合し、週刊で連絡事項やエッセイを発行し、何回か全体合宿も行った。その準備活動の傍ら、「自分たちに何ができているのか」、「何をしなくてはならないのか」、「なぜするのか」といったことについて、延々と議論した。そして、会議の理念より何より、準備活動に忙殺され、さらに就職を控えていたり、本業の学校が忙しかったりして、それでも今何をしているのだろう、という問いは大きかった。また、今回の会議の総合テーマである、「時代の創造 ～歴史に学び、理想の実現へ～」を考える上で、日米学生会議の伝統に触れ、過去と現在の会議のあり方についても考えた。戦争勃発前の、切迫した状況と現在とは異なるとはいえ、小説にもなるような伝統に大いに影響され、何らかの結果を出す事へのプレッシャーは、日本側に特徴的だったかもしれない。

というのも、予想はしていたが、やはり日米のギャップは大きかった。会議といえどこか白熱したものを期待してしまう。ものの価値観は多様とはいえ、たびたび議論される大きなテーマでは、特に常識のように答えが固定しつつあるものが多い。その点で、ただコンセンサスを確認するような話し合いでは、何かしらじらしいことを言っているような、拍子抜けした感があった。そしてどこか「否定的に」とらえ、意見を戦わせてみたかった。

もちろん最大のギャップはコミュニケーションだった。はじめから母国語と外国語というハンディキャップは前提だった。彼らは、話し合いの方法、決断の下し方といったプロセスになれていて、早くも明快だった。本会議初日から早くも彼らに少なからぬ、劣等意識があった。それは、今回ホスト側という意識を持っていた日本側にとって、どこか主導権を握られたような気にさせた。日本側は用意周到だ。毎週集まって会議の準備をしてきた。会議の細かいスケジュールもこちらが決めた。一方彼らは会議が始まるまで互いに会ったことさえない。だから例えば今まで準備してきたことが、彼らによって簡単に変更されると、しかもそれが納得のいくものであるほど、よいことなのに、「やはり彼らにはかなわない」と感じた。

同時に、よいホストであろうとする考えに正当化された、私たちの強がり、アメリカ側には、日本人は相変わらず仕事中毒で自分たちには何もさせてくれないと映ったようだ。しかし面白いことに、アメリカ人参加者が教えてくれたことには、アメリカ側は、日本側がやっていたことに参加したかったが失礼だと思われるのを恐れて、それを見せまいとしていた、という。それを聞いたのは会議終了後一ヶ月以上たったのことである。会議中は、互いに似たようなことをいろいろ考えて、遠慮したりして口に出さなかったのだ。向こうには分からないのだから、彼らはああいう性格なのだから、たとえ言っても変わらない、などといって、彼らに向かって尋ねることに対する不安やコンプレックスを、あきらめにすり替えていたのかも知れない。ギャップがあるならなおさら、すこしでも埋めようとするのが本当だが、現実複雑である。

しかし私たちが相互理解において最終的に感じたのは失望でも挫折でもない。今なら、もし意見が食い違ったり、考え方の違いによる不満を感じたりしたとき、相手もきっと何かを感じ、憤ったり、遠慮したりしているのだと、真に感じるができる。違いを知るということも理解の一つだ。理解しようとして試みるだけでもう第一歩は始まっている。後から気づくこともあるかもしれないが、一つテーブルにつけば必ず、私たちは理解できる。

日米学生会議と平和創造

来嶋 光江

平和創造は、日米学生会議にとって大きな主題である。それは、日米学生会議が、満州事変以来悪化しつつあった日米関係を憂慮した日米の学生により、太平洋間の平和創造を目的として創始されたという歴史にもみてとることができる。議論を含む共同生活を通じることによって、お互いの相違点を認識し、個人レベルにおいて相互理解を進めることが、国家レベルでの平和創造につながるという考えだ。しかし、そのような、日米学生会議全体を通しての平和創造への貢献に加え、平和そのものを一つの議論のテーマとして、第47回日米学生会議は取り組んだ。というのは、1995年は戦後50周年の記念の年であり、日米間に起こった太平洋戦争を振り返るのに絶好の機会であったからである。そして、私たちは「時代の創造 ～歴史に学び、理想の実現へ～」を総合テーマとして、平和、そして戦争についての議論に多くの時間を費やした。

まず、私たちは、平和に関して思いをいたし、議論を交わすという平和DAYというプログラムを用意した。広島平和記念公園、原爆資料館を訪れた。立命館大学の国際平和ミュージアムで、原爆に関するアニメーション「ピカドン」を見た。ドキュメンタリーフィルムである「母たちの祈り」を見た。日本人であり、小学校の頃から原爆の悲惨さを繰り返し繰り返し脳裏に刻み込まれてきた私たちにとっては、見慣れた映像であり、何の新鮮さもなかったが、アメリカ人の参加者にとっては、ショッキングであったようである。原爆が、アメリカの歴史の教科書でどのように取り上げられているかについて聞くと、それは、単に科学技術の発展の結晶としてとらえられているのみで、被害者にどのような被害が起こるか、つまり、皮膚が焼け爛れ、目玉が溶け出してしまうとか、一瞬にして人間が灰と化してしまうとか、放射能の影響が世代を超えて影響を及ぼし続けるといったようなことは、何一つ知らされなかったということだった。原爆投下の事実は知っていたが、それ以上の同情の態度というものは醸成されていなかったのである。

しかし、これは、日本人にも同じようなことが当てはまった。国際関係をテーマとする私の分科会で、スタンフォード大学の学生であるレイチェルにより、日本が太平洋戦争中に起こした、慰安婦問題に関する発表がなされ、日本人学生としての私たちの意見が問われた。もちろん、私も慰安婦問題の存在は知っていたし、その残酷さも知っていたつもりであったが、改めて、意見を求められて少し戸惑った。慰安婦問題について知っていることといえば、彼女が発表した程度のことだけだったのである。そして、アメリカ人が原爆について知らないのと同じように、私もそれほど慰安婦問題、そして日本がアジアの国々にしてきたことを知らなかった。お互いの歴史認識の浅さに気がつくというとても貴重な体験であったと思う。

また、私たちは、外務省や自衛隊のご尽力のおかげで、太平洋戦争末期での日米間の激戦地であった硫黄島を訪問する機会にめぐまれた。ここでは、旧日本軍の病院壕の見学をしたり、慰霊碑への献花などを行い、学生ならではの硫黄島宣言を行った。50年前であれば、敵として戦い合ったであろう私たちが、手をつなぎ合って友人として硫黄島を訪問する。それだけでも、胸が打ち震えるような象徴的なイベントであった。そして、日本とアメリカという国境を超えて、戦争の悲惨さを振り返り、日米間のみならず、世界平和を希求せずにはいられなかった。

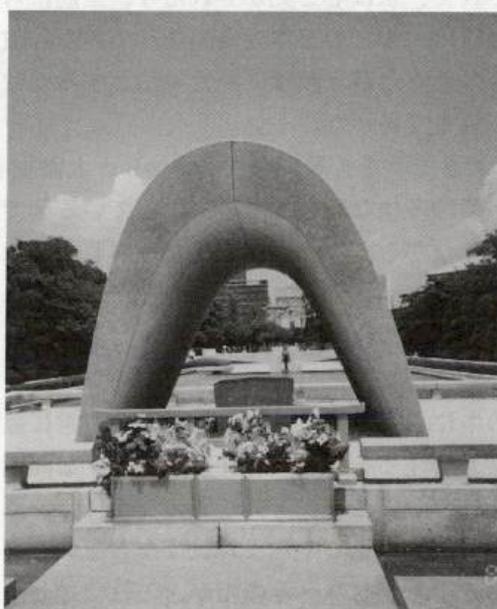
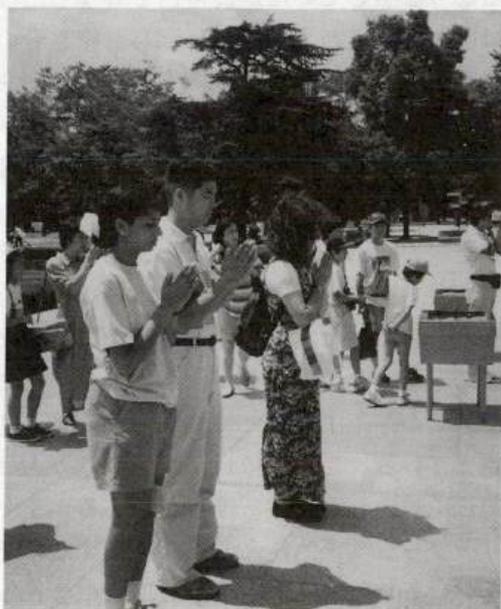
歴史を知ること、自分の国、自分の民族がまわりにどのような関係を持ってきたのか、を知ることは、とても重要である。相手に与えた痛みを知ることもない、そして、自己の過ちに対する反省もない、現在の平和は真の意味での平和と言うことはできないであろう。再び同じ過ちを犯してしまう危険性をはらんでいるからだ。この点で、日米学生会議の中で、歴史を振り返るという日米共同作業をできたことは、とても意義深かったと思う。

日米学生会議が平和創造にできること

大沢 枝里子

8月11日、痛いほどの陽射しを浴びながら、私は原爆ドームの前に立っていた。50年前、同じような暑い夏に落とされた原爆の破壊力を今に伝えるドームは、私たちを言葉少なにした。その後三々五々のグループに分かれて訪れた平和資料館では、私たち日米の学生が「敵」であった頃の歴史が綴られ、日本の受けた傷を物語る展示物が所せましと並んでいた。一通り見終ると、感想を共有する人の輪がいくつかできた。あるアメリカ側参加者は、日本の被害ばかりが強調されており、なぜアメリカが原爆を落とさざるを得なかったか、そこに至るまでの経緯や日本軍の強硬姿勢についての説明が全くないことを指摘していた。それに関連して、私はこの展示がアメリカ人にとっては、「原爆投下の責任糾弾」と感じさせるのではないかと尋ねてみた。この質問に対して確かにそう感じる、と答えた人もいたが、こう言った人がいた。「この資料館のポイントは、日米両国の悲痛な歴史の展示のみにあるのではなく、もっと普遍的な平和を求めるためのメッセージにある。だから私は加害者として後ろ指をさされているという思いはない。」彼女の言葉には、JASCの求める平和創造の姿がある。私たち日米両国は、歴史上の一時期に敵であったにも関わらず、現在「もっとも重要な二国間関係」と評されるほどに距離を狭めた、稀な存在である。第47回日米学生会議の総合テーマであった「時代の創造 ～歴史に学び、理想の実現へ～」は、いみじくも私たち日米の若者の微妙な、同時に恵まれた立場を示している。私たちは平和と対峙する「戦争」の道を選んだ国に生き、互いに敵であった祖先を持ち、それでいて共に平和を創るべき未来を持つ。過去に対しては冷静な目をむける必要があるが、それにこだわって前進を止めては意味がない。歴史を学ぶという行動にはある種の客観性を持たせ、あくまでも主体は今後の未来創造にあることを認識することが求められているのではないだろうか。

冷戦時代、互いに行き来がなかった米国とソビエト連邦の人々は、実際に知り合うことなく、「互いは敵だ」というステレオタイプのみに基づいて憎しみを増長させた。私たちは、日本人・アメリカ人を代表して、本音で語り合い、笑い合える時間を共有した。一カ月という短い期間だが、ここで芽生えた絆は揺るぎえないほどに強いものだと思える。40人の素晴らしいアメリカ人たちを理解できたことこそ、両国間の平和創造に大きく寄与するであろう。



広島で日米学生の祈り



世界の中の日米関係

難波江 功二

本年度の日米学生会議（以降、会議）において、私たちは政治、経済、文化など様々な分野について話し合ったが、これらの具体的な内容は、人間の脳の曖昧さにより、私の記憶の中から日に日に消えていっている。しかし、私はこの一ヶ月の共同生活の端々に見えた事柄により、新しいアメリカ観、これからの日米関係の展望が得られたという成果は、決して忘れないであろう。

私がこの会議に参加したきっかけは、自分の中の嫌米感情の高まりに歯止めをかけたかったからだ。今までの人生の中で、アジアを中心に、かなり多くの国を訪れてきた。それらの国の人と話し合う中で、決まって出てくるのがアメリカの悪口だった。ベトナムにしても、キューバにしても、あくまでも他国に対して盲目的なアメリカ。お節介で、自分の価値観で相手を判断するアメリカ。アメリカに対する漠然とした憧れを抱いていながら、アメリカが今まで世界に対して正義の名目で行ってきたことに対して怒りを感じ、決してアメリカが好きだと言えない自分があった。

会議を通して、大きな違いを感じ、それにより自分の考えを変えた出来事が二つあった。一つは、会議の最初のオリエンテーションで行った寸劇である。これは、私が脚本を書いたのだが、ストーリーは、日本のある女子高生が同じクラスの男子高生のことを好きになり、日本の四季折々を混ぜ合わせながら何回も告白にチャレンジし、その度に振られ、結局最後も振られるというものだった。その劇を見ながらアメリカ人は、彼女が振られるたびに「OH」とか「AH」などと言って、一緒に悲しんでいた。そして、最後のおちの所で彼女が振られると、会場は静まり返ってしまった。私はこの瞬間、文化の違いを感じ、ハッピーエンドにしなかったことを悔いた。アメリカ映画などで、アメリカでは大ヒットし、日本では全くだめだったという作品が多々ある。これらのストーリーは大抵善悪もので、ハッピーエンドである。私はこのような作品がすばらしいと思うアメリカ人を理解できないでいた。そして、この劇で、日本人にだけ受けた場面、アメリカ人を白けさせた場面を考えると、ハッピーエンドにするべきだったという、何か大きな脅迫感を感じた。

もう一つの出来事は、マイノリティデイにおいて、会議参加者が自分のそれぞれの苦しみを告白した後に起こった。約20名の参加者が、自分の子供の頃にいじめられた話や、人種差別における苦悩などを告白した。それはそれで、私は心を動かされたり、差別に対する怒りを感じていたが、告白を終了した後のアメリカ人の行動は、ほとんどの日本人と異なっていた。彼らは、誰彼かまわず、一緒に涙し、抱き合い（ハグ）始めた。これは延々と続き私は、ただ呆然とするだけだった。この行動を私は以前も見たことがあったが、ただ偽善的でいやであった。

この二つのできごとを、後に一人のアメリカ人参加者と朝まで語り合うことができ、私の考えは変わった。アメリカは、多種多様な民族でできあがっている国であり、彼らが平和に共存していくためには、このような大げさでありながらも、相手の立場を理解していることを表面に示さなければならないのだ。それが、建前なのか、本気なのかは個人によって違うだろうが、少なくとも、そのような行動を示さなかった私は、彼らの価値観から見れば冷たい人間に映ったに違いない。しかし、私は冷たい態度を示した気持ちなど更々なく、ただそのような文化に慣れていなかっただけだった。そして、アメリカ人が、この二百年間の間に築き上げた文化の中に、日本人には理解し得ない非常に敏感なものが存在することに気づいた。アメリカは自国の中に、今にも爆発しそうな人種問題など様々な問題を抱えている。これらに対し、アメリカ人は非常に敏感である。それだからこそ、アメリカの文化には、私の想像を越える寛大さ、優しさがある。また、相手の立場を理解し、面倒を見てやらなければならないというリーダーシップ的使命感まで存在する。そして、弱者に対しハグの手を差し伸べるのだが、これに対して顔を背けることは、アメリカの逆鱗に触れることになる。この兄貴分的考えは、考えの違うものには自分勝手にしか映らないのだが、アメリカの文化の奥深くには、このようなお節介なところに使命感を感じるものがある。私個人としては、自分の価値観、正義理論を他国まで押しつける盲目的なアメリカが許せないと考えていたが、自分自身がこのアメリカを、自分の価値観で見ていることを感じた。そして、その偏見がとれたことにより、「アメリカ」は私の頭の中ではもう傍若

無人な巨象ではなく、傷つきやすい、世界の中の一国となった。

今、日米関係は冷戦構造の枠はずれ、お互いのなれ合いでなく、新しい時代のパートナーとして対等な意見交換ができる状況になっている。これが、本当の意味での話し合い、つまり相手の文化背景も含めた包括的協議ができるまでまだ時間がかかるであろう。しかし、これまで戦後50年の経験を土台に、この努力が日米間で始まっているのなら、この成果は世界の他の地域との関係への見本となりうる機会である。これからの日米間のやり取り、激論はそれぞれの文化的違いを明らかにし、世界の他の国もが自国との違いを認識できるようにするためにも、大いにやって欲しいものである。



硫黄島にて

世界の中の日米関係

平野 功

一ヶ月にわたる共同生活の中では、最初は日米双方遠慮がちで、お互いにお互いを合わせようとしても、次第に「お国柄」や「国民性」を反映した行動を取るようになる。これは非常に面白いことだ。三日か四日程度のものなら真剣にお互いを知る努力をしなくとも、また気が合わなくても我慢していればすぐに終わってしまう。また、後に続いていくであろう友情や信頼関係のベースとなる対話や交流を行い、信頼醸成を築くためには三日や四日というのはいささか短すぎるような気がする。

今回、私は日米学生会議に参加して次の二点を最も強く感じた。一つは少々荒っぽい言い方かもしれないが、アメリカの「多様性」と日本の「均一性」「均質性」である。そしてもう一つは当たり前のようだが、国籍は違っても価値観や考え方が異なるだけで、人は本質的にはみな同じだということである。一見矛盾するような印象を与えるこの二点であるが、その相関関係は次の通りである。すなわち、ある問題やイシューに対する見方や考え方、そして問題に対する解決方法ならびに具体的処方箋が日米間で大きな違いが当初あったとしても、対話と相互理解を粘り強く続けていけば所謂「ステレオタイプ」を克服し、「共通の価値」の創造が後に可能であるということである。実際、本会議中には多くの場面でこの現象が見られた。そして、一ヶ月間のその積み重ねを具体的な形で表したのが我々の「硫黄島宣言」（1995年8月18日発表）である。

もっとも、「政府間レベル」の外交とは違って、「国益」を直接に背負っていない者同志（すなわち学生や草の根レベル）の間では比較的スムーズに相互の理解も合意の形成も進む、といった見方や意見も存在する。確かにそういった見方は間違いではないが、今日の複雑化、または多中心化した国際関係において民間（NGO等も含む）の持つダイナミズムを軽視すべきではなからう。

さて、以下ではこれまで述べてきたことを念頭に置きつつ、その内容を発展させ、そして最後に「世界の中の日米関係」の展望を試みたい。

■型に縛られずに発言するアメリカの学生達

私は従来から国際政治経済や日米関係を学ぶことが好きであったが、今回の日米学生会議に参加することが決まって私は今まで以上に日米関係やアジア・太平洋の国際関係の勉強を進めた。しかし、今から考えれば自分の勉強方法は知識とかデータの集積に偏りすぎていて、「自分は個々の問題やイシューについてどう考えるのか」、すなわち自分のオピニオン形成の段階にまで至っていなかったのである。実際、会議が始まってからそれまでに覚えたことを言っても今一つうけない、役に立たないということを感じるまでに時間はかからなかった。会議は知識や学説をひけらかす場ではなかったからである（実際そういう人はいてもいいし、またいなければならないと思うが）。むしろ個々の問題をその人がどのように考え、そしてそれをいかに簡潔に表現するかということの方が大切であったように思う。「英語で」議論するというハンディを差し引いたとしても、これには日本の「知識注入型」の教育では太刀打ちできないのではないか。事実、私は戸惑ったのである。中でも意見を求められて特に困ったことはジェンダーやマイノリティの問題についてであった。これらの問題は社会的に見て日本にも確かに存在するが、政治的には目立って（故意に？）取り上げられないためか、私にはそれらの問題について考える訓練がほとんどできていなかったのである。

一方、米国の学生たちは型にはまることなく自由（悪く言えば好き勝手に）、また実に多様な意見を述べていた。しかしその自由な発言と自己主張の裏にはそれなりの理由づけと責任があった。公平に見て知識の量や議論のスタンダードは日米間で大した差はなかったが、物事の考え方については日本側が比較的似通ったものであるのに対して米国側はかなりの広がりがあった。この後者の多様性はどこから来るのであろうか。個々人の経験なのか、それとも教育制度なのか。

■「多様性」や「違い」を認め、支持する米国の教育制度

私の見るところでは、まず第一に、当たり前のことだがアメリカの国自体が多様性に富んだものであるが故にその国民は均一的ないしは均質的なものにはなりえない、すなわち米国民は必然的に多様であるということが挙げられる。周知の様に、また米国側の参加者の面々を見てもわかる様に米国は多民族から構成されており、共通のアメリカ文明とアイデンティティーを持ちながらも多くの文化（言語、宗教、慣習を含む）が混在しているのである。

二番目に考えられることとして、米国では政治制度として連邦制が採られていることがある。この制度により州や地域にかなりの自治権が与えられているため、当然のことながら各州・地域によって違いや特色が出てくる。

上の二つの社会的ならびに政治文化的要因は多様性を認めるが故に米国では自主性、自己主張や自由に伴う「責任」が必要とされる。アメリカの多様性とそれを束ねるワシントンへの忠誠心、そして自由に伴う責任を陰から養い支えているのは米国の柔軟な教育制度である。米国の教育理念はよく「リベラル・アーツ」という言葉で表される。リベラル・アーツとは簡潔に言えば、個別的な知識の集積よりもある問題の全体像の理解に重点を置く、言い換えれば結果よりも学問の探究の過程、特に方法論に重点が置かれる教育方式である。またそれは考える力、問題の核心を見抜く力を養おうとし、多様性の共存も容認するものでもある。



硫黄島にて

■「意見の同質化」ならびに「受け身」の姿勢の背景—日本の場合—

他方、日本についてはどうであろうか。

最近でこそディベート、ディベートと言われるけれども、「恥ずかしがり屋で論争よりは妥協、合意を好む」国民性から見ても、私の個人的な経験から言っても、それが日本の社会や教育現場で定着していくにはもう少し時間がかかるのではないかと。また、先程私自身の恥ずかしいエピソードを挙げたが、そのことは日本の社会、文化、政治を多少なりとも反映しているといっても過言ではあるまい。実際、日本側の他の参加者の中にも私と似通った体験をした人がいるのではなかろうか。

日本（人）の「単一性」は歴史的産物としてのほぼ単一の民族と言語、そして天皇制が土台となり、その上に①明治以来の中央集権、強力な官僚機構を持った政治制度、②重商主義的、そして「欧米に追いつき追い越せ」を標榜した経済政策、そして③官主導の教育制度、の三点が重なって維持されてきたのではないかと私は考えている。政治や教育に加えて、良きにせよ悪きにせよ日本の（特に世論の）均質化に影響を与えてきたのはマス・メディアであろう。全国ネットの放送局や全国紙が幅を利かしている日本で、それも特に「活字離れ」現象が広まっている今日では世論を動かすのはそれほど難しいことではないのではなかろうか。

政権の交代やコメの自由化、そして最近では「沖繩と日米同盟」に関する報道と比較的簡単に移り変わる世論を見ていて私はそう思った。

上に挙げた様々な要因の重なり合いから、多くの日本人の物の見方や考え方は似通ったものとなってくる。そしてそこからは批判的な意見や、自由奔放で新しい発想、また過去に当たり前とされていた偏見から自らを解放するという考えはなかなか出てこない。また社会的、政治文化的にも人々が規律、調和や序列を乱さないようにすること、すなわち矛盾は生み出さないことの方が政治家や企業家を中心とした多くの国民にとって心地が良かったし、かつ都合もよかったのである。

■「上下」的關係から平等なパートナーシップの構築へ

上述の日本の文化や国民性（「対決」よりも「合意」、根回し、集団意識、年功序列等が典型）は国を統治したり、会社や組織を運営するのに非常に効率良く今日まで作用してきた。また、対外面でも戦後に冷戦という特殊な国際体系が生まれた故に日本は米国から用意されたものを受け、注文されたことを無難にやっていたればよかった。皮肉ではあるが、この「受け身」の姿勢と責任を伴ったメッセージを世界に発する必要性の無さは「何となく、…」で何となく表現される日本の体質や風潮に合致していたし、同時に好都合でもあった。

確かに、戦後の日米関係は経済、安全保障、政治を中心に「緊密な協力体制」を維持・強化してきた。しかし日本が具体的な外交原理や独自の政策を持って行動していたことは残念ながらごく稀であった。言い換えれば、基本的に米国との協調の域を越えない範囲での「状況対応」でよかったのである。必然的な結果として「上下」的な関係となったが、追従することの代償として日本は「経済力を伸ばすことに専念する機会」を米国から与えられたのである。

ところが、戦後の国際関係を支配してきた冷戦が解消すると、クリントン氏を大統領に選んだように、米国民は国内経済の再建・健全化、すなわち（冷戦ならびに湾岸戦争の勝利あっても）外交よりも内政を国家政策のプライオリティに選んだのである。そして同時に米国は同盟諸国に国際社会での責任分担（burden sharing）を求めようになった。米国自身が超大国として国際社会で振る舞うのに疲れたポスト冷戦期の今こそ、日本は米国と二国間ならびにグローバルな問題について対等に議論し、米国と協調しつつも独自色を持った政策を立案、実行し、平等なパートナーとしての信頼を米国から得ることが大切である。そして、こういった作業の繰り返しが所謂「日米関係の再定義」ということにつながるのである。「日米で」と言うのも、両国で合わせて世界のGNPの40%を占め、既知のように日米関係が安全保障、経済、金融の各分野で世界の中でかなりの影響力を持っているからである。その意味からもやはり日米が「協調」「協力」によって世界経済の発展のための舵取りと冷戦解消後に国際関係の前面に出てきた地域・地球規模の難問題の解決にリーダーシップを取っていく必要があるし、またそうしていかなければならない。そしてその際、たゆまぬ対話と政策協調の積み重ねから今まで以上に日米「共通の価値」を生み出し、それをさらに世界に広めていけば正に真の日米「グローバル・パートナーシップ」が確立されるのである。

■真のグローバル・パートナーシップ構築のためには何が必要か

同じ、もしくは類似した歴史や文化（宗教、言語、習慣を含む）を共有している人々の間ならば「以心伝心」という作用も働きうる。しかし、どれだけ経済、ビジネス面で日米間で相互依存が深まろうとも、どれだけお互いの国のニュースが入ろうとも日本と米国の違いは依然として大きいし、「ステレオタイプ」がなかなか頭から離れないから日米両国一政府間レベルから草の根レベルまで一は粘り強く議論を続けていかなければならない。真の相互理解とはそのような過程から生まれてくるのだと思う。前述の「共通の価値」の創造も然りである。またそれだからこそ、日米学生会議の存続の意義がある。

EU(European Union；欧州同盟)には「ERASMUS計画」という教育政策がある。これは1984年12月に欧州委員会により提案（実施は87年から）されたもので、EU15カ国（当時はEC10カ国）の域内の大学への留学を通じて学生の交流・相互理解を促進しようという計画である。また欧米間（とくに英米間）でもかなりの数の大学／大学院レベルでの学生の交換が行われている。個人的な話になるが、私は二年前に

エディンバラ大学（英国）で勉強していた時、上記の事実を目の当たりにして驚いた。どんなに少人数のクラスにも他のヨーロッパ人、米国人ないしは旧英連邦諸国の人がいて議論を戦わせているのである。私はこの時「なぜ幾度の困難や挫折を見ながらも欧州の統合は進んでいくのか」といったこととか、英米関係が「特別な関係（Special Relationship）」と言われる所以が分かったような気がした。

上に挙げた例—文化的、言語的に比較的類似したEU加盟国間、ないしは欧米間（特に英米間）で数多くの交流があり、その目に見えない作用の大きさは計り知れないこと—を考えれば、歴史的に共通点の少ない、しかし現在ではその経済力、技術力で世界に相当の影響を持つ日米、ないしは日欧は、より多くのかつ内容を伴った交流と対話を積み重ねて、「ステレオタイプ」や「異質論」を越えた真の相互理解や「われわれ意識」を育てていくべきである。私は非常に微力ながらも今回の会議ではそのような意識を育てていくために何か貢献したい、と思い努力した。もちろん、他の参加者全員その意識は共有していたと思う。米国側参加者も知日家、親日派が多かったことも手伝って、かなりの程度でお互いを、お互いの国を、そして我々とそれを取り巻く世界とのこれからの関係について理解できたのではないかと私は実感している。

真のグローバル・パートナーシップの構築のために日米学生会議ができることはあまりに小さく、われわれが発信できることは現実の世界には夢物語にしか過ぎないのかもしれない。しかし私自身、自分の無知無力さを感じつつも様々な問題やイシューに対する自分の意見を自信を持って述べ、周囲に修正され、また他者の意見をよく聞き尊重することを再び体得した。また同時に今まで自分の知らなかった日本（人）とアメリカ（人）について学ぶこともできた。さらに「外国の人は自分を見て日本を見る」といったことも再認識させられた。責任の重さを感じ、より自分を高めようという思いでいっぱいである。私はこれらの貴重な体験・教訓を普段の生活の中で、また将来どういう方向へ進もうとも活かしていくつもりである。このことを誓いながら、私は以下のことも確信している。それは「第47回日米学生会議の参加者80名と過去、そして未来の日米学生会議参加者全員が頑丈でかつ柔軟な「太平洋の懸橋」となるべく努力精進し、それぞれの使命を果たしていけば（Mutual Commitment）、近い将来両国間の摩擦や対立を越えて必ずや真のグローバル・パートナーシップが確立され、日米関係が世界の平和と繁栄の実現に大きく寄与することは間違いない」ことである。



デミング公使邸にて



憧憬

細野 恭平

アメリカという国が醸し出す魅力的な雰囲気に着かれていた。ハリウッド、NASA、NBA、Individualism、ディズニーストリー、JAZZ、Harvard大学、最強の軍隊。すべてが大学2年生の私にとって幻想的な響きを持っていた。世界中から無数の人々が夢を求めてアメリカにわたるときの、一種の憧れに近い感情。

少しでも、いわゆる”アメリカ”を自分自身の中で消化しようと、日米学生会議(JASC)に取り組み、励んできた。正直な話、自分にとって、JASCの掲げる相互理解など、当初は大した問題ではなかった。「いかに、多くのアメリカ人と直に接して、彼らから多くを学びとるか。」JASCに捧げた二年間に私に課せられた課題であった。光のように通り過ぎた二年間は、幻想とはいささか異なった現実としてのアメリカを私の心に投影してくれた。

アメリカ社会の光と影。どんな鮮やかな映像にも必ず光を浴びる部分と影の部分が存在する。私が抱いていた幻想をアメリカ社会の光とするなら、日米学生会議を通して私が学んだものは、アメリカ社会の影であった。民族間の対立、犯罪、AIDS、同性愛問題、ホームレス。これらアメリカ社会を代表する影の部分に冒されているのは、社会的に貧しい環境におかれている人々が中心であると考えていた。大学などの高等教育機関で十分な教育の機会に恵まれたJASCの参加者とは無縁の世界であると考えた。

だが、現実はずっと複雑であった。

ジェンダーデイ当日、プログラム半ばにして、一人の米国人学生が、自分の母親が同性愛者であることを告白した。そのために彼が少年期に受けた差別にも深く言及した。彼は母親が同性愛者であることを憎み、それ故に母親を恨んだ。だが、いつしか彼は母親の愛情の大きさを悟って、自らを悔い改めた。映画の脚本にもなりそうな実話。実体験に基づく彼の告白には聞く者を圧倒する迫力があつた。私の受けた衝撃は大きかった。直前に私は、「同性愛は、遺伝子の誤植がもたらす結果である。なぜなら、同性愛者は種の保存という生物の究極的な役割に背を向けた人々だからである。」と、同性愛者を一喝する発言をしていた。そこには、同性愛者を知らないが故に、何とでも発言できる強みがあつた。まさか、78名の会議参加者の中に同性愛者が存在するとは思ってもいかなかった。(実際、厳密には存在しなかったわけだが)私は自分の認識の甘さを痛感した。幸い、私の発言は彼を傷つけることはなかったようだが、アメリカ国内の影の部分に言及する際には、必ず一定のリスクがつきまとうということを身を持って体験した。同様の告白を、一ヶ月のJASC期間中に幾度となく体験した。そのほとんどがアメリカ人によるものであつた。日本人の母親を持つが故に、差別されてきた幼年期の苦しみを涙混じりに告白する者。かつてのレイブされた経験を淡々と語る者。中でも印象深かつたのは、民族分科会を共にしたAfrican Americanの友人の話であつた。彼はAfrican Americanの学生が民族的にみて少数派に属する大学に通っていた。彼は学内の自治体の執行部選挙にたびたび立候補し、その都度、黒人だからという理由でつらい経験を重ねてきた。

「キャンパスの中をただ歩いているだけでも、白人の学生が、私に特別のスポットライトをあてて見ていることがわかる。」

「選挙に敗れるたびに、なぜ黒人ではいけないのかが悔しくて、家に帰ってから泣いたもんだよ。」

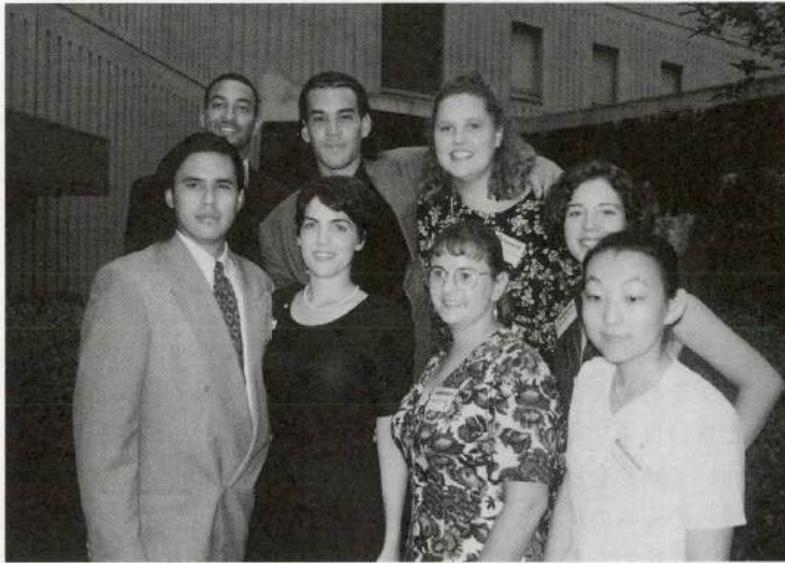
ごつつい体格に似つかわしくない、かわいらしい顔つきの彼がベッドにうつ伏して泣いている姿を想像するだけで、悲痛な思いがした。

「僕は、こんなに色も黒いし、こんな顔をしているけれど、決して白人の女性を襲ったりはしないよ。家族にとって、アメリカ社会の中で立派に生きている僕は誇りなんだよ。」

彼の一言一句は、彼の明るいチャーミングな仕草とは裏腹に、聞く者の心にズシリズシリと響きわたる重たさがあつた。また、彼は夜中に交わした会話の中で次のようなことも語ってくれた。

「誰かは言えないけれど、このJASCの中においてですら、僕が黒人であるからというそれだけの理由で、決して話しかけてくれない輩がいるんだ。これが、アメリカ社会の紛れもない現実なんだよ。」

JASCの実行委員活動に携わってきた一年間。日本側の実行委員・参加者たちと何度もミーティングを重ねた。「私たちJASCの参加者は日米両国から選りすぐられた、日米関係の将来を担うことを期待される学生でなければならない。」このことを何度も確認しあった。現実的な意味あい半分、自分たちの士気を鼓舞する意味あい半分であった。日本側とアメリカ側に多少の認識のずれはあるであろう。しかし、少なくともJASCの参加者が日米関係に深く興味を持ち、社会的には大学生というモラトリアムを与えられた恵まれた存在であることに疑いの余地はない。将来的に見れば、(多少傲慢に感じられるかもしれないが) JASCの参加者は様々な分野におけるリーダーとなる役割を担う存在なのである。少なくとも自分はそう考える。この二年間、ある意味自己満足のために描いてきた、以上のようなJASC像の中に「アメリカ社会の紛れもない現実」は存在していた。同性愛問題。多発する犯罪。民族間の抗争。これらアメリカの影の部分の代名詞とも言える諸問題が、私にとってはエリートでなければならない39名のアメリカ側参加者の中に胎動していた。これらの諸問題はホームレスやスラム街の人々の間で起きているだけにとどまらない。大学生という枠組みの中ですら、これだけの矛盾が内在するアメリカという社会。実際に肌で感じとったアメリカは想像以上に、深く傷ついた手を私にさしのべた。



また、会議も中盤にさしかかった頃、いささか遅きに失した感は否めないが、non-Whiteの学生たちが、自分自身のアイデンティティーを訪ねられたときに必ず、「I'm an African American.」"I'm a Japanese American."と名乗ることに気がついた。彼らの強調ポイントはAmericanではなく、その前にくるAfricanやJapaneseなどの形容詞であった。彼らは自分たちの民族的出自に重きをおいていた。だが、決してAmericanであることを忘れていないようにも見受けられた。しかし、それは私たちが日本人であることを意識すること以下のレベルであることは確かであった。それは、言葉の端々に潜在意識として現れる。例えば、日本人学生の多くは、日本人のことについて語る際に「We Japanese・・・」と始めることが多い。私個人としては、この表現はいささか尊大な気がして好きになれないのであるが、他方アメリカ人に目を向けると、「We American・・・」と語り出す学生は皆無に等しい。

私は困惑した。

アメリカ社会が内包する、民族対立を中心とした諸問題は、我々日本人が想像している以上に根深く、巨大である。それは私が思い描いていた古き良き時代のアメリカ像とは似ても似つかぬ代物であった。

「African、Japanese、Indianなどの形容詞に代表されるように、アメリカ社会は、移民国家というその性質上、もはや飽和状態に達している。以前、勃発したロサンゼルスでの暴動事件のように、ある偶発的な事件を契機としてアメリカという名の社会は一気に崩壊してしまうのではなからうか？」

「そもそも、あらゆる民族を包含する国家の実験性自体に無理があったのではないか？」

「はたして、均質的な日本人は、多様なアメリカ人と十分に理解し合えるのか？」

様々な疑問が私を襲った。

また一方で、アメリカ側の学生の多くは、個別にはAfricanであろうが、Japaneseであろうが、Indianであろうが、最終的にはAmericanという単語で集結していた。すなわち全体としてみれば、彼らは紛れもなくアメリカ人であった。ミーティングにおける議論の進め方、まとめ方。リーダーシップのあり方。喜怒哀楽の激しさ。どれをとっても、私たちが実際に接したのは、紛れもないアメリカ人としてのかれらであった。前述の黒人の彼も、私にとっては、African Americanである以前に、Americanであった。彼らアメリカ人は、私たち日本人の目から見れば、疑いの余地なくアメリカ人である。しかし彼ら自身の目から見た場合、アメリカ人であるかどうかには疑問符がつく。このような奇妙な現象がアメリカ社会の現実であった。そして、何らかの力が、魅力が彼らをアメリカという人工国家に惹きつけていることは確かであった。想像とは異なった現実のアメリカが、アメリカ人でない私にとって、相も変わらず魅力的であるという事実が、アメリカの底知れぬ魅力を物語っていた。

無数の移民の織りなす潮流がアメリカ社会の原動力となっていることは理解できる。それでは、私をはじめとする多くの会議参加者や、世界中の人々を魅了するアメリカという国の求心力は一体何なのか？

すべての回転体には軸が存在するはずである。その軸が放つ求心力に惹かれて、軸をとりまく物体が回転し、回転体を形成する。例えば地球には地軸があり、太陽系には太陽という軸が存在する。そこに働く求心力は万有引力である。アメリカという名の回転体は、建国以来この220年間に、無数の人間や文化をその回転の渦に吸収してきた。アメリカはその強力な求心力により自らの社会を拡大させ、今日の巨大な地位を築き上げた。だが、肥大化しすぎた社会はいつしかその中心を見失ってしまっていないであろうか。

「なぜ、人々はアメリカに惹かれるのか？」「アメリカに生きる人々は、何をもって自分たちをアメリカ人と認識しているのか？」疑問はますます深まっていった。

JASCも終盤にさしかかった頃、上記の問いは私の中での究極命題となった。なんとしても回答を得たかった。このまま消化不良でJASCを終えることを恐れた。回答を見つけていく作業自体が、JASCで言う「相互理解」に繋がる行為であると自分自身に言い聞かせた。硫黄等訪問に向けての準備の忙しさの傍ら、何人ものアメリカ人とこの命題について話し合った。時には、私の語学力不足のために、アメリカ社会の影の部分ばかりを強調してしまい、彼らのうちの何人かに不快感を持たせてしまったこともあった。

「アメリカに生まれたという偶然的な要素以外に、必ず彼らをアメリカ人として認識させうる要素があるに違いない。それが理解できたときに、本当の意味でアメリカを理解したと言えるのではないだろうか。相互理解の第一歩はお互いの国をもっとよく知ることから始まる。」

思案は続いた。

憲法。ディズニーワールド。共通の戦争観。民主主義。キリスト教。ハリウッド。軍隊。大国としての誇り。アメリカ社会の象徴とされるこれらの言葉の中で今も健在なのはディズニーワールドぐらいのものだ。確かに憲法は220年を経た今日でも、存在してはいる。しかし、近年は徐々に、かつて建国の功労者ジェファソンが想定したような各州による連邦政府としての性格を政府に持たせるような動きがさかんになっており、憲法もそれを執行する権限もワシントンから州へと移行する傾向にある。ヴェトナム戦争の終結以降、もはやアメリカ国民の間に共通の戦争観は存在していない。民主主義？キリスト教？ハリウッド？これらは古きよきアメリカを形容する際の美化された言葉の化石にすぎない。冷戦終了後の今日においては、軍隊の存在意義すら問われ始めている。

「アメリカ社会の放つ、その膨大な量の光と影の織りなす巧みなコントラストが、私たちの好奇心を刺激するがゆえに、アメリカは魅力的なのである。」これは、私自身がぼんやりと見つけた命題に対する回答の一つであった。ハンバーガーだけが巨大なわけではない。"Mass-production & Mass-consumption"に代表されるアメリカは、光も影も、善も悪も、すべてが膨大であるが故に、善なる人々も、悪なる人々も平等に惹きつ

ける。ディズニーワールドに代表される膨大な量の光が、アメリカンドリームへの希望に満ちた人々を余すことなく包み込むのと同様に、麻薬や犯罪から導き出される黒い影が、魂の荒廃した人々を包み込む。

「アメリカとはすべてが巨大な国なんだ。」私は認識を新たにした。

その国家としての寛容さが、人々の心をアメリカに向けさせる要因の一つに違いない。

あるいは、もはや、アメリカ人にとっては、アメリカという国家はただ単にその地に生まれたという偶然性を示す以外のなにものでもないのかもしれない。

会議の参加者で日系アメリカ人に属する田中愛ちゃんは、アイデンティティーを問われたときに、よく次のように答えていた。"I'm not a Japanese, I'm not an American, either. I'm 'Ai'."

無論、この言葉がすべてのアメリカ人の気持ちを代弁しているなどとは露とも思わない。日系人として、何回ものアイデンティティークライシスを味わってきた彼女だからこそ言うことのできる含蓄のある言葉である。だが、この言葉に共感するアメリカ人が確実に増えているという事実を私たちは看過してはならない。

非白人のアメリカ人にとっては、アメリカ人である以上に、何系であるかが重要であり、何系であるか以上に、個人としての自分を尊重する傾向にあるように思える。アメリカという名のサラダボウルは、あまりに多くの民族という名の野菜をいれすぎた結果、もはや、以前のような民主主義、キリスト教、ハリウッドなどという名のドレッシングで味付けできる限界を超えてしまったと言えよう。



しかし、皮肉なことに世界が、限界を超えたサラダボウルの歩んだ道を追い始めているという事実がある。

アジアやヨーロッパを中心に起こる移民の波は、人工的に線引きされた国家の矛盾を各地で暴いている。日本も決して例外ではない。アジア各国から押し寄せる移民の波を、今後も今までのように押し返すことができる保証はまるでない。

この意味で、アメリカは相変わらず、無数の民族を包含する国家としての実験的役割を担っている。アメリカが世界のリーダーであると言われる理由はまさにここにあるのではなからうか？

無論、アメリカ自身が予測して行動しているわけではないが、世界の潮流は図らずもアメリカが進む方向へと今日まで向かってきた。19世紀、自由主義を唱って戦ったのがアメリカであった。二度の大戦を通して国際機関の設立を提唱したのも、資本主義と社会主義の争いに勝利したのもアメリカであった。今日の大量生産、大量消費の概念を世界に植え込んだのもやはりアメリカであった。そして、アメリカは他民族共存の国家としての先駆性を武器に、今後も世界をリードしていく役割を担っているのである。

「日本はアメリカに追いついたために目標を見失ってしまった。」という表現をちょっと前までよく耳にした。



なるほど、確かに経済力を中心とした戦後の日本の躍進ぶりは特筆に値する。だが、日本は本質的な部分において決してアメリカに追いついてはいないのではないか。日本の均質的な国家体制はいずれ旧世紀の遺物と形容されるかもしれない。日本人の没個性ぶりは世界の人々から失笑を買っている。何よりも日本にはその経済力以外に、世界の人々から期待されるなにかを所有していない。人々から羨望される部分のない国が世界のリーダーとしての自覚を持ったところで、魅力がないために、誰も追随してくれるものがない。仮にリーダーとして君臨しても、それは短期政権で終焉を迎える。

アメリカが今日における世界のリーダーとしての地位を築くことができたのは、その軍事力でも、経済力でもない。確かに軍事力も経済力もリーダーの必要条件であるかもしれないが、十分条件ではない。軍事力なら、旧ソ連だって十分に保有していたし、経済力なら日本の方がある。だが、日本も旧ソ連も、世界の大国にはなったが、決してアメリカにはなれなかった。

「先駆性だ。」

その先駆性ゆえに、アメリカは多くの人々の心を惹きつけて止まないに違いない。アメリカの求心力は、時代を超えて存在するその先駆性に置き換えることができるのではないか。これが、私なりに考えてきた命題に対する現時点での精一杯の答えである。

「何とも曖昧な答えだ。」ここまで書いてきてあらためて思った。勿論、設定された命題自身がきわめて大きなものであるがゆえに、特定の解など持ち得ぬし、導き出そうとも思わぬが、それでもやはり完璧主義者の私にはこの曖昧な回答が気に入らなかった。自分が大学時代の貴重な二年間を費やしてきて勝ち得たアメリカへの理解は所詮この程度のものなのかと多少、自嘲気味にもなる。

いや、それよりも、JASCに参加する以前に自分が描いていた理想のアメリカ像と現実とのギャップに、自分自身が十分に納得していないだけなのかもしれない。

だが、やはり私はアメリカが好きである。

「おそらく、これからの人生において、様々な経験をしていく中で、先の命題に対する答えも徐々に変化していくに違いない。その意味で一過性の回答にすぎない。」そう思うと、肩の荷が下りた気がする。現時点で回答が曖昧なもの納得がいく。

近頃の新聞では、沖縄での米軍兵士の乱暴事件を契機に日米安保の意義を問う記事に、かなり多くの紙面が割かれている。日米安保、存続か否か？

現実世界では、今日も、私たちJASCのメンバーが培ってきた友情をよそに、貿易摩擦や、日米地位協定をめぐる論争が絶えない。

「ちっほけなものだ。」つくづくそう思う。私たちが健全な日米関係の構築に向けて注いだエネルギーなど、社会全体から見れば、塵にも均しいであろう。「果たして、私たちのこうした活動がどれほどの影響力を社会に対して持っているものであろうか？」時に虚しくなるときもある。

しかし、JASCが私たち一人一人に与えた影響は計り知れない。

世界はその日々の営みに忙しく、私たちにじっくりと過去を振り返る時間を与えてくれない。

だが、JASCの二年間が私に与えてくれたものは決して時間に流されることのない永遠の一瞬であった。そのすべてのシーンが私の人生のフォトグラフに貴重なページを刻んでいた。

アメリカへの憧れに始まり、アメリカへの憧れに終わったJASC。

今は、その過ぎ去りし時間が与えてくれた教訓に感謝したい。

V. 分科会報告

国際関係

国際社会における民族の共存

グローバル社会におけるビジネス

民主主義社会における市民参加のあり方

犯罪 ～環境、社会、そして私たちの責任～

健康と医学・医療

教育

情報とコミュニケーション

哲学から探る人間の可能性

ライフスタイル ～人間と社会～



分科会（国際関係）



国際関係

International Relations

分科会テーマ

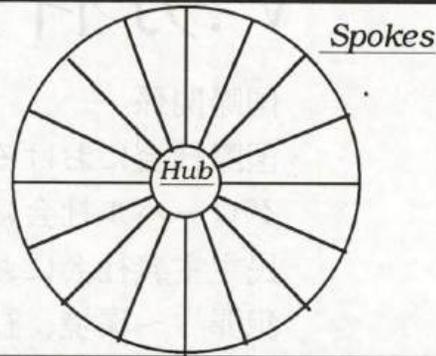
「日米両国がアジア・太平洋においてできることを模索—開発を通して—」

アジア・太平洋地域における政治的、経済的、及び社会的「発展」に関して、日米両国が果たすべき役割を様々な視点から模索する。具体的な議論の話題としては、人権問題、経済政策、NGO活動、ODA等が計画段階で予想された。

分科会運営方法

国及び地域の「発展」、「開発」という問題を扱う以上、(問題の性質上)政治、経済、社会、それぞれの分野をうまく関連させて議論を進める必要があった。「発展」を様々な視点から捉えるため、個人が取り上げる問題の多様性を確保し、かつ互いの論題の接点を保つことを第一の運営方法とし、具体的には「Hub & Spokes」を念頭に置いて活動を行っていった。

分科会テーマをハブとして中心に据え、分科会のメンバーはそれぞれ様々な分野から論題をもちより、分科会テーマとの関連、他のメンバーの論題との接点を持ちながら議論を深める。



実施

準備段階においては、メンバー相互間の連絡が予想よりも密接には実行されなかったこともあり、共同での準備作業等は行われなかった。

本会議では主に議論に終始し論題には、日本の産業政策、国際交流が社会発展に与える効果、保護貿易と自由貿易、従属理論、経済発展と情報等があげられ、多く議論になった論点は、IndustrializationとWesternization、経済発展と政治の民主化等であった。

所見

結果としては、論題の多様性とそれぞれの論議の関連性、及び分科会テーマとの関連は十分に保たれた議論が行われたと言える。同じ論点が度々登場しつつも、それらは異なった視点から議論されたことがそれを証明する。しかしながら、論題、論点の関連性をより意識した議論を行い、より深く濃密な議論が展開できればなお良かったのではなかろうか。



「国際関係」分科会

国際社会における民族の共存

Ethnic Coexistence in International Community

分科会の意義

旧ソ連の崩壊によりイデオロギー紛争が一応の決着を見た今日の国際社会において、不安定要因と成りうる最大のfactorは民族であると言われる。民族という概念は、イデオロギーのような資本主義か社会主義かという二者択一的な考え方と異なり、我々のアイデンティティーを問いたす役割をなす。それ故に、民族の違いを反映した紛争は根強く、解決も容易ではない。

我々の分科会における目標は、日本という均質的な民族構成をなす国家と、サラダボウルと形容される多民族国家アメリカにおける民族問題の歴史をたどり、検証することによって、民族という概念を今一度問いただし、21世紀における民族の共存の道を学生なりに模索することにある。

事前準備

- ・分科会テーマ"Understanding"設定
- ・10回の分科会timeを「民族・人種という概念」、「過去・現在の民族問題の検証」、「共存に向けて」の3段階にわけ、8人のメンバーはそれぞれの割り当てに基づいて英文レポートを作成。

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

窪田 尊	"Race and Ethnic Group"
北澤 咲弥花	"Ethnicity as a Ficiton"
細野 恭平*	"World Refugee Survey"
宮地 ゆう	"Edward Said's 'Orientalism'"
Harumi Furuya	"Ethnic Coexistence in International Community"
Chris Matthews	"Bosnia: A Call for International Leaders"
Connie Beson*	"Samuel Huntington, In 'The Clash of Civilizations?'"
Delauno Hinson	"A Theoretical Analysis of the Break-up of Multinational States"

本会議概略

①民族・人種概念 (Takashi Kubota, Sayaka Kitazawa, Chris)

1950年代以前、人々はドイツ人のユダヤ人虐殺に代表されるようなracial inferiorityを正当化するために人種という虚構の概念を導入した。しかし、「人種」という概念が生物学的に裏付けのないことや、差別主義の台頭を招くことがわかると、今日においては議論の対象は人種から民族に移ったと言える。私たちは、「民族」という概念が公民権運動の盛り上がりと共に構築されてきた比較的新しい概念であることを確認し、なぜ今日の社会において民族が問題視されるのかを議論した。

②過去・現在の民族問題の検証 (Harumi Furuya, Connie, Delauno, Yu Miyaji)

日米両国に現存する様々な民族問題についての議論がなされた。在日韓国人問題、部落差別問題、アメリカでの人種対立、フランスでの移民排斥運動、ボスニア問題への検討と各国政府の対応などが中心的な話題となった。また、Harvard大学のSamuel Huntington教授が執筆した論文"The Clash of Civilizations?"や、Edward SaidのOrientalismに基づき、今後の世界がどのような民族紛争の潮流を形成するのかを考えた。

③共存に向けて (Kyohei Hosono)

将来予想される民族問題に対する政府の対応を考えることを目的に、難民・移民問題を取り扱った。また、より理解を深めるためにUNHCRを訪れ、現在の世界各国の難民の状況と、各国政府の取り組み、国際機関の抱えるジレンマについて講義を聞いた。



総論

映像や教育を通じて「民族」について豊富な知識を有するが、実際の差別体験を伴わない日本人。他方、学問的バックグラウンドよりも実生活での差別体験に基づいて民族を語るアメリカ人。対照的な両国の学生の討論の中で日本人学生が感じたものは、多民族国家アメリカでの民族問題の根深さであった。白人が多い大学で必死にAfrican Americanとしてのアイデンティティーを模索するChrisの体験談はアメリカ社会に深く根ざしていた。「僕は色も黒いし、こんなにごっつい顔をしているけど、白人の女の人をレイプしたりしない・・・」我々に語りかけてくるのはアメリカ人でもなく、African Americanでもなく、Chrisという一人の人間であった。「民族」には境界線を引くことができない。JapaneseとAfrican Americanとの違いは一体なにか？そもそもJapaneseとは何なのか？あらゆる虚構と偶然性の支配する世の中において、最終的な勝利者はIndividualismなのではないかと実感した。



「国際社会における民族の共存」分科会



「グローバル社会におけるビジネス」分科会



「民主主義社会における市民参加のあり方」分科会

グローバル社会におけるビジネス

Business in the Global Community

前提

当分科会では、参加学生が討論をしやすいように、日米でチームを組み同じテーマに基づいたリサーチ、プレゼンテーションを行う計画をした。当分科会の全般にわたり、「地球上における日米のビジネスの新たな役割 (The new role of the business in the global community)」を基調とし、①新市場における役割 (アジアの例)、②環境問題に果たす役割、③他国間企業内ネットワークの影響、④企業文化の影響、の4点について日米それぞれの立場からの議論を試みた。

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

海老原 憲*	" The KFS (Key Factor for Success) for the Cooperation "
山田 亜紀	" Green Marketing and Eco-labeled Goods "
平野 功	" Japanese-American Business for New Emerging World, ASIA "
原田 芳衣	" Multinational to Global "
Kristin Peterson*	" Eco-labeling, Green Marketing and Corporate Environmentalism "
Gavin Tachibana	" Changing the Business Culture by Gavin Tachibana "
Daniel McKelvey	" US/Japanese Business for a New Emerging World/Asia "
Linda Kang	" Foreign Affiliated Companies - An analysis of Joint Ventures "

概略紹介

①新市場における役割 (アジアの例) (平野功、Daniel McKelvey)

お互いの興味を生かした議論展開となった。統計データを活用し、ミクロな話題から全体を指向するMcKelvey、に対し平野はマクロな視点から議論を展開した。

②環境問題に果たす役割 (山田亜紀、Kristin Peterson)

両者とも、環境戦略を持つ企業の事例を用い、その点に関する日米の企業の態度の違いや、これからの企業が持つべきビジョンに対する提案を皮切りに意見の交換をした。

③他国間企業内ネットワークの影響 (原田芳衣、Linda Kang)

Kangは他国籍の企業とのビジネスをする際の問題点を、日本企業の例を用いながら指摘し、原田は企業が独自に他国籍化していく過程における様相をレポートした。

④企業文化の影響 (海老原憲、Gavin Tachibana)

Tachibanaは体験的な在米日本企業感を披露し、企業と地域の文化の融合について語り、海老原は、異文化の人間が仕事をしていくことによる効果を説き、文化の差を乗り越える方法について皆で考えた。

所見

参加した学生は、全参加者の中でもビジネス方面に傑出した人々を排出してきた大学の学生であり、ビジネス・経済を専門とする者は少なかったものの、まじめな議論をすることが出来た。先だって立てた目標の、「議論をする」ということに関しては、精を出すことが出来た。しかしながら、専門性の高い学生のみによる議論が可能であるならば、公表に値するような更なる議論の成果を出すことができたであろう。



民主主義社会における市民参加のあり方

Social Activism and Democracy

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

William Lucas*	"Questions and Concerns Regarding Social Activism & Democracy"
Stacey Holmes	"Individualism vs. Collectivism for Democracy"
Maureen E. Johnson	"The Flag Desecration Amendment: Questioning the Debate"
Tatsu Yamato	"Blitzkrieg Activism: A Report of Student Activism Today in the U.S."
藤本 まどか*	"On the Process of Decision Making: Consensus and Vote"
木村 伸吾	"Is Democracy Universal System?"
大沢 枝里子	"Democracy: Not the Best But Better Social System"
大石 詔子	"Is Democracy the Best System?"

分科会活動の総括

忙しい会議中の生活のなかで、分科会活動が唯一息抜きの観を呈していたと言ってもいいすぎではないだろう。自分が日頃から関心を持って勉強してきた諸問題について、発表し合い意見を交すことは実に楽しく、みんな時間を忘れて議論に熱中していた。

当分科会の活動は各参加者の自己紹介をじっくり行うところから始まった。米国側のコーディネーターがいみじくも言ったように"Those who like to play and share together like to debate and learn together!"というわけで、それぞれの自己紹介がすでに「民主主義社会における市民参加のありかた」を考えさせる豊富な題材を提供しており、大変印象深かった。たとえば米国側には、地域政治家の選挙活動を支援する団体で働いている者がいたので、自己紹介の途中で話題はおもむろに日米の政治システム比較へと発展し、その結果、間接民主主義における諸問題を自分の問題として、より内在的に考察するきっかけを提供することになったのだった。

各自が提出した小論文にもとづく討論では、いくつかの大きな議論の流れがあったといえる。ひとつには日米両国における現行制度としての議会制民主主義についての関心で、国民の意見が政治に反映される上での外的要因について検討がなされた。それと同時に政治の、より社会的な側面への関心も追究され、民主主義社会における市民参加のありかたを直接的に規定する諸要素についての検討がなされた。例えばマス・メディアの果たす役割と表現の自由についての議論や、教育のあり方についての問題提起、あるいは学生団体を含む諸政治団体の可能性と限界について、などへの関心が共有された。これらの議論に加え、今後の国際社会でますます深刻化・複雑化の一途をたどると思われる、いわゆる「開発独裁」の是非をめぐる議論も関心の的となった。サミュエル・ハンティントンの「第三の波」に体现されていると言われるような、イデオロジックな民主化観の是非をめぐる議論が特に印象的であった。

日米間のみならず日本人どうし、米国人どうしの間でも議論は錯綜したが、展開されたこれらの関心の根底にあるものを一言で表わすならば、デモクラシーのドクマ化や絶対化への問題提起だったと言えるのではないだろうか。民主主義社会における市民参加のありかたをめぐる関心を、そのハウ・ツーにとどまらず、より構造的な問題にまで深化させて議論できたことは当分科会活動の大きな成果であり、各参加者の今後の知的・実践的な歩みに少なからぬ影響を及ぼしてくるであろう。

犯罪 ～環境、社会、そして私たちの責任～

Crime and Development

意義・目的

当分科会では、近年特に目立つ両国の凶悪犯罪の増加を鑑み、日常生活のなかでは、考えることが避けられがちな、社会の裏側ともいえる「犯罪」にあらゆる角度から焦点をあて、現代社会の一員として、自分達が生きる社会の抱える問題を再考することを目指した。参加者は、自分の経験に基づいた犯罪社会とのつきあい方や現代社会の分析を行うことが求められた。特に、日本では、とりわけ、隠され、無視され、見逃される傾向のある分野であるだけに、参加者の積極的な取り組みを期待し、日米犯罪事情、並びに両国民の犯罪への認識を比較することを目的とした。犯罪と一言にいっても扱う範囲が広範であったため、参加者と担当コーディネーターの判断によって、扱う話題を大きく以下の4つに分けた。

①組織犯罪（集団犯罪組織による犯罪、政治腐敗等に絡んだ組織ぐるみの犯罪）

②少年犯罪

③情報犯罪（メディアなどの情報からんだ犯罪、情報を利用した犯罪）

④女性（へ）の犯罪（レイプ・売春等）

さらにこの枠組みにこだわらず、参加者の個人的体験に基づいた自主的な発表も行った。

所見

参加学生の犯罪に対する認識はそれぞれの個人的経験が豊富であった為か、予想以上に高かった。発表の内容の充実度に関しては、外部に、グループとして提言ができるほどのものや統一性はなかったが、個人の経験とそれに基づいた意見や考察が、参加者同士のよい刺激になったのではないと思われる。アメリカ側の参加者が首都ワシントンD.C.やNYといった犯罪都市としての側面がしばしば取りあげられる街の出身者であったことや、職業経験を通して、犯罪の実状にふれたり、実際何らかの犯罪に巻き込まれた経験の多い者が多かったことは、議論を活発にした。日本側も、普通は体験出来ないような特殊な経験をした者や、特殊な情報を手にいれて犯罪を考える機会に恵まれた者もいた為、個々の発表をベースに、毎回のように行った自由討議は盛り上がりを見せた。現実際した日米・世界の犯罪比較を行えたことは当分科会の成果として挙げられようが、さらに、それらの犯罪にどのような社会的制裁が必要なのかといった、日米の犯罪学の観点を持ち込んだ議論や司法制度等の比較がなされていれば、社会にとって望ましい犯罪への対処方法などが、専門性をもってさらに深められたのではないと思われる。

メンバーと発表タイトル（*印はコーディネーター）

山田 通代*	"Responsibility on City News Reporting Regarding Human Rights"
加峯 麻紀子	"Juvenile Crime"
藤野 淳史	"Political Corruption in Japan "
鮫島 如	"Foreigners Crime in Japan -From Genderly Point of View-"
Rollie Lal*	"Organized Crime and Development"
Malik Rashid	"Differences in Perceptions of Crime in Kyoto and New York"
Helen Lee	"One for You and Two for Me: A Look at Corruption"



発表内容の概略

①組織犯罪 (Helen Lee, Rollie Lal, 藤野 淳史)

Leeは、マフィアや利益団体と政府が結びつく政治腐敗を米国の識者の意見を分析して検討。国家の発展や市民権利にとってこうした取引が果たす功罪を指摘。Lalは、世界のマフィアが犯罪増加にどう関わっているか、またマフィア撲滅に向けての取り組みも紹介。発展途上国では何故組織犯罪を追求することが困難なのか、国家の発展と、避けられない組織犯罪の現実を報告。藤野は、日本の現代政治における政治腐敗を報告。自民党の五十五年体制が生み出した弊害をシンプルな形で報告した。

②少年犯罪 (加峯 麻紀子)

近年話題となっているいじめや若年層の売春、肉親を殺害する子供達。彼らを犯罪に導いた社会の病理を批判。

③性犯罪・外国人犯罪 (鮫島 如)

外国人の日本への流入が増え、彼らの犯す犯罪も増加の傾向にある。何故彼らは犯罪を犯すのか？日本社会の持つ閉鎖的・硬直的諸制度が外国人による犯罪を招く結果になっているのでは？

④新聞における犯罪報道の扱いと犯罪者の人権 (山田 通代)

新聞における匿名報道のあり方を通して、日米の新聞上での犯罪者の人権・さらに望ましい報道スタイルについて考察した。

⑤都市における犯罪比較 (Malik Rashid)

NY出身の発表者の留学中の京都での体験をもとに、両国での犯罪状況になぜこのような違いがあるのかを検討。日本の法治制度と米国のそれを比較。



「犯罪」分科会

健康と医学・医療

Health and Medicine

分科会のテーマと目的

テーマ："What can we do to achieve 'Health for All' ?"

世界保健機関 (WHO) が1981年に採択した包括的行動計画は、「西暦2000年までにすべての人々に健康を」と謳っている。「健康と医学・医療」分科会では、「すべての人々の健康(Health for All)」を実現させるために、私たちが何をできるかを考えることを最大の目的として掲げた。ここでいう「健康(Health)」とは、肉体的のみならず、精神的、人間的、社会的な意味も含む「健康」であり、「すべての人々(All)」とは世界中のすべての人々のことをさす。現代の地球上では最先端技術を駆使した医療が行われる国がある一方で、最低限の単純な医療も行われず、貴い命が日々失われている国がある。また、先進国においても、高度医療が行われている陰で、真の意味での「健康」が軽視されているように思える。本当の"Health for All"の実現の前には数多くの難問が山積しているのである。分科会ではこの難問にいかに取り組みかについて議論が行われた。

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

難波江 功二	"International Health and Japanese Role --Target 2000; A World without Polio"
高野 利実*	"The Age of Humanity"
青山 絵美	"Cigaretts and Nicotine --Its mechanisms and how to quit--"
廣瀬 葉子	"Women with AIDS and Their Quality of Life"
Melfi Penn*	"Ebola Virus"
Kai Tao	"Sticking to Acupuncture"
Meghan Murnion	"The Tissue Issue"
Emil deGoma	"The Doctor, the Patient, and AIDS"

議論内容

上記のテーマに基づき、私たちはトピックを3つのカテゴリー (①国際医療 ②生命倫理 ③現代疾患の克服) にわけて議論を進めた。

① 国際医療 (難波江功二、Melfi Penn、Kai Tao)

世界人口の大多数を占める途上国の現状について全員が共通の認識を持ち、プライマリーヘルスケアの必要性を理解した。今後の展望として、政府、NGOがお互いに協力しながら現状を改善していくことが大切であり、将来医療に携わっていく人が多いこの分科会は特に、常に世界の一員であるということを認識していこうという一致がとれた。

② 生命倫理 (高野利実、Meghan Murnion)

現在医療技術の進歩は、死亡した胎児の卵巣移植など、人間の存在意義、社会までも変え得るまでに至った。この猛烈に進む医療技術の発展を、現在の状況で続けさせるのは危険だという認識を新たにするとともに、「医の哲学」の必要性についても考えた。

なお、このテーマに関連して、以下の二つのフィールドトリップも行った。

7月28日「人間の『死』をめぐって」(哲学分科会との合同)

仙台において科学技術フォーラムの一環として行われた「人体展」を、養老孟司先生と森岡正博先生とともに見学し、その後、両先生を交え、人間の死について、生命倫理、および哲学的な視点からディスカッションを行った。



8月8日「生命科学の新しい流れ」

高槻市の生命誌科学館を訪れ、副館長の中村桂子先生からお話をうかがった。

③現代疾患の克服（青山絵美、廣瀬葉子、Emil deGoma）

青山が喫煙問題を、廣瀬、DeGOMAがエイズ問題を取り上げ議論した。特にDeGOMAがエイズに関し、「医療従事者がHIVキャリアになった場合の患者の権利」という日本では今まで取り上げられなかった考えを提示し、白熱した議論がなされた。

今後の展望

目の前に山積している難問について改めて認識した私たちは、次に、その解決策を探っていくことになる。その道りは長く険しいであろうが、21世紀の社会を担うべき日米の学生が交わした議論はその第一歩となるであろう。メンバーそれぞれが今回の会議で得たものを医学・医療分野で、あるいはそれ以外の分野で活かしていけたらいいと思う。「すべての人々に健康を！」



「健康と医学・医療」分科会



「教育」分科会

教育

Education

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

加藤 愛太郎	"Myself in Ecosystem"
田中 智子*	"Returnees in Japan"
中山 真	"Education in the Global Society"
藤本 直子	"Human Body as a Subject to Study"
Sarah Drummond	"Oregon's Education Reform"
Sue Duvall	"What's the Point of English Language Education in Japan? "
Tien Nguyen	"Education in the United States"
Ai Tanaka*	"Education and Cultural Behavior"

意義・目的

当分科会では教育が個人の考えを形成していくにあたって及ぼす影響、またそれが社会の中でどのようにあらわれ、日米それぞれの国民性といわれるものにつながっていくのか、を幅広い視点から検証することを目的とした。

準備活動

分科会メンバーの多くは複数の国で教育を受けた経験を持っており、また、大学での専攻の多様性にも恵まれた。メンバーのそのようなバックグラウンドが活かされる形の分科会運営を目指し、それぞれの発表テーマの決定作業を進めた。その結果、国境を越えて取り組まねばならない環境問題、「人間」そのものの原点である自身の身体についての教育を扱った2点（加藤、藤本）、米国の教育現場の現状分析2点（Drummond, Nguyen）、日本の外国語教育、帰国子女問題を取り上げた2点（Duvall, 田中）、グローバルな視点から教育を検証した2点（Tanaka, 中山）があがった。

総括

それぞれがそれぞれの経験を持つ「教育」を取り上げる当分科会での議論は、実体験に基く場合が多いだけに活気に満ちたものであったと言える。しかし一方では、それらの議論内容があまりにも自分達に身近であった為に、「当事者」としての視点でしか問題を捉えられておらず、目標としていた幅広い視点からの議論にはつなげられなかった。身近な問題をいかに客観的に議論し、結論を導きだすか、ということが十分に認識できていなかったということが反省点として残された。しかしながら、会議の中であらわれた日米の参加者間の考え方、物事に対する取り組み方の違いが両者間で問題になりつつあった時など、分科会内での検証事項に重ね合わせてそれらを議論できたことは幸運であった。問題の解決に直結するものではなかったにしろ、お互いの理解を深めるうえでは有益であったと言える。



情報とコミュニケーション

Communication and Information

意義・目的

私たちは、マルチメディア社会の到来と騒がれる中で、社会の将来性や可能性のみに目をやるのではなく、今一度、現在の私たちのおかれた状況と照らし合わせるにより、より一層、私たち自身で来たるべき社会について考えることを目標とした。

私たちは、議論を始めるにあたり、これまで言われてきた情報社会、あるいはマルチメディア社会という言葉が、ともすると情報発信者の存在をあやふやにし、情報を固有の存在として抽象化したり、または、情報流通の媒体となるハードウェアに関心が向いてしまうことを反省し、情報の流れの中の主体者としての私たちの視点に重きを置くことにした。私たちは、技術の発展はコミュニケーションの方法を多様化すると考え、当分科会の基本テーマとして「マルチコミュニケーション社会の到来、その可能性と課題(Rise of Multi Communication Society, its potentials and problems)」を掲げた。

私たちは、全10回の分科会の時間を前期後期に分割し、前期をテレビ、新聞を中心とした既存のコミュニケーション媒体の現状と課題を論じ、その方向性について考えた。後期は、インターネットを中心とした技術発展に伴うコミュニケーションの将来性と課題について議論を試みた。

議論内容

前期「既存媒体の検証」

- 1、公平な報道は可能なのか
 - ・人権問題
 - ・宗教問題
- 2、教育における既存媒体の役割
 - ・人権教育
 - ・開発教育
- 3、媒体経営と媒体の公共性
 - ・広告主(株主)との関係
 - ・政治(圧力団体)との関係
 - ・媒体間の競争原理との関係

後期「コミュニケーション媒体の技術発展の検証」

- 1、情報ハイウエーは経済の活性化を推進するのか
 - ・地域社会は変わるのか
 - ・労働環境は変わるのか
 - ・情報関連公共投資は本当に必要なのか
- 2、情報発信機会のパーソナル化の推進がもつ可能性
 - ・学生から社会への発信
 - ・社会的弱者からの発信
 - ・利害の組み合わない集団間の対話は可能か
- 3、インターネットを中心とした新媒體の課題
 - ・個人の権利と新たな規制とのつりあい
 - ・情報リテラシーの改善

所見

日米両国においてジャーナリズムが国の歴史と切っても切れない関係であることは明らかである。ゆえに私たちは、ジャーナリズムに対して予想以上の期待感を抱いてしまうことがあるのかもしれない。私たちは、現実問題としてテレビや新聞のあり方について議論をしたとき、いかに私たちがジャーナリズムというものを正義感と公平性の塊であるかのように考えているかを実感した。テレビ、新聞はかくあるべきと意見するものの、実際には多くの報道関係機関が民間企業であり、また、互いに競争する機関であることに気づくとき、私たちの議論は地に足の着かない理想論に見えてしまった。

たとえば、人権問題にしろ開発問題にしろ、世間一般には、これらの問題を解決する有効な手段として教育の果たす役割が大きいと考えられているが、実際問題としてどのような教育が求められるかはよく考えられていない。私たちは、メディアの果たせるかもしれない教育的効果について考察したが、私たちが改めて認識したのは、教育的番組といえども政府、企業らとの間にしがらみがあることであった。

インターネットや情報ハイウエーなどに関しては、日米ともに今日の話題であるため、率直な議論がなされた。特に、情報ネットワークが地域社会、地域文化に与えるであろう影響に関して活発な話し合いがなされた。その一方で、個人主義的な考え方の身に付いた世代を象徴するかのよう、情報ネットワークを取り巻く法律的問題に関しては、総論賛成各論反対、つまり、個人の自由任せにすべきだという意見が日米双方から多く出た。

合計10回の分科会議論を通して挙げられた事柄は、けっして専門的ではなかった。しかし、昨今のメディアを取り囲む巨額の企業合併やソフトウェア産業を巻き込む世界規模での規格競争が頻繁に起こる米国と、今まさにアメリカの歩んでいるメディア変革に突入しようとしている日本の学生が率直に意見を交わせたことは、今後の社会の担い手であるべき私たちにとってまたとない貴重な機会となった。

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

Jason Hays*	"Issues of Responsibility"
Robbi Louise Miller	"(Ir)responsible Media: O.J.Simpson and Aum Shinrikyo"
Melinda Ng	"The Faces behind Media Bias in American Broadcasting"
Jennifer Deming	"A Critical Examination of the 'Promise' of the Information Technology"
島田 恭子	"Media's Contribution and Problems in Modern Society"
村田 知子	"New Era of the News"
見市 礁	"Can Multimedia Service be a Star Industry in the 21st Century?"
柳井 哲史*	"How should we promote communications between groups of different interests concerning the 47th JASC"



「情報とコミュニケーション」分科会



哲学から探る人間の可能性

Philosophy and Human Potential

本会議までの経緯

94年夏、米国でのJASCを終えようとしていた私（土井）は、華やかで楽しい会議の中に、何かもの足りなさを感じていた。日米関係シリーズの一環として米商務省でブリーフィングを受けた際には、当時問題となっていた日本の貿易黒字に関して、通商代表部の官僚が一方的に日本の態度を罵っていた。またシアトルでの環境フォーラムでは、ワシントン州の森林資源について、環境保護派の活動家と林業関係者が不毛な議論を展開した。

そういった議論が終わる度に、参加者はそこから一体なにを得たのかと考えた。自分が置かれた立場の再確認をしているだけではないか。その立場に応じて自分の意見をとうとうと述べているだけではないか。本来自分が、ひとりの人間として求めているものは一体何だろう。突き詰めてみれば、実は各人が同じような基本的な欲求の下で様々な実現方法を取ろうとし、それが擦れ違いを生んでいるだけなのかも知れない。この人類に共通するような根源的な「何か」を翌年の会議では探してみたい…。

こうして米国側実行委員長のジョン・ハーディングと私が今回の会議の「哲学から探る人間の可能性」分科会をコーディネートすることになった。英文タイトルの“Philosophy and Human Potential”のPotentialという単語はジョンの発想によるもので、人類には平和や幸せといったクオリティを求める天賦の何かが共通に備わっているはずだ、という期待を込めたものであり、感激した私はその場で大賛成した。

それから本会議までの一年間の準備活動は概ねスムーズに運んだ。特に春に新メンバーを迎え入れてからは全員で分科会の運営方針を話し合うことができたが、これは電子メールの活用によるところが大きかった。すなわち、各自が分科会に関する提案などをジョンに送信すると、彼が数人分の意見を取りまとめてから、電子メールにアクセスのあるメンバー全員にそれを転送するという形を取り、時差や距離を感じることなくコミュニケーションを図ることができた。これは、実務的に有効であったという以上に、海の向こうで共通のテーマを一緒に考えている人がいる、と実感できた、また日本側にとっては直接に英語でコミュニケーションを図るトレーニングになったといった点で有意義であった。電子メールにアクセスのないメンバーはファクシミリを介して間接的に参加する形を取った。

共通テーマ：「人間としての知の共有はできるのか？」

発表タイトル（*印はコーディネーター）

①自己への覚醒(Self)

- | | |
|-------------------|--|
| 湧永裕子 | 自己の探求 The Search for the Self |
| Alexander Millkey | 欲求の秩序 Needful Things -The Psychology of Religious Structure- |
| フィールドトリップ | 養老猛司、森岡正博両先生とのディスカッション（健康分科会と合同） |
| フィールドトリップ | 坐禅体験 |

②宗教の可能性(Religion)

- | | |
|---------------|--|
| 土井洋平* | 信心とアイデンティティ Are We Fundamentally Different? |
| John Harding* | 人生の意味 Ancient Near Eastern Wisdom Literature |
| 都路恵子 | 宗教の持つ意義 The Potential of Religion |

③哲学と社会(Society)

- | | |
|-----------------|--|
| Kevin Saari | コミュニティの効用 Community in the New Axial Age |
| 小林洋子 | なぜ戦争に至るのか Why Do People Resort To War? |
| Julie MacDonald | 「自由」を定義する The Meaning of Freedom |

討論内容

①最初に湧永は、禅の悟りの段階を描いた「十牛図」を用いながら、自己を探求することの意味を論じた。探し求めるべき存在としての自己について、気づく人もあれば気づかぬ人もある。この分科会では全員がその存在を認めた上で、この探求は煩惱の除去、克服を目的とした高次元の欲求ではないかと考えた。これについてMillkeyは、人間の持つ欲求を整理し順序立てて考えることを提案した。すなわち人間は順を追って生理的欲求、自己保全への欲求、コミュニティへの欲求、尊厳への欲求を抱き、最後に自己実現への欲求を満たそうとするというものである。この「自己実現(Self-Actualization)」はこれ以降、分科会での重要なキーワードとなった。

②土井は日米の信仰の形態を客観的に比較した上で、日本の宗教の持つ曖昧さや多重性が宗教上の先鋭化そして紛争を避けるモデルとなりえないかを議論した。Hardingは宗教的、呪術的な経験が普遍性を持ちうるかを起点にして、普遍的真理の存在の是非を考えた。都路は幸福を短期的なものとの長期のものに峻別し、後者における宗教の意義を説いた。

③Saariはコミュニティの果たす役割を示し、それらに共同作業のような動的なものとの感情の共有のような静的なものがあること、また現状では前者が偏重され後者が軽視されがちになっていることを問題として提起した。小林は日本における十五年戦争期の国家主義を考証した上で、平和とはどのような状態か、その平和を実現するために我々はどれほどの帰属意識を持つべきかなどを考え、個人の平和なくして世界の平和はないことを強調した。そして最後に分科会の締めくくりとしてMacDonaldはテーマに自由を取り上げ、自由の価値を絶対視する米国と、秩序の範囲内で自由を認めようとする日本の違いに注目した。この点に関しては意外にも米国側が自国の現状について批判的であり、日本的な自由の在り方について「物理的な制約はあっても思想の自由には介入しない」として賛同していた。

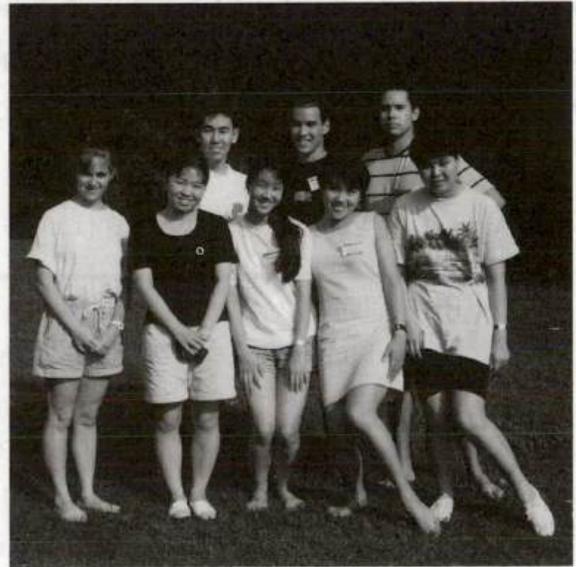
総括

今回の哲学分科会は米国側が総じて「東洋的な」価値について理解を示す傾向があった。つまり日常生活習慣などの表現型には日米で大差があったとしても、哲学すなわち思想のレベルでは共鳴するものが多く、日米が議論を戦わせるというよりも、共通の新しい価値を発見しようとする共同作業としての側面が強いものとなった。

今回のメンバーから湧永、Millkey、Saariの3名が第48回会議の実行委員に選出され、「文化と芸術～事象の深層を探る～」「哲学と宗教～人間の可能性の追求～」両分科会を担当することとなった。新参加者を交え、「知」の解明に向けて更に濃密な議論が展開されることを期待したい。



「哲学から探る人間の可能性」分科会



「ライフスタイル」分科会

ライフスタイル ～人間と社会～

Life Styles

ライフスタイル分科会～人間と社会～は、自分自身がどのような環境の中で形成され、そして自分がどのように社会と関わってきたのか、という自分と社会の関係を考える事をテーマとして掲げ、人間関係、家族、アイデンティティー、パーソナル・パワー、など多岐なトピックについて議論を行った。

人間関係というトピックに於いては、自分自身を形成するために家族がどのような影響を与えてきたか、また人間関係における権力関係は私達の行動にどう影響していくか、そして個人と社会の関係はどのようにあるべきか、ということについて話し合った。そして次に、パーソナル・パワーというトピックに於いては、自分の中にある過去の経験、そして現在起こしている行動、そして未来の目標・夢の3つを統合し、バランス良く生きていく事について話し合いが行われた。さらに、アイデンティティーというトピックに於いては、混血として生まれた自分のアイデンティティーの確立、社会でマイノリティーとしての自分の存在意義、障害を持つ人間としての経験についてプレゼンテーションをもとに議論が行われた。

また、フィールドトリップとして、京都における少年鑑別所、及び大阪の視覚障害者のための訓練施設社団法人ライトハウスを訪れた。少年鑑別所では、少年犯罪を起こしたものが社会においてどのように更正されていくのかそのプロセスや、日本に於いて現在どのような少年犯罪が多いのか学んだ。また、社団法人ライトハウスでは、実際にアイマスクを付け、目の見えない状態で町を歩くという経験から、視覚障害者というものがどのようなものなのか経験し、視覚障害者たちへの援助の仕方というものを学んだ。

最後に、この分科会では、自分達に身近な経験や生き方について話すことにより、日米という国籍・文化の違いを越え、個人レベルでの深い議論ができた。最後にまとめとして、この分科会を総括する一つの詩で終わりたいと思う。

Lifestyle table ~ studying human diversity ~

Our lives, our families, our societies, our culture, our struggles, our achievements have all shaped who we are. Our different backgrounds, our different identities, our different abilities, our different way of seeing have been brought together by forces of nature and our own will. To reflect on what we have been and what we are now, to forge what we will become and where we will go. We explored issues such as identity, personal power, family, ancestors and I, balance between individual and society, minority struggles, seeing through my eyes, and power relations. These issues are ours. They represent who we are--they are our lifestyles. We are the diversity pack. Once separate, now together to learn about ourselves, and about each other. We leave as friends.

メンバーと発表タイトル (*印はコーディネーター)

Ross Chaney	"Reflect on Your Culture, If You Are Lost"
Basho Fujimoto	"Hapa 's and Fitties "
Nellie Hsu	"Model Minority Myth"
Noreen Tarr*	"Personal Power"
磯部 美香*	"Power Relations"
善塔 倫子	"Family, Ancestors and I"
田尻 雅	"A Family For Me"
宮崎 佳代子	"Independence of Visually Impaired"

GENDER DAY

ジェンダーDAY

VI. プログラム報告

- ジェンダーDAY
- 科学技術フォーラム
- APEC DAY
- マイノリティーDAY
- ボランティアDAY
- 平和プログラム
- 日米関係フォーラム

（音美路憲）憲法改正の「ジェンダー平等」

憲法改正の議論が、ジェンダー平等の観点から進められている。これは、男女平等の原則を堅持し、女性の権利を保障することを目的とする。本稿では、憲法改正の議論におけるジェンダー平等の重要性を考察する。まず、憲法改正の議論の経緯を概観し、その中でジェンダー平等がどのように位置づけられているかを検討する。次に、ジェンダー平等の観点から憲法改正の議論を分析し、その意義と課題を明らかにする。最後に、ジェンダー平等の観点から憲法改正の議論を展望し、今後の方向性を示す。



1995年7月27日 仙台市勤労者保養所 茂庭荘 会議室

GENDER DAY

ジェンダーDAY

テーマ：～男らしさ・女らしさ・自分らしさ～

企画目的

社会は、男女の性別のどちらかにより構成されている。しかし、伝統的な男女のステレオタイプ（既成概念）に影響されすぎて、またマスコミの作り出すステレオタイプに惑わされて、自分のすぐ隣にいる筈の異性について私達はあまりにも知っていない。このジェンダーデイでは、自分達の持っている男女のステレオタイプについて再検討を行い、異性に対しての相互理解を深める事を目的とした。また、社会における男女の在り方が日米でどのように違うのか、という文化的側面にも着目した。

「ジェンダー」という言葉を聞くと、フェミニズムを連想する人が多いと思うが、このプログラムでは、ジェンダーという観点から出てくる抑圧、差別などを一方の性だけでなく、両方の性から検討を加えることにより、ジェンダーの問題を自分の問題として捉えられるようにした。その為に、テーマを「男らしさ・女らしさ・自分らしさ」とし、学生同士による発表やディスカッションを中心として構成した。

企画概要

第1部 「自分はどうして今の自分になったのか」～Sex to Gender～

- | | |
|-------------|------------------------------|
| 9:00～9:15 | 生物学的性差からみた社会的性差 |
| 9:15～10:15 | ジェンダーの社会化に関するスキット（日本側、アメリカ側） |
| 10:15～12:00 | ディスカッション |

第2部 「自分らしく生きる為に」～Gender to the Self～

- | | |
|-------------|------------------------------|
| 13:00～15:00 | ゲイ・レズビアン・ホモセクシャルに対しての偏見・差別問題 |
| 15:00～16:30 | Genderless World |

第1部では、どのようにして「男」または「女」である自分が形成されたのか、ということを経験的差異、及び社会化の過程を踏まえて、検討することを目的とした。

第2部では、「男らしさ」「女らしさ」というステレオタイプから抜けだし、自分らしく生きるためにどのようにしたら良いのかということを考える事を目的とした。

コーディネーターとしての感想（磯部美香）

当初のプログラムの目的である男女の相互理解という観点からすれば、どこまでそれが達成できたのかわからない。なぜなら、とくに女性側が「自分の差別された経験」を話す事が多く、それをだいたい男性が自分の問題として認識できなかったからである。これは、男性側が社会的優位にいるものとして苦労した経験が薄いという事という事実ともに、女性に対しての差別が依然として大きいという事を認識させられた。今後「女性にとって抑圧・差別的である社会は、また男性にとってもそのような社会である」（浅井、1995）というような認識が、皆に広がっていく事を願う。

また、アメリカ側がジェンダーデイにおいて、同性愛、セクシャルハラスメント、レイプなどを問題を出してきたのに対し、日本側が女性の社会進出、「Sex」と「Gender」の差などの問題点を提示した。同じジェンダーという観点でも問題関心が違い、「gender」を考えることによって自分らしさとは何か見つめ直そう」という日本側の企画趣旨に合わないものもあわず、悩んだ。

生物学的性差からみた社会的性差

藤本 直子

GENDERは、ソフト面での論争が活発である。それがGENDERだからいいのだが、大事なこと、つまり、自分たちではコントロールできないことを無視しがちなのではないだろうか。たとえば、男女の考え方が違うとして、それは、社会や環境の影響が大きいであろう。でも、きっとそれだけでは説明できない意識や行動の違いをもたらすものが、スタート地点ですでに存在しているのがある。そこで、一部の始めに、そのハードウェアも考えてみた。

男らしさ、女らしさは、「心理的な性」であって、絶対的な判断基準がなく、文化的にも、時代としても、変わりうるものである。しかし、生物学的には、この差ははっきりしていて、両者の差異は大きく、だからこそGENDERという問題を生じている。まさに、SEXあつてのGENDERなのである。

性を特徴づけるものとして、体の器質的な違いは言うまでもないが、この他に、ホルモンの影響も大きくある。つまり、生まれた時点で、身体の形だけでなく、脳の方もすでに薄い色が付いているようなもので、それを、親がそれぞれの性らしい育て方をするので、ますます色濃い性質になっていくのである。いいかえれば、まわりがいくら変わろうと、絶対に変わらない部分もあるのである。

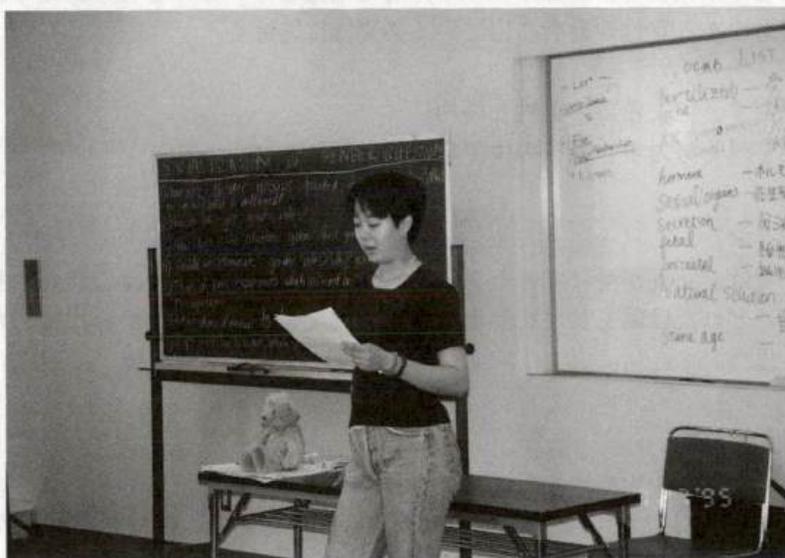
また、それだけでなく、脳の違いは、男女のそれぞれの得意分野、不得意分野を作っている。空間的な認知能力は、男性の方が優れているし、記憶力や、慎重な考え方は女性の方が優れている。

そのほか、脳は右脳左脳の2つある。両者が独立していたら、二重人格になってしまうが、実際には、脳梁という、左右をつなぐ神経の束がある。このうち、言語中枢と、聴覚、視覚中枢の、左右をつなぐ部分が、明らかに女性の方が太いそうである。これは、断定してはいけないものの、女性の方がきめ細かくものを見、音や言葉をよく聞き取る、語学が得意、などということと無関係ではないかもしれない。

<まとめ>

- * 出生時にすでにある程度の男女差がある。(内部から)
- * 家庭などの環境で性IDENTITYが生まれる(外部から)
- * 思春期に、性ホルモンの分泌が高まり身体的に「らしく」なる。
- * 同時に、受動的だった「らしさ」を自分の変化として捉え、性IDENTITYを再認識する。(内部から)
- * 思春期以後、社会からの期待の中で、男女としてどう行動するかが問題となる(外部から)

社会的に活躍する女性が増え、その成果を上げつつあり、社会における役割も変わりつつある。従来の固定的な認識から脱却して男女を考えると、その考え方の違い、または得意不得意、つまり、脳という、これまではよく知られていなかったハードウェアについて認識する必要があるだろう。もしかしたら、男性優位の社会では埋もれていた女性の才能が発見できるかもしれない。また、そのチャンスをつくってやることが、これからの社会に必要なことの一つではないだろうか。





ジェンダーの社会化に関するスキット・ディスカッション

大沢 枝里子

第一部のテーマが“Sex to Gender”であることを意識し、セックスとしての性しか持たない子供が、いかにジェンダーとしての「男らしさ」「女らしさ」を持っていくか、あるいは持たされていくか、個人を取り巻く「社会環境」に焦点をあてて描く事を試みた。

＜アメリカ側スキット＞

双子の男女を主人公に、誕生から大学入学まで描いたものである。物理に目覚めていくボーイッシュな女の子（愛子）と、パレーのダンサーを目指す（愛太郎）と、ジェンダーに左右されることなく自分らしくあろうとする彼らを、周りの大人も暖かく見守るという筋書きになっている。彼らの母親は、仕事に情熱を燃やすキャリアウーマンだが、夫の献身的な協力もあって、子育てにも支障はない。唯一の難点となる人物は、彼らの教師で、物理好きの女の子に家庭科を、音楽好きの男の子には工学のクラスを強制的に履修させようとする。結末は、女の子がMITに、男の子がジュリアードに合格するところで終わる。

＜日本側スキット＞

姉と弟に焦点を当て、彼らが誕生してから成長するまでに遭遇するであろう日本社会のジェンダーに関するステレオタイプを描いた。

幼少期

姉 第一子であったため、封建的な父親に疎んじられる。「最終的にはどこかへ嫁ぐ女に高等な教育は必要ない。」とする父親だが、「教養がなくてはいいいお見合相手がみつからない」という母親の意向で名門私立幼稚園に入学する。彼女自身は男の子っぽい服を好むが、母親は赤やピンクとって服しか買わない。

弟 父に「世継ぎ」として溺愛される。

小学校～中学校

姉 友人と将来について話す。一人は宇宙飛行士になりたい、と言い、もう一人は家庭を守る主婦になりたいという。まだ確固とした目標がない彼女だが、思いを寄せる男の子の「宇宙に行くような女の子よりも料理がうまいほうがいい。」という言葉が忘れられない。

弟 父の影響を受けて、姉にすら「女は男の支配下にある。だから、お前も俺に口答えするな」と手厳しい。家事分担を免除される特権を持つ。成績は良く、名門私立高校に合格する。

高校～大学

姉 東大に合格。しかし、両親は「そんな大学に行ったら、結婚相手がみつからない」と、猛反対する。学費を自分で出すという条件でなんとか説得する。

弟 一浪ののち、同じく東大に合格。姉が様々な分野で活躍しているのを目のあたりにして、彼女を見直していく。同時に、能力のある女性が社会に出ていく必要性に気付く。

その後

姉 記者として働きだす。主夫希望の男性と婚約。

弟 父親の会社を継ぐべく努力中。家族の中で姉の味方となる。

＜ディスカッション＞

私が属したグループでは、女性が受けてきたジェンダーの差別の披露に多くの時間を割いた。その後、アメリカと日本の社会が、どれだけ働く女性をサポートする制度を持っているかを比較した。概して、男性は聞き役に回っていたと思う。

＜企画者としての感想＞

アメリカと日本のスキットを比較すると、前者がジェンダーを越えた自分らしさを容認するのは当然という流れで話しが進んでいるのに対して、日本はステレオタイプを全面に打ち出した作りになっていた。（やや強調し過ぎたというきらいもあったが、非現実的なことでは決してない。）そうした点にも、両国のジェンダー問題に対する姿勢が現れていたとってよいのではないだろうか。

企画趣旨

現在の私達の生活の中で、同性愛というのは、ある種禁じられたものである。人は自分が同性愛であると知ると、それを必死に隠そうとしたり、またそれに対して罪悪感を感じたりする。また、また同性愛でない人々は、その無知から偏見だけを持ち続ける。

この悪循環を断ち切り、同性愛に対しての正しい情報を得るためにこの企画は計画された。ただし、日本側ですべてをやるにはあまりにも情報がないので、米国側に立案・責任をすべて引き受けてもらった。

企画内容

当初この企画は、ゲイ・レズビアン・ホモセクシャルに対しての正しい情報を与え、その偏見を少しでもなくす、という内容の予定であった。そして、最初の数分間は、互いに簡単な同性愛の情報に対するクイズ・意識調査などをやっていた。しかし、企画が進んでいくうちに、ある米国側参加者が立ち上がり「I want to testimony.」(私は告白をしたい。)と立ち上がり、皆の前で自分の生い立ちについて話し始めた。その告白は、次のようなものである。

彼の母親は、レズビアンであった。レズビアンという社会的に禁じられるもの、許されないものを母親として持った彼は、自分の母親がレズビアンとして存在する事を嫌った。学校で、彼の男友達は、ゲイやレズビアンをバカにする冗談を頻繁に言った。そうやって「男らしさ」を身につけるのが、アメリカの少年社会である。しかし、彼は、自分の母親がレズビアンであるがゆえに、その冗談には一人加わらなかった。いや、加われなかった。その冗談には、まるで自分の母親の存在と自分の存在が否定されているような気がした。そして、そんな気持ちを抱かせる母親の存在を家に帰り、一人憎んだ。

しかし、そんな彼が母親の愛情に気づいたのは、20歳の頃である。ある日、彼は、自分があれほど母親を嫌っていたのにも関わらず、あれほど傷つけたにも関わらず、母親が自分に対してずっと限りない愛情を注いでくれていたのに気づいた。つまり、彼が友人の冗談や社会常識に囚われてずっと見えなかった母の愛が、ある日見えるようになったのである。

この告白の後、もう一人同じようなレズビアン母親を持つ参加者が前に出て、自分の体験が話された。場内はシーンとし、泣いている人もたくさんいた。この告白のため、その後の当初の予定はすべてキャンセルされた。しかし、この告白は何よりも参加者の心を打った。紙に書いた情報では見えてこなかった同性愛者の苦しみ、私達が持っている偏見、及びその強さが少しわかった。普段見えない同性愛者の現実を目の前に突きつけられ、その現実の重さに皆言葉も出なかった。



企画趣旨

私達は人生の中で幾度も「人生の転機」にさしかかる。その時の私たちの選択の決定には、どの程度“GENDER”が関わっているのだろうか？このことを考えるために、“GENDERLESS WORLDS”（社会的性差のない世界）を想定し、転機にさしかかった6人の人物をそこへ“TRIP”させ、“GENDER”がなかったら彼・彼女はどうか、というような“GENDERLESSな決断”について考えてみる。その結果、私達の人生に知らず知らず影響を与えている、“GENDER”の存在に気付く事ができるのではないだろうか。

方法

- ・全員を日米男女を基準として、5人ずつのグループに分ける。
- ・6つのシチュエーション（うち2つはアメリカ側が用意する。）を設定し、個々についての①スキット（各5分）を見て、②グループディスカッション（各15分）を行い、③発表（各5分）しあう。④最後に、全体的なWRAP UP（20分）を行う。

スキットの内容

<CASE1: "Aki's Dream">

かつてダンサーを目指したが諦め、主婦として家事や育児に忙しいながらも平穏な毎日を送る23歳の女性が主人公。ある日突然、ブロードウェイミュージカル出演のための渡米のチャンスが舞い込む。諦めかけた夢の実現に賭けるか、現在の、刺激はないが穏やかな幸せを守るべき夢のままで終わらせるかの選択を迫られる。

<CASE2: "Sexual Harassment">

アメリカのとあるオフィスにて。すでに大きな問題となっている「セクハラ」の一つの形態として、女性の上司が男性新入社員に対し性的いやがらせを続けるという事態を設定する。

<CASE3: "Michael with a Doll">

外で友達と遊ぶよりも、一人で人形遊びに熱中してしまうため、「女の子のようだ」とからかわれ、いじめられるマイケル坊やが主人公。「男の子らしく」なって欲しいと願う母親と、「自分らしさを大切に」と願う父親が息子をどう育てるべきか悩む。

<CASE4: "The 'Genderful' Alpine Club">

厳しい登山を行うため男性部員のみでの大学の山岳部に、ある日女性が入部したいとあって訪れる。彼女は登山経験豊富でたくましい体つきをしており、入部しても支障はないという部長の判断に対し、女性は体力がなく、感情的でヒステリーであるという固定観念に縛り付けられている他の部員は猛反対する。

<CASE5: "Rape">

ある日夜の公園で、見知らぬ男性が同じベンチに座って話しかけてきたとき、あなた（女性）はどうか。相手はただ世間話をしているだけであるが、レイプされる危険性を警戒すべきが否か。

<CASE6: "Hilary's Dilemma">

有名大卒で弁護士の資格を持つ才女が、村長に立候補することを考える。しかし、女性は黙って美しければよいという村の男性の古い思想を考えると、政治能力とは無関係に、女性であるという理由だけで村長として認められないであろう。そこで夫を村長にして影で働こうかと考えるが、それではどんなに努力しても彼女の業績として認められることはない……。

スモールグループディスカッション

<CASE 1 >

- ・アメリカでは、働く女性のための制度や施設がある程度整っているが、日本では難しい問題のようだ。（アメリカ女性）
- ・“GENDERLESS WORLD”ならば夫が妻の役目を果たせばよいのであろうが、現実には育児を最優先しない女性は母親失格とされる。（日本女性）

- ・夢をそう簡単に諦められるのか？自分が夫なら家事を担当して行かせてやりたい。（日本男性）
- ・自分の子供に責任があり、そのような事をしたら罪悪感に押しつぶされそうだ。（日本女性）

<CASE2>

- ・女性は本能的に男性に触れられることへの恐怖心があるが、これは他の男性に攻撃されることへの警戒心が男性に備わっていることと同様なのは。（アメリカ女性）
- ・アジア的な発想として、「"NO"は必ずしも"NO"を意味しない。」というものがあるように思うが、この問題に関してだけはアジア女性もはっきりと"NO"を言えるようになるべきだ。（アメリカ女性）
- ・"GENDERLESS WORLD"では"Sexual harassment"は存在せず、純粋な「力」の問題としての"harassment"があるのみである。しかしここにおいても生物学的差異は残るのであり、男性は女性を支配することになるだろう。現実世界においても男性は力に任せて欲しいものを力づくで手に入れている傾向がある。（アメリカ男性）

<CASE3>

- ・"sex"（生物学的性差）と"gender"（社会的性差）との境界線は、どこに引かれるべきなのだろう。ある行動や考え方に対し、「男らしい」「女らしい」とする根拠は、相当程度まで生物学的な特徴に根ざしているように感じられる。（全体）

<CASE4>

- ・同様の事例は確かに日本で起こっている。しかし、最近急速に女性の持ちうる能力についての認識が高まっているので、事態はそう深刻ではないのでは。（日本女性）
- ・例えば消防士は、強靱な肉体を要するのであり、相対的に男性に「向いている」と言わざるを得ない分野は確かに存在する。しかし、それを「男性一般」の能力として当然に期待したり、逆に女性には試すまでもなく機会が奪われる、というようにステレオタイプ化する事が問題なのだ。要は本人の適性である。（アメリカ男性）
- ・女性は男性社会に入ろうとしても、男性の2倍の努力が要される。たとえ試験で高得点をとってもそのまま評価されない。（アメリカ女性）

<CASE5>

- ・このスキットと同様の事態が起きたとき、アメリカ人女性ならば必ずレイプの危険を考えるが、日本女性は必ずしも警戒しないであろう。日本女性も自分の身を守る事をもっと考えるべきだ。日本でも多くのレイプ事件が起こっているはずで、単に告白をためらう風潮があるだけであろうから。（アメリカ女性）
- ・見知らぬ人に襲われる事件より、むしろ「デートレイプ」の方が多い。いつでも自分に起こりうることを認識すべきだ。（実際にデートレイプをうけた体験談）⇒常に人を疑い、警戒するのは悲しいことだが、実際にレイプされてしまうことの悲しさ、悔しさとは比べものにならない。レイプされた経験はその人の外見に現れるわけではないが、心の中に決して癒えない傷が残る。告訴しても傷は癒えないし、かえって両親などに衝撃を与えることを考えて何も言えずじまいだった。（アメリカ女性）
- ・何件起こったかは問題ではない。社会問題として捉えるより、人間の惨めな本能の問題である。（アメリカ女性）
- ・日本人には、このディスカッションは別世界のショッキングな告白の寄せ集めのように聞こえたであろう。しかし、アメリカの学生の生活には、日本人が思うよりもっと多くのパーティーがあり、酒があり、奔放な男女交際があるのであり、レイプも珍しくない。（アメリカ女性）
- ・男性としては、自分がレイプするのでは、と女性に警戒されるのは屈辱的である。しかし、自分のみが守るための唯一の方法であるところが残念である。（日本男性）
- ・レイプされたその時だけではなく、それを法廷に持ち込んだときに作り話ではないかと多くの質問を受け、二重の苦しみがある。（アメリカ女性）
- ・なぜレイプをする男性を責める話をしないのか？そもそも非はこちらにあり、社会問題的視点も含めてもっと考えるべきではないだろうか。（日本男性）

<CASE6>

- ・政治や経済など、実際に世界を動かすような分野においても、女ならではの活躍ができるはずである。（日本女性）



◆フォーラム：7月29日（土）10：00～17：00 仙台市青年文化センター

◆人体展：7月27日（木）～30日（日） 9：00～16：45 仙台市科学館

Science and Technology Forum

科学技術フォーラム

テーマ：「科学・人間・社会」～科学ってだれのもの？～

講師：養老 孟司 氏 (元東京大学医学部教授)
 榊 佳之 氏 (東京大学医科学研究所教授、ヒトゲノム解析センター長)
 森岡 正博 氏 (国際日本文化研究センター助手)
 沢田 康次 氏 (東北大学電気通信研究所教授)

後援：宮城県、仙台市、日本医師会、日本解剖学会、宮城県医師会、仙台市医師会、上廣倫理財団

協力：株式会社 メタ・コーポレーション・ジャパン 仙台市青年文化センター
 NHK / NHKエンタープライズ21 仙台市科学館
 東北医療福祉専門学校 日本通運株式会社
 東京大学医学部標本室 日本コンベンションサービス
 アロアロインターナショナル

石田 名香雄 氏 (元東北大学総長)
 田崎 京二 氏 (東北大学名誉教授・東北医療福祉専門学校長)
 石井 敏弘 氏 (東北大学名誉教授・医学博士)
 鶴巻 勝雄 氏 (仙台市科学館館長)
 松原 謙一 氏 (大阪大学細胞工学センター所長)
 多田 富雄 氏 (東京大学名誉教授)
 村上 陽一郎 氏 (国際基督教大学教授)
 中村 桂子 氏 (生命誌科学館副館長)
 Dr. Darryl Macer (筑波大学教授、Eubios Ethics Institute代表)
 加藤 尚武 氏 (京都大学文学部教授)
 吉田 穰 氏 (東京大学医学部標本室主任)
 Dr. Gunter Von Hagen (ハイデルベルグ大学医学部教授)
 林 勝彦 氏 (NHKサイエンススペシャル「驚異の小宇宙・人体」エグゼクティブプロデューサー)
 町田 聡 氏 (メタ・コーポレーション・ジャパン マーケティングプロデューサー)
 鈴木 一 氏 (東北医療福祉専門学校理学療法科科長)
 久家 直巳 氏 (東北医療福祉専門学校理学療法科教員)

通訳：野口由紀子氏、富田嘉子氏、河合ひろみ氏

企画目的

- ①「科学」と「人間・社会」の間の壁を越え、誰もが「人間」として「科学」を考えられるようにする。
- ②「人間」に関する斬新な素材を提供することで、「人間」についてより深く考えるきっかけとする。
- ③社会に対して提言を行うことで、よりよい科学・人間・社会の関係の形成に貢献する。
- ④東北インテリジェントコスモス構想に貢献する。

企画趣旨

まず私たちは、科学の現状として、①「科学者の科学」と「私たちの科学」の乖離、②「科学」と「人間・社会」の乖離、の二つを挙げ、この二つの乖離を解決するために「「人間」として「科学」を考える」ことが必要だと考えた。そして、「人間」として「科学」を議論する際の最も相応しいトピックとして、「人間をめぐる科学」を取り上げることにした。「人間」は私たちにとって最も身近な科学の対象であり、この科学の成果は、人間・社会に直接的に影響を与えるからである。具体的に、この企画で取り上げたのは、①人間のDNA、②人体（実物の標本・コンピュータ上の映像）である。

①人間のDNA

現在、ヒトのDNA情報を全て解読しようという「ヒトゲノムプロジェクト」が、国際協力の下、科学史上空前の規模で進められており、この計画が完成され、DNAの細かい働きが解明されていけば、医学分野などで人類に多大な貢献をすることが期待されている。しかし、このヒトゲノムプロジェクトや、遺伝子診断、遺伝子治療、遺伝子操作など「人間のDNAをめぐる科学」が倫理上の様々な問題をはらんでいるということも忘れてはならない。人間は個人のDNA情報をどう扱うべきなのか、どこまでDNAに手を加えてよいのか。今後、人間のDNAをめぐる話はますます日常的になっていくであろうが、それが他ならぬ人間自身をめぐる科学技術である以上、一部の人間に判断を任せるのではなく、私たち自身がこの問題を真剣に考えべきである。

②人体（実物の標本・コンピュータ上の映像）

「人間のDNA」は肉眼では見えないレベルでの話であり、身近な話として感じるのには限界がある。科学が別世界のものでなく、すべての人間にとって身近なものであるということを誰もが理解できるように、この企画では「人間のDNA」についての考察に加えて、「人体」を取り上げた。

この企画を一言で言うなら、「人間の人間による人間のための科学技術フォーラム」である。ここで「人間」というのは、社会上のあるあらゆる枠組みを取り去ったレベルでの私たちのことであり、「科学の主体者」「科学の対象」「科学の目的」の全てを包含した存在である。そのレベルでの「人間」として、「科学」と「社会」との共生を目指そうというのが当企画の最大の目的である。

そして同時に、「人間」が宇宙・地球・地球上の生態系といったより大きなものの中に存在する小さな生命体に過ぎないという事実に対しては、常に謙虚である必要があると私たちは考える。「人間の人間による人間のための科学技術フォーラム」は人間の傲慢さを表現するものではなく、地球環境・生態系の中にある「人間」としての視点も含まれている。人間についてより深く考えることで、人間とそれをとりまく環境との共生を目指すこと、それも当企画の一つの目的である。



科学技術フォーラム企画メンバーと講師



科学技術フォーラム企画の経緯

日米学生会議は、日米関係や安全保障問題など社会科学的なトピックを扱う場というイメージが強いが、そのような中でこの「科学技術フォーラム」を企画するのは大いなる挑戦であった。「日米学生会議でなぜ科学技術なのか」「日米学生会議でなぜ「生命」なのか、「人間」なのか、「遺伝子」なのか、「人体」なのか、……」。数多くの壁を乗り越えて実現したこの企画の経緯を振り返ってみたい。

「科学技術フォーラム」の実施が決定されたのは、46回会議の最後に行われた新実行委員会会議においてである。科学技術フォーラムが第47回日米学生会議の正式企画として取り入れられたのは、以下の理由による。

- ①科学技術は分科会で取り扱うよりもプログラムで扱うのに相応しいテーマである。
- ②学際化・ボーダレス化が進み、科学技術を自然科学的な視点だけから見ていけばよい時代は終わった。
- ③仙台は「東北インテリジェントコスモス構想」の中心都市として、科学技術の発展に力を入れている。

まず私たちは、「『科学と人類』～人類は科学といかなる関係を築いていくべきなのか～」というテーマを掲げ、それとともに講師候補の選定と交渉を開始した。当初は、第47回日米学生会議の開催時期と同時期に広島で開催される「バグウォッシュ会議」と関連させた企画も考え、バグウォッシュ会議評議員の小沼通二慶応大学教授などとも交渉を行ったが、残念ながら実現には至らなかった。なお、このバグウォッシュ会議がノーベル平和賞を受賞したのはこの年の暮れのことであった。

私たちは、取り上げるトピックを、科学と人類の接点となる「生命」にしぼる方針を固め、全国の著名な方々との交渉にあたった。コンタクトをとらせていただいた順に、石田名香雄氏、養老孟司氏、多田富雄氏、村上陽一郎氏、ダリル・メイサー氏、松原謙一氏、榊佳之氏、中村桂子氏、エリック・ランダー氏（MIT教授）、ピョートル・スロニムスキー氏（フランス分子遺伝学センター教授）、加藤尚武氏、森岡正博氏、石井敏弘氏、田崎京二氏、吉田穰氏、沢田康次氏といった方々である。

養老孟司氏は、最初の面会のとき、3月末に東京大学総合研究資料館で、9月に国立科学博物館で人体プラスチック展示の展示を行うことを教えて下さり、その二つの展示の間であれば私たちの企画に標本を貸すことができる、という提案をして下さった。人体標本の一般公開は前例がなく、当初は私たちにも迷いがあったが、結局、このチャンスを利用させていただくことにした。そして、テーマを「生命」から「人間」に限定することも決めた。人体標本の展示は、実現までにさらに多くの壁が待ち受けていたが、貸し出し側の養老氏、吉田穰氏、仙台での受け入れのために奔走して下さいました石井敏弘氏、田崎京二氏をはじめ数多くの方々のご尽力のおかげで、実現するに至った。

テーマを「人間」にしぼるとともに、「人体」とは別のトピックとして、「ヒトゲノムプロジェクト」を取り上げることも決まった。このプロジェクトを世界的にリードする榊佳之氏や、その倫理問題を研究されている加藤尚武氏、森岡正博氏などの方々から貴重なアドバイスをいただけたのは幸いであった。

ここに改めて、多大なるご協力を下さった皆様に心より感謝したいと思う。



人体展にて、養老・森岡両氏と

フォーラムの概要

科学技術フォーラムは、北澤咲弥花、Malik Rashidの司会によって進められた。なお、言語は主として日本語を使用し、米国側参加者のために日本語から英語への同時通訳が行われた。

企画説明

主催者を代表して実行委員の高野利実が企画の趣旨と目的を説明した。

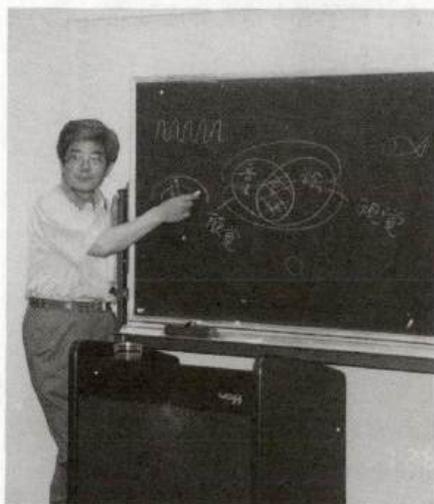
映像プレゼンテーション「人間をめぐる科学 ～DNAから人体まで～」

NHK/NHKエンタープライズ21、(株)メタコーポレーション・ジャパンからの映像・技術の提供を得て、湧永裕子ら日米学生会議参加者が作成した約10分間の映像を会場で上映した。「DNA」から「人体」、「宇宙」までの様々なレベルの映像によって「人間をめぐる科学」の紹介する内容で、大沢枝里子、Kevin Saariがナレーションを行った。

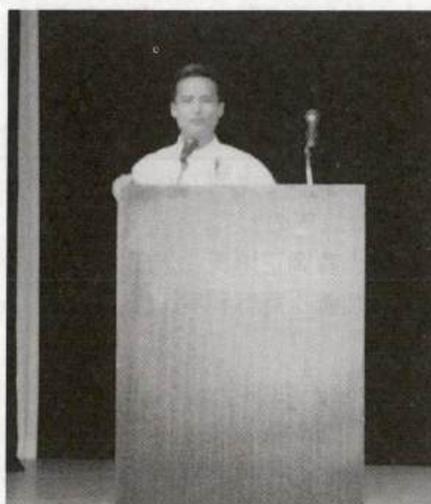
養老孟司氏 講演「人間の見方」

養老孟司氏は、企画当日の急用のため帰京されることになり、急きょ、前日夜に講演のビデオ録画を行って、それを上映することとなった。以下、その内容である。

科学の基本的な性質とは、合理化する、計量化するといったことである。本来の自然科学は、合理的であるとは必ずしも思えない自然というものを合理化・計量化することであるが、現代の自然科学は「予測と統御」という性質を肥大化させ、予測と統御ができない「自然そのもの」はできるだけ考えないようにってきている。人間がいつ何の病気で死ぬか、というようなことは科学では考えないのである。ここで、人間は真っ二つに割れる。よくわからない「自然身体」と、合理化され、計量化される「人工身体」の二つであり、社会が人工化すればするほど、「自然身体」としての人体・死体は隠されることになる。科学というシステムは、「自然」の側ではなく、「予測と統御」の側に大きく構築されつつあるのである。



養老孟司氏講演



森岡正博氏講演

昼休み：人体展見学

昼休みを利用して、日米学生会議参加者と企画への一般参加者は人体展を見学した。

榊佳之氏 講演「ヒトゲノムプロジェクトと社会」

榊氏は、まず最初にわかりやすくヒトゲノムとは何か、ヒトゲノムプロジェクトとは何かを説明され、つづいて、このプロジェクトが社会に貢献している例として、ゲノム解析が病気の原因究明につながる例をいくつか挙げた。たとえば、アルツハイマー病では、原因遺伝子がほぼ突き止められ、病気の発症機序の解明や治療法の開発が進められているそうである。



榊氏は、このプロジェクトに付随して起こりうる法律的、倫理的、社会的問題についても言及した。遺伝子解析で治療法が確立されていない病気になることがわかったときの対処のし方、胎児の遺伝子診断で異常が発見されたときの人工中絶の是非、個人の遺伝情報の管理基準など、様々な問題について、研究者間でも意見交換を行っているそうである。

最後に、榊氏はこう指摘した。「人間は、ゲノムを解く知恵と、それを使う力を有効に用いるべきであるが、自分たちは長い進化の歴史の中のほんの一時期にいる一つの生物にすぎないのだという謙虚さも必要である。」

森岡正博氏 講演「遺伝子医学の倫理問題について」

森岡氏は、まず、20世紀の科学技術がメリットだけでなくデメリットも持っていることを指摘し、原子力の例を挙げた。そして、遺伝子医学の分野で現在起こりつつある問題点について述べた。

①<遺伝子診断>特に胎児・受精卵の遺伝子診断の問題。障害がある赤ちゃんの命を絶ってもいいのか？選別の可能性の広がり、同時に人間の引き受ける責任の増大も意味する。

②<遺伝子治療>体細胞に対する遺伝子治療はすでに始まっている。受精卵に対する遺伝子治療は、その結果が子孫に遺伝されるので危険とされ、現在は行われていないが、いずれ行われる可能性はある。

③<ヒトゲノム解析>ゲノム解析自体に大きな倫理問題はないが、このプロジェクトはネットワークとして遺伝子診断・治療なども密接に関わっており、副次的に様々な問題を引き起こすと思われる。ゲノム解析をしている研究者は、ネットワーク上でつながっている臨床上の問題についても社会的責任を負うべきだ。

つづいて、森岡氏は、遺伝子医学のはらんでいる問題についての問いかけを行った。

①<正常と異常の問題>異常なものは正常に戻すべきだという価値観が遺伝子治療などの技術を進めているが、この価値観は障害者の抑圧につながるのではないか？

②<障害者は少ない方がいいのか？>技術の進歩によって先天性の障害児の数が減ることが予想される。それをよしとする価値観の中で、われわれは障害者にどういったまなざしを向けるべきなのか？

③<生命の管理は幸福につながるか？>遺伝子医学の進歩によって人間の生命を生から死まで徹底的に管理できるようになり、自分の将来がある程度わかるようになるが、これは幸せなことだろうか？

④<一般の人と科学との関わり>科学者のやっていることや、科学者を抱えて成り立っている社会の運営方法について一般の人の側から問いかけを行うべき時代が来ている。

パネルディスカッション「科学・人間・社会」

高野が仙台宣言について説明した後、「科学・人間・社会」をテーマとするパネルディスカッションが行われた。パネラーは以下の7名。

講師：榊佳之氏、森岡正博氏、沢田康次氏

日米学生会議参加者：高野利実、青山絵美、John Harding、Linda Kang

沢田 21世紀には、分子生物学とコンピュータ科学の接点として、人間がクローズアップされてくる。

高野 生命とは何か、知性とは何か、そして、生命と知性を兼ね備える人間とは何か。

森岡 「生命とは何か」というのは、「私とは何か」という問題を考えることである。

沢田 「人間の心」と「生きているということ」をもっと大きく、科学的に捉えるべきである。

榊 利根川進氏は「生物は非常に複雑な機械にすぎない」と言っているが、これは現代科学の方法論の極限である。ミクロに分析することはできても、それで全体の生命や人間が明らかになるとは思えない。

森岡 われわれの心や生命というものは、科学の方法論で理解できる側面と理解できない側面がある。科学が扱うのは、再現可能なものであるが、われわれの人生は再現可能ではない。

沢田 今後、自然科学が生命を扱うようになるにつれ、科学と哲学は深い関係を持つようになる。科学とnon scienceというわけ方をせず、すべての人間が感情を持ちつつ、明晰な頭脳で考えるのが自然である。

Kang 科学はピュアであると思っていたが、そのどろどろした世界を見て失望した。

榊 科学は知的好奇心から生まれるという意味でピュアである。ただ実際に科学を動かそうとすれば、社会問題が起きる。社会への影響は常に考えるべきだが、純粋な科学はそのためにも止めるべきではない。

森岡 科学はピュアで、悪い使い方をするからよくない、という言い訳はすべきでない。

- 榊 約20年前、組み換えDNAの技術ができたときに、科学者はアシロマ会議を開いて、その社会的影響について考え、ガイドラインを作った。ゲノム計画でも同じような動きがある。
- 高野 この科学技術フォーラムのコンセプトとして「第二のアシロマ会議」というのがあった。日米学生会議という科学者にならない人が多い集団で科学の問題について考えることは意義のあることだ。
- 森岡 アシロマ会議は、こういう問題を社会全体で考えるときの貴重なモデルである。
- Harding 科学は人を幸せにするか？
- 沢田 私は、昔から見れば今の状態はhappyだと思う。
- Kang 科学が知的好奇心によるものだというのはわかるが、社会は、純粋な知識よりも、その結果の方に関心がある。科学をよく知らない政治家などの影響を受けずに、科学者は研究内容の決定をできるのか。
- 榊 科学者は政府などから多少の影響を受けるが、基本的には、自分の意志と責任で研究を行っている。
- 森岡 民間企業から金が出る場合は、見返りが求められる。国から金が出る場合は、国益が求められる。
- 高野 科学は、政治、金、権威の力を乗り越え、独自の哲学をもつ必要がある。



パネルディスカッション
左から、Kang、森岡氏、榊氏、沢田氏、青山、高野

- Harding 今後、科学の発展によって、本当に人間や宇宙のことがわかってくるのか？
- 沢田 科学ですべてはわからない。人間や心を知るのにも限度がある。科学はその限度を明らかにする。
- 森岡 いずれ、人類は科学の方法論でわかることはすべて知り、そこで科学は停滞する気がする。
「科学は人間を幸せにするか」というのは、「私」を幸せにするかというレベルで考えるべきだ。
- 沢田 デカルト以降の科学精神によって人類はわけのわからない中世から抜け出し、happyになった。
- 森岡 中世はわけがわからない、科学はデカルト以降にできあがった、というのは古い啓蒙思想だ。
- 沢田 人々が科学的精神を持つ限り、知るべきことは無限にあり、科学が飽和するとは思わない。
- 高野 森岡先生は科学の方法論の有限性、沢田先生は科学精神の無限性を言っていて、両方正しいと思う。
- 森岡 南北問題について触れたい。不妊治療などの先端医学に巨額の金が使われているが、もしその金を途上国の医療、衛生状態改善に使うなら、より多くの人々が救える、という現実がある。
- 榊 先端医学は限られた目的でやっているのではない。南北問題は別の視点で考えるべきだ。
ヒトゲノムプロジェクトでは南北問題を考慮し、途上国の人に情報を共有してもらう努力をしている。
- 高野 最後に、「科学・人間・社会」の調和について、まとめの言葉を。
- 森岡 アシロマ会議のようなことを一つのステップとしながら、複雑なネットワークを形成している現代社会において、いろんな立場の人たちの対話システムを築いていくことが21世紀では重要になる。
- 榊 科学者の方から一般の人に知識を公開して対話をしていくことが重要だ。ヒトゲノムプロジェクトはそのためのいいレッスンだと思う。このフォーラムのような場も意義がある。
- 沢田 人間とはどういうものかということ、科学の枠を超えて、すべての人類が考えていくのが21世紀の文化、学問だと思う。「知る」というのは科学の根本であり、happinessである。
- Harding 人間とは何か、という問いは重要だ。科学には、じっくりと考えずに、すぐに問題を解決しようとする側面があるが、人間には曖昧さも必要だし、抽象的な問題をじっくりと考えることも必要だ。
- 高野 科学は巨大化し、経済、政治、南北問題など、様々な問題に関わるようになった。学生は、科学を科学者だけに任せるのではなく、自分こそが科学を制御するのだと思って、学問にあたっていくべきだ。



フォーラム当日の議論と、その後、日米学生会議の各分科会、および科学技術フォーラム企画担当者会議で行われた議論に基づいて、第47回日米学生会議は以下の「1995年仙台宣言」を発表した。

1995年仙台宣言

私たち第47回日米学生会議参加者一同は、1995年7月29日に仙台市で開催した科学技術フォーラムを通じて「科学・人間・社会」のあり方について考え、議論を重ねました。ここに私たちは「1995年仙台宣言～新時代における科学・人間・社会のあり方～」として以下の提言を発表します。

I. 科学の現状

① 科学者と非科学者の間の壁 ～科学って誰のもの？～

これまで科学はおもに科学者によって扱われてきました。そして科学者の力で進歩した科学は人々に多大な恩恵を与えてきました。もはや現代の私たちの生活は科学なしには考えられません。

しかしながら科学者がどのようにして「科学」を扱っているのか、私たちの中のどれだけの人が知っているのでしょうか。最先端科学の世界では専門化や細分化が進み、閉鎖された実験室の壁の内側は一般の人々には見えてきません。科学の成果が現代の日常生活に深く浸透し、影響を与えていることを考えるとき、このように科学が「科学者の科学」にとどまり、一般の理解からかけ離れてしまっている現状に私たちは危惧を抱かざるを得ません。いったい科学とは誰のものなのでしょうか。

今後、科学の発展はさらに日常生活に恩恵を与える一方で、様々な問題を引き起こしていくと考えられます。そのときに科学の暴走を許さず、すべての人々が「自分たちにかかわる問題」に対して発言できるように、科学者と非科学者の間に存在する壁をなくしていかなければならないと私たちは考えます。

② 「科学」と「人間・社会」の間の壁 ～科学はどのように扱われているのか～

近代科学は、科学から人間の心、主観、人間性、社会性を排除し、純粋で客観的な真実を追求することで発達してきました。科学の対象は自然の中に存在する「モノ」であり、科学者は「科学」と「人間・社会」の間に線を引いてきたといえます。現代の教育現場で「人間・社会」を扱う人文・社会科学と自然科学がきれいに分離されている事実はそれを象徴的に表しています。

しかし、遺伝子操作やヒトゲノムプロジェクトなど「人間をめぐる科学」が注目を集め、また、一つの科学プロジェクトが人間や社会に与える影響が甚大なものとなっている今、「科学」を「人間・社会」と切り離して考えるのはあまりにも不自然です。私たちは「科学」と「人間・社会」の間にある壁をなくし、科学に人間性や社会性を取り入れるべきだと考えます。

③ 科学技術と社会 ～科学技術は誰が動かしているのか～

科学を扱うのは科学者ですが、科学技術の社会への応用には政治・経済などのシステムが複雑に絡み合っています。現代の科学プロジェクトは多大な費用を必要とするとともに多大な利権を産み出しており、もはや政治や経済の力学を考えずには科学のことは語れません。

しかし、政治や経済を扱う人々は利権とは関係ない科学の本質を理解しているのでしょうか？科学者は社会システムに流されてはいないのでしょうか？利権追求や、好奇心追求の陰で私たちは倫理や人間性の問題を忘れてはいないのでしょうか？

今後私たちは、政治や経済の複雑な絡み合いによって運営される社会システムの実体を念頭におきつつ、よりよい科学の姿を追求していく必要があります。

II. よりよい「科学・人間・社会」の関係を築くために

① 哲学 ～「人間」として科学を考える～

自然科学・人文科学・社会科学といった学問のカテゴリーはすべて哲学から派生し、独自の道を歩んできました。しかし「科学」「人間」「社会」が複雑に絡み合っている今、それらを総括して把握することができる哲学が再び必要とされてきています。科学者と非科学者の壁をなくすためにも、「科学」と「人間・社会」の壁をなくすためにも、そして複雑な社会システムの中で利権の追求を超えた科学のあり方を探るた

めにも、科学者、非科学者を含めたすべての人間に共通の知識と議論の土台、すなわち「哲学」が必要です。科学者を含めるすべての人間が「人間」として科学を考え、全体の調和と幸福を考える哲学をもって科学を扱えるような社会が理想だと考えます。

②倫理 ～みんなで倫理問題を考える場を～

科学の発展にともない人間は多くの問題に直面してきました。ある科学の行為が正しいのか正しくないのか、許されるのか許されないのかということの線引きを考える倫理問題はその一つです。これはすべての人間に関わる重大な問題であり、すべての人間が考えるべき問題です。

科学者の好奇心追求、社会の人々の利益追求が科学技術の原動力となる中で、それにブレーキをかける倫理問題はとかく疎まれがちですが、人類の幸福にとってこの状況は好ましくありません。科学者も科学技術を動かす人々も、倫理問題をより重視するべきだと私たちは考えます。

科学の軍事利用に対する歯止め策を話し合ったバグウォッシュ会議、遺伝子操作のガイドラインについて話し合ったアシロマ会議が、科学者が科学倫理を考えた場として有名ですが、今必要なのは、すべての人々に開かれた形での「新バグウォッシュ・アシロマ会議」です。誰もが日常的に共通の土台で倫理問題を語れる場、そしてそれが科学のあり方や科学技術の応用に影響を与えられるような土壌が必要なのです。

また具体策として、科学研究の偏向を阻止する目的の倫理上の国際法も不可欠です。国家間の倫理のガイドラインを制定することで、研究の透明化をはかり、科学者の科学の暴走を事前に止めることが最善策と私たちは考えています。

③情報 ～科学を知るために必要なこと～

「人間」として共通の哲学を持ち、すべての人々が共通の土台で倫理問題を語り合うためには、知識の共有が必要です。科学者だけが知っていること、一部の権益者だけが知っていること、というのはできる限りなくしていかなければなりません。そして、そのためには情報の適切な流れが重要です。科学者は自分の行っている科学の情報をすべて公開し、科学をめぐる社会システムもできるだけガラス張りにしなければなりません。さらに、情報を受け取る側も情報を受け取る努力をする必要があります。

また科学の進歩と同時に、研究の名のもとに個人のプライバシーを守る権利が侵される可能性が懸念されます。現在の研究の対象が人体からヒトゲノムまで、マクロからミクロにいたる人間に関心が移行していることから、個人の情報の提供後に生じる管理と公開について考えなければなりません。

ヒトゲノムプロジェクトを例にあげると、現状では疾病の研究に重点が置かれているため、個々人の遺伝情報の収集にはいたらないといわれていますが、近い将来、プロジェクト完成後に個人情報の管理とプライバシーの問題が生じることが予想されています。

当初は研究目的に収集された情報が、結果的には管理者次第で情報提供者のプライバシーを侵害される危険が考えられます。将来私たちも情報の提供者となり、個人の情報が公開される可能性があることを考慮し、情報管理者に対し常に適切な手続きを要求する姿勢を持つべきであります。

④教育 ～科学への理解を深めるために～

科学者と非科学者の知識の壁を作り出している最大の要因は教育です。教育現場では理系の人と文系の人に分けられ、それぞれ別の教育がなされます。これによって文系の人の自然科学への無関心、理系の人の人文・社会科学への無関心が助長されているのです。科学がすべての人に関わりのあるものであり、人間・社会を無視して考えられないものである以上、教育によって知識の壁を高くしている現状は好ましくありません。これからは、理系・文系といったカテゴリーにとらわれない総合的かつ柔軟な教育が必要とされるのです。

また教育は学校教育だけではありません。テレビ、雑誌、広告等のあらゆるメディアからも私たちは教育を受けています。しかもそれらは時代の影響を受けてめまぐるしく変化し、さらには科学技術によって媒体そのものも進歩しています。私たちはそれらの推移を把握し、正確かつ的確な情報を享受かつ供給しなくてはなりません。そして教育は科学を決して絶対視することなく、その可能性と限界を同時に教えることが必要です。



人体展

「人体展」は、「科学技術フォーラム」の一環として、第47回日米学生会議実行委員会の主催により行われた。多くの方々のご協力により、世界的にみても貴重な展示をすることができ、主催者として感慨深いものであった。なお、この展示の様子は、アロアロインターナショナル制作のCD-ROM "Plastination"によって、95年秋に国立科学博物館で開催された「人体の世界」でも紹介された。

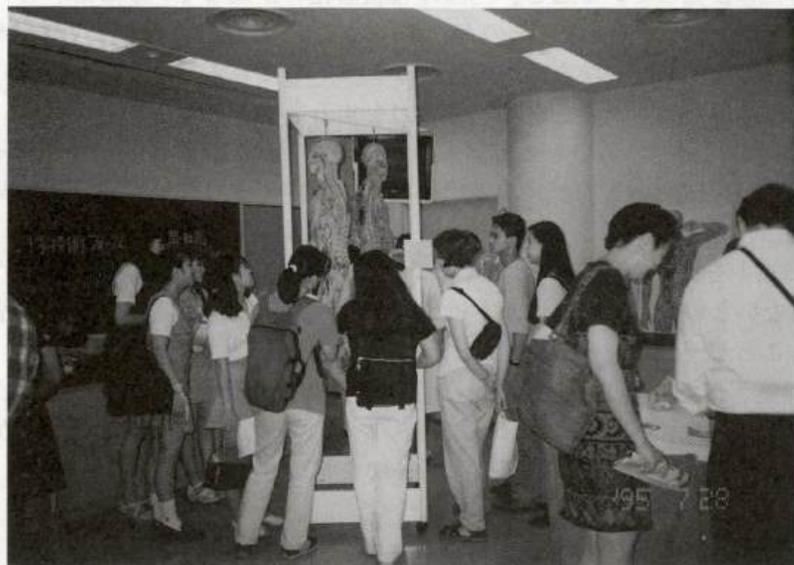
展示内容

①人体プラスチック化

プラスチック化 (Plastination) は、ドイツ・ハイデルベルグ大学医学部で1985年に開発された、人体をプラスチック化することで半永久的に保存できるようにする技術である。人体展では、ハイデルベルグ大学から取り寄せた全身プラスチック化など大小あわせて数十点におよぶ展示を行った。まさに、「自然の人体」である。

②コンピュータ上の人体

米国国立医学図書館 (NLM) では、男性献体者の遺体を水平に1mmの厚さで1878枚にスライスし、その写真データをコンピュータに取り込んでインターネットで世界中に公開した。(株)メタ・コーポレーション・ジャパンは、NLMのデータの使用ライセンスを得て、実際の人体データに基づく3次元画像の表示とその任意断面の表示など自由な操作を実現させた。コンピュータの中に一人の人間の体のデータがすべて取り込まれ、マウス操作で思うままに解剖できるわけである。「コンピュータ」という機械文明の申し子と、「人体」という自然に存在するものが融合した姿というのは科学と人間の関係を象徴的に表している。



人体展の意義

①展示物の貴重性

プラスチック化技術も、コンピュータ技術も、最先端の技術を駆使しており、今回の展示物は世界的にみても大変貴重なものであった。

②科学の対象としての「人間」

人体プラスチック化でも、コンピュータ上の人体でも、「人間」が科学の対象となっており、科学と人間の関係について多くのことを考えさせられた。近代科学においては、科学の主な対象は人間の外側にある自然であり、人体を扱うにしても、人の心や人間性を排除した「機械としての人体」として見ていた。これによって近代科学は多くの成果を残したわけだが、同時に、人間性を排除することは様々なひずみを引

き起こしてきた。「科学の主体としての人間」と「科学の対象としての人間」の両方の立場からこれらの展示を見ることで、科学における「人間性」について考えることができた。

③人体教育

医療現場では「インフォームドコンセント」の重要性が叫ばれているが、患者となる一般の人が人体に触れる機会というのはほとんどない。医師と患者の間には、人体の知識の壁が存在するわけで、患者が完全にinformされるとするのは難しいと言える。私たちは、すべての人が自分の体について知るべきだと考えた。

④タブーの意味を考える

「人体」は、身近である一方で、多くのタブーを含んでいる。日本では今回の展示以前に人体標本が一般に公開されたことはなく、一般の人が人体について知る機会は限られていた。身近であるべき「人体」が社会の目から隠されていたのである。そもそも、人体は現実そのものであり、標本となっている遺体も、この世の誰もが近い将来になる姿である。この現実をなぜ隠さなければいけないのか。長い歴史とそこで培われてきた文化が社会にタブーを産み出してきたことはわかるが、そういうタブーにはどれだけの意味があるのだろうか。この展示では、この問題を正面から考える良い機会となった。

⑤人間の生と死について考える

展示されている人体は、亡くなった方の献体であり、それを見ている人間は、当然のことながら生きている。つまり、見る方と見られる方の中には生と死をわける境界があるわけである。標本に普通の人間と同じような親しみを抱く人から、モノにしか見えないと言う人まで様々な人がいたが、生と死の意味を考える上で実に示唆的であった。近代医学の発達により人間の生と死までもが操作され得ようになっている現代においては、生と死に関する自分なりの哲学が必要であろう。

⑥「人間とは何か？」

「人間とは何か？」——これは、人類にとって究極の命題である。そして、今回の展示でも、究極的な目的はこの問題を考えることであった。

来場者の反応

7月27日から30日までの4日間開かれたこの人体展には、老若男女合わせて2200人を越える来場者があった。新聞、テレビ、ラジオでも取り上げていただき、日が経つごとに来場者数は増加したが、「もっと宣伝すべきだ」という声がかかり聞かれた。人体展来場者にはアンケート記入をお願いし、大変貴重な意見をいただくことができた。(アンケートの詳しい集計結果はすでに別の形で公表している。)

今回の展示に対して、「意義があることだ」と評価して下さった方が圧倒的で、われわれの意図は理解していただけたようであった。子供も含め、標本に自然に対峙し、その現実をすんなりと受け入れている人が多いのが印象的であった。ただ、「一般の人には見せるべきではない」「興味本位にしか思えない」といった声や、われわれの企画のあり方に対する苦言もあり、そういった意見もきちんと受け止めなければならぬと思った。「『人体の博物館』はあった方がいいと思いますか?」という質問に対しては、

はい 332人 (84.1%) / いいえ 27人 (6.8%) / 無答、どちらでもない 36人 (9.1%)

という結果が出た。人体展示を望む声がこれほど高いとは、われわれにとっても予想外であった。傾向としては、一般の方よりも医療関係者に否定的な意見が多かった。

一番注目を集めたのは、やはり全身プラスティネーションで、感動の声が聞かれる一方で、気持ち悪い、グロテスクだ、という感想も聞かれた。また、「モノにしか見えない」という感想も多く、中には、標本は模型だと思いこんでいる人もいた。また、われわれは意図的に、「死体」という言葉ではなく、「人体」という言葉を使うようにしていたが、アンケート用紙には「死体」と書く人が多かった。

多くの女性が「印象的」だったものとして挙げたのが、胎児のプラスティネーションで、男性でこれに触れた人がいなかったのと比べると、実に対照的であった。

「こういう展示を見せるべき人」という質問には、「誰にでも」という答が多く、「特に子供にこそみせるべき」という答も多かった。

献体について聞いた質問に対しては、「献体してもよい」「自分は献体したくない」という両方の意見が多く見られた。「自分はいいが、家族はいやだ」という声も多かったが、これは、「自分の死」(一人称の死)よりも、「身近な人の死」(二人称の死)の方が、リアリティーを持つからであろうか。



1995年8月4日 大阪商工会議所・国際会議ホール・会議室

APEC DAY

テーマ：What Should We Do in the Community as Global Citizens?

講師：

北京大学国際経済学部長 Xiao Chen教授

外務省開発途上地域課企画官 軽部 洋氏

筑波大学第3学群国際関係学類長 今岡 日出紀教授

在神戸・大阪米国領事館領事 Warren Soiffer氏

コーディネーター：

朝日新聞大阪本社経済部次長 小此木 潔氏

企画賛助・協賛：

大阪商工会議所、関西経済同友会、関西経済連合会、APEC 大阪会議関西協力協議会

形式

3部構成。使用言語は全て英語。通訳なし。

Morning Session (一般公開)：

講師を招いたパネルディスカッションと参加学生によるStudent Presentation

Afternoon Session:

参加学生全員参加のテーマ別グループ討論

(Politics & Security / Economy & Trade / Information & Culture)

Reflection Session:

Internet Presentation:

-昼の部のまとめと日米学生会議からAPEC NETの提唱-

企画動機・企画の目標

第47回日米学生会議参加者約80名は、公開企画である本企画を外部からの参加者約50名と内外からのゲスト5名を迎える形で開催した。学生による自主的な企画としては、かなり大規模なこの企画を実現するにあたって、在阪・在京各方面からの多大なお力添えを頂いたことをこの場所をかりて感謝申し上げる次第である。この企画は、戦前からの60余年の歴史を持つ日米学生会議が、冷戦崩壊以後の世界秩序の変化に直面して変わりゆく日米関係を、60年前の会議創設の理念にも見られる「太平洋の平和は日米にあり」の理念にたって再考すること、つまり単に、日米の二国間関係としての世界という観点ではなく、太平洋国家である日米関係を、それをとりまく太平洋諸国の国々との多国間関係からを考えることを目的とした。95年11月には、本企画開催地である大阪市で、APECアジア太平洋経済協力会議が行われることや、関西地域のもつ、アジア地域との古くからの深いつながりを顧みても、この企画を公開として広く一般市民や学生に公開することが、日米学生会議参加者だけでなく、多くの人々に知的刺激を提供する絶好の機会になると考えた。外部からの参加者には事前に募った、日本に留学中のAPEC加盟国からの留学生をはじめとして、多彩な顔ぶれがそろった。当企画の参加者全員に、太平洋諸国の学生との直接的ネットワークづくりの機会を与えたともいえるだろう。

本企画は、現代の環太平洋をとりまく様々な社会環境を、APECという枠組みで分析しようという試みであった。APEC (Asia-Pacific Economic Cooperation) とは、その名の通り、本来は当該地域での自由貿易・地域間協力の促進、といった経済的側面の強い加盟国間の自主的なコミットメントを求める、国連やEUと

は趣を異にした緩やかな国際協力組織である。1965年の太平洋自由貿易構想に端を発し、80年代の組織実現への努力を経て89年第1回オーストラリアのキャンベラ会議を皮切りに定着段階に入った。第5回のシアトル会議をきっかけに、各国の首脳が顔を合わせる形で明確な会議成果を出そうとする動きが進み、94年のボゴールを経て、95年の大阪会議が行われた。近年のAPEC会議での主な話題は、地域間貿易・投資の自由化であるが、中でもその自由化までのプロセスの長さ等に関して、先進国と途上国間に意識の開きがあり、地域の全体的特徴としても挙げられる加盟国の発展段階や政治形態・文化の多様性を我々に見せつける形となっている。この地域で進む多国間の協力への動きは、我々の生活にどのような影響を与えるのであろうか。また、この環太平洋という共同体のメンバーである我々地域の学生が、このAPECを通して、考えられる貢献とは何なのか。そんな事に思いを馳せる一日を提供したかったのだ。

当日企画の内容・結果

<基調パネルディスカッション>

ゲストスピーカーの考えるAPEC：理想の環太平洋協力とは？

Warren Soiffer氏

私があなた方の年齢のころはちょうど学部を卒業したころで、まだ東アジアについては何の見識もなかった。その後、大学院へ進み、最初に米国国務省の役人として日本へ派遣1984年され現在に至るまでの間、J. トンプソン・P. スタンレー・J. ベリーら米国の3人の歴史学者が、米国の南・東アジアとの18世紀後半以降からベトナム戦争期にいたる関係について示す本を共同執筆した。3人の著作は「Sentimental Imperialist」というユニークなタイトルであった。

その中で、このタイトルに関連して、「米国やヨーロッパは、しばしばその態度が、他の地域や国家に対して『同情的』で、欧米が力を加えてきた他国人達が、その欧米文化へのあこがれから、『偉大な米国・欧州の国民になればいいのに』、と書いていると批判される。」と書いている。これから21世紀、APECのような組織がクローズアップされるなかで、例えば、中華思想という同じような優越感をもった中国が、地域のなかでどのような役割を果たしていくのかが非常に注目される。米国からこの地域に来る人々は、過去とは違い、官公庁関係者だけでなく、学者、ビジネスマン、報道関係者と多様になった。さらに、日本人もよく知るように、アメリカの持つ人種的多様性が、つまり、中国系アメリカ人・日系アメリカ人といったアイデンティティーを持った人的財産の存在によって、米国の今後のアジア太平洋地域との関係構築に積極的に貢献するに違いない。また、1983年に、クリントン大統領がその最初の貿易方針演説をアメリカン大学で行った時の彼の言葉もまた、米国のアジア太平洋地域に対する姿勢を明確に示すものだ。大統領は、アジアの国々に仕返しするのではなく、競争するのだ、と言った。南東アジアという巨大な成長市場へ、米国は、前向きな姿勢で、進出しようというのである。現在、この地域の貿易自由化に関して、1983年のAPECシアトル会議から、2010年先進国、2020年途上国、のスケジュールでの調整が進められている。今年11月の大阪会議では、この実現にむけて、さらに細かい進展があることを期待する。APECは、NATO・UNなどの既存の国際組織よりも若く、だからまた脆弱である。上記の政治的色彩の強い既存の組織にない特色を生かし、今後20年程の間にAPECが、自由貿易の発展によるアジア諸国との取引によって、米国に利益をもたらすことを強く望む。APECは、この地域の未来への象徴的存在である。この地域で何ができるのかを、あなた方、このAPEC地域に住む若者達と共に是非試してみたい。

軽部 洋氏

APECに関して、日本政府外務省の専門担当官として働く私でさえ、APECが今後どのような方向へ進むのか、またAPECの持つ意味を考えるのは難しい。あなた方は、私に、APECについての詳しい説明を期待なさっていたのかも知れないが、これは非常に専門的で、簡単に説明できるようなものではない。しかし、このセクションで始めて働く事で、私自身も、勉強を重ねてきたし、なぜ、この地域のために働かなければならないかということが明確になってきた。

今回は、APECがこれまで歩んできた道のりを、環太平洋地域の協力の歴史という観点から概観し、私の見解としたいと思う。APECは、その加盟国の持つ地理性・人種・経済発展段階・政治制度のどれをとってもかなりの違いがある。

環太平洋協力は、1960年代のPAFTA構想、70年代のPAFTAD（太平洋貿易開発会議）等に始まったが、1980年代の、PECC（環太平洋経済協力会議）が始まる頃から具体的な地域経済協力の枠組みづくりが行われ



るようになった。これらは、ECの共同市場の創設の動きに対抗して進められた。しかし、これらの取り組みにおいては、いくつかの失敗があった。それは特に、当時の国際関係において、強い相互依存関係が存在しなかったこと、また、各国政府が政府間での組織づくりの動機付けを持たなかったことなどが原因であった。それに対して、67年のASEANの創設は、地域の安定化と協力の形態を示し、促した点で、重要であったといえる。AFTAも提唱され、この地域への期待は高まるばかりだ。しかし、PECCに始まる経済協力関係は、ビジネス界・学界・政界等すべての領域の人々が、民間の受け皿の中に集まり、特別な懸案に取り組むための地域経済協力を押し進め、1989年のAPEC創設に結びついたのである。APECは、かつての地域協力への試行錯誤の訓練を重ねた上でできあがった枠組みである。各地域の多様性を考慮にいれているという点で、今までの取り組みの中では最も適切なものといえる。5年という短い歴史しかない組織ではあるが、WTO-GATT体制、つまり自由貿易の原則に則った、地域の繁栄と福祉・経済発展を目的としている。APECは、商品・資本・サービスといった分野の貿易と投資の自由化促進を目指している。しかし、その多様性重視という性格上、強い公式の規定はなく、「自主的」で、「緩やかな協力行動」を二大原則としている。APECには一見矛盾するようにも思えるこれらの特色が存在している。そして何よりも、この地域での究極の目標である協力共同体の建設には、人的交流・相互理解等の、経済協力には欠かせない要素が必要となってくる。人間の交流の促進が、平和と安定した社会の創設につながるならば、我々の目指すゴールもそう遠くはない。今回の大阪会議での日本のリーダーシップと、特に、経済・技術協力に関するアクションアジェンダの行方に注目して欲しい。



パネルディスカッション

左から、Soiffer氏、軽部氏、Xiao氏、今岡氏、小此木氏

Xiao Chen 教授

この企画のテーマである、「地球市民としてこの地域に我々が何をなすべきか」、ということについては、まず、80年代中盤からのこの地域の変化とこれから進むべき方向を見極めることが、大切である。過去10年間に、世界は、冷戦の終結・ベルリンの壁の崩壊・旧ソ連・東欧の消滅があり、中国も市場経済への導入に乗り出した。しかし、メキシコの通貨危機や英国ベアリングス社の倒産、

円ドルレートをはじめとする国際通貨の不安定な動きをもみることができる。これらの状況を鑑みると、我々は、世界の新しい秩序、世界市場への新しい介入の方法を見つけださねばならない。新しいIMF、新しい世界銀行、新しいアジア開発銀行、といったものが必要とされているのだ。科学技術の進展により、我々の直面する社会の発展の速さは急激に変化している。かつて、社会主義、資本主義、と2つに分離していた世界は、あなた方若者の力一つで、共同の世界市場の創設に向けて動き出せる時に来たと思う。また、第2点として、これらの新しい協力関係を実現するためには、よりよい協力のパターンと協力網を作り上げる必要がある。短期的には、この非常に多様な加盟国の性格を考慮して、水平的協力だけでなく、アメリカなどの大国主導による垂直的な協力推進への方策、労働分配などが必要だ。最初は、IMF・世界銀行・WTOなどを利用したこの地域の利益を調査・監視する市場介入を行い、それからEUやNAFTAのような地域間の水平的協力関係に移行すべきだ。そのなかで自然にこの地域での自由貿易促進のための適切な方法ができあがっていくだろうし、長期的に、各加盟国が利益を得られる公平な自由貿易のシステムが構築されるだろう。

今岡日出紀教授

理想的な地域協力をAPECから考える時、3つのpointを指摘したい。

まず、第1に、シャオ教授の指摘にもあった通り、地域の現実を見つめるということ。①APECは、多様で異質な国の集まりであるということ。それから、1981年から92年にかけての世界貿易におけるこの地域の市場シェアを見ると、57%から70%に増加し、APEC地域内取引がかなり増加したことがわかる。しかしその地域内に、小規模の地域協力組織であるNAFTA、ASEANがあり、また、マレーシアのマハティール首相の提唱するEAECが存在すること。これらの組織は、アメリカのある経済学者のいうところによれば、アグレッシブで、排他的な一方主義的組織である。②APEC加盟国は発展途上国と先進国の2つのグループに分けられること。つまり南北関係が存在することである。③東アジア地域を中心とするアジアは、欧米の修正社会主義者のいうところでは、権威・独裁主義的、発展独裁主義的傾向が強いということ。従ってアジア地域の市場経済の観念と、欧米のそれとは少々違いがあるのではないかということ。

上記の現実を注視しない限り、APEC地域での協力関係を構築するのは難しい。

第2に、これは私個人の理想的共同体のイメージではあるが、このAPEC地域の協力関係は、コンセンサスに基づくものでなければならないと思う。現在、この地域での協力関係に確固としたルールはない。まず、地域共同体のための共通の理解の基盤づくり、ルールを確立すべきだ。その上で、そのルールに市場の共同体への「出入自由の原則」を与えるべきなのだ。このルールが確立すれば、最恵国待遇(MFN)を他地域に適用することもできるし、細心の注意のもとに、南北両側の国々に、その経済発展段階に応じた優遇措置を課すことができるのだ。第3として、こうした私の理想とする地域発展を促すには、以下のような政治的取り組みが必要とされる。①海外直接投資を増加させるための貿易自由化等の政策調整。②産業調整のための政策調整能力の向上。近年、海外直接投資の流入・流出やあらゆる経済状況変化によって各国の相対的貿易利益は急激な変化を見せている。ある年に一国の産業が世界市場で他にたいして相対的利益を得たとしても、次の年にそれが続くかは定かではないような、激しく移り変わる経済環境が存在する。産業界は、こうした状況に対応すべく、リストラクチャリングを迫られているのである。従って、APECは、加盟国間の産業調整を促進する何らかの協同政策を打ち出す必要がある。これまでもIMF・世界銀行などの政策スキームを通して南北関係を考慮した取り組みが行われてはきたが、特に、このAPECを通して、発展途上国が、積極的に先進国と同様に、自由貿易の利益を得られる基盤を作るため、途上国の直面している環境問題等を解決する為の基金を創設する様な取り組みがなされるべきだと思う。

95年大阪会議成功に向けての鍵は？

Warren Soiffer氏

昨年のジャカルタ会議にカウンター通商代表団の一員として参加した時に、あの会議では期待されていなかったにも関わらず、自由貿易へのタイムスケジュールが、先進国2010年、途上国2020年という形で宣言文の中に盛り込まれた。

その1年後にあたる本年度の会議では、自由化のスケジュールを15-25年先に控えて、理念を創出し、Fill in the Background、つまり、自由化にむけての詳細な制度作りや行動にとりかからねばならないといえる。軽部氏の米国側の交渉相手であるNancy Adams氏と私が話したとき、私は、これまでにAPECのリーダー達が話し合い、発展させてきた、非常に詳細なAPEC地域の経済論議に大変力づけられた。それは、彼らリーダー達が、自由化への道のりを、継続させ、さらにそのペースを速めようと考えていたからだ。これはまた、今回の大阪会議での挑戦であろうが、先ほど他のスピーカーも指摘されていたように、この地域での各国間にある共通性を見つけだすことが重要であると思う。この地域には、彼も言うように、違った形の資本主義が存在する。私は、それらを、この地域で1つのものに統一する必要は全くないと思うが、何をもって自由貿易とするのか、という「自由貿易に対する理解」を深める必要がある。そうすれば、日本型資本主義を持つこの地域の諸国と、米国型資本主義をもつこの地域の他の国々が、さらに歩みよれることになるだろう。

(消費者・一般市民の生活にAPECはどれ程の変化を与えるのか?)

米国の立場で言うと、APECを通じた自由化促進の動きは、米国のアジア地域におけるビジネスを容易にする。先ほど、今岡教授も指摘された海外直接投資としての米国のアジアでの動きが活発になるだろう。アジアは、日本のように、非関税障壁の多く存在する国が多い。APECを通して、関税の引き下げだけでなく、

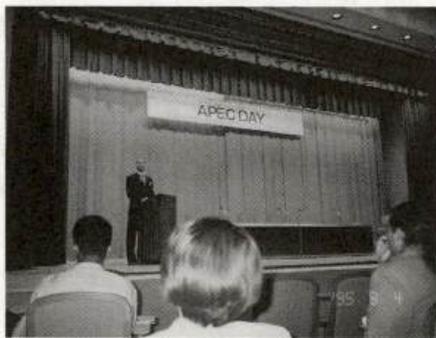


こうした障害を減らし、取引を活性化し、例えば、アジアのある地域で米国製品が製造されることで、今、米国が日本や中国にかかえている貿易赤字を解消することになれば、非常に健康的であるし、見えにくかったこれまでのこの地域でのビジネスをさらに透明性の高いものにすると思う。米国は、過去10-15年、大西洋地域から急激な成長を続ける太平洋地域にその視点を移してきた。米国はアジアにいたい。米国は「公平」という価値観に従って、アジア地域でビジネスをしたい。APECは、米国にとって、公平で開かれた貿易とは何か、を証明するための象徴になりうる。

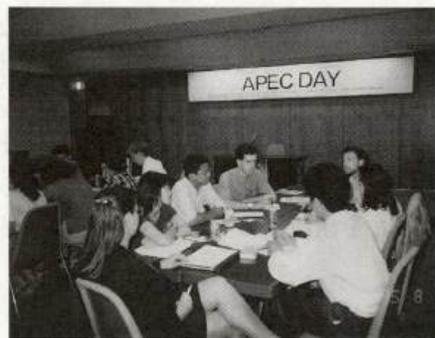
軽部 洋氏

(議長国日本の役割とは?)

最初に、この地域での貿易促進が、地域全体の持続的発展を可能にするというSoiffer氏の意見に賛成だ。ビジネス界は、APECの結果もたらされる自由化の利益を心待ちにしている。議長国日本として、今回の大阪会議において、貿易自由化・貿易促進・地域協力という3点における行動指針をまとめるべくリーダーシップを取らなければならない。今岡教授は、この地域の二分化した発展途上国と先進国の存在を指摘された。私は、日本や米国といった先進国に関しては、既に、規制緩和や貿易促進といった何らかの自由化政策を押し進めてきたと思っている。しかし、これに対し途上国の貿易自由化の動きは遅い。発展途上国の経済発展のスピードをさらに速め、自由化にいち早く追いついてもらうためには、彼らへの経済的・技術的援助が不可欠だ。APECの主要な原則はコンセンサス主義である。デシジョンメイキングするときの方法としてこの原則を採用していることは、困難を伴う。多様性が、いくつかの分野で各国のコンセンサスを取ることを阻んでいる。しかし、大阪会議の議長国として、この会議で行動指針をまとめあげるためにもコンセンサスをとる必要がある。



学生発表を行うDelauno Hinson



グループ討論

Xiao Chen 教授

(APEC 大阪会議に期待するものとは?)

APEC地域の協力関係は、米国の経済システムとその動き、そして中国の経済改革を研究する私の専門分野でもある。中国は、私を含めた多くの関係者が、日本や韓国・朝鮮・モンゴル・北東アジア地域での貿易政策に関する国際会議に参加し、地域の協力関係に提言をしようと試みてきた。しかし、これらの動きのなかで提言された地域の理想は実現されていない。アジアといっても南東地域のほうが、我々北東地域に比べてその発展段階等の理由から、相互協力案を考えやすい環境にあるといえる。ここから我々がAPECに望むものとは何かが見えてこないだろうか。時間をかけてきた割に協力が進んでいないのは、この地域の国々のもつ文化的・言語・社会制度の多様性のせいだろう。しかし、中国は、近年、アジア・太平洋地域、APECに注目している。なぜなら、日本は、中国への窓としての香港を除けば、もっとも重要な貿易相手国であるし、米国も、中国経済の改革や経済発展にとって欠かせない重要な国であるからだ。南東アジアで見られる海外直接投資が、APEC地域からのものが大半を占めていることから、中国がこの地域を重要視する理由がわかるであろう。また、この地域は、他の世界の地域に比べ、中国にとっては相対的に文化の似た、または、近いと感じられる国が多いので、重要だと思えるのだ。中国のトップスカラー達の多くも、近年彼らの専門をこの地域に変更する者が増えた。これは、中国が、WTO-GATTによりやく加盟したからである。しかし、WTOが要求する市場経済主義にあわせて中国が経済の構造改革をするのは大変な作業である。

我々は、時間を必要としている。そのため、サブ・グループレベルでの協力が今の中国には不可欠かつ容

易に実行できる。APEC レベルの協力は、サブグループでの協力関係を扱うのに比べ、困難を伴う。ただ、いろいろな協力のパターンや労働・富の分配方法を探る意味でも、APECを通してチャンネルを増やすことは良いことだ。各国の資源や資産を正確に評価することも必要になってくる。

将来の究極のゴールであるより統合された地域協力を考えると、84年に大西洋地域の総貿易取引量を初めて越えた太平洋地域は、日本・米国をはじめ、フォータイガース(韓国・香港・シンガポール・台湾=NIES)などの存在によって今後、世界経済の中心地として更なる発展を遂げるであろう。この地域での個性に満ちた国々が協力にむけての努力を続けるならば、その未来は、合理的で、経済的で、素晴らしいものになるに違いない。

今岡日出紀教授

(大阪会議に求めるもの)

まず、日米間に横たわる貿易摩擦の大まかな解決策を見いださなければならない。第2次大戦後、60年代にかけて、米国は、世界市場に膨大な公共財を提供し、GATT・ブレトンウッズ・IMF体制を支えた。しかし、現在の米国の国際社会における世界経済安定化達成機関としての覇権は落ち込みを見せている。

また日本も、経済力はあるものの、世界の金融システムの安定化に貢献しようという意識に欠けている。世界市場は移行期にある。APEC地域では、米国と日本、といった協力的なリーダーシップが必要である。しかし、日米間には市場経済に関する異なった理解がある。まず、米国は、いったん市場経済の観念が、ある文化や習慣をもつ地域や国で制度化されると、それらは元々の形とは別のものに変わるということを理解しなくてはならない。そうした各国間の相互理解がなされれば、異なった市場経済観を持つAPEC諸国間での共通の基本ルールづくりがうまくいくようになる。それは、この地域での貿易摩擦や対立を軽減することにつながる。このルールづくりをめざし、大阪会議での継続的貿易交渉がなされることを強く望む。

APEC地域で米国・日本・日米、そして中国はリーダーシップをとれるのか？

軽部 洋氏

日本は加盟各国のかかえるセンシティブな領域、(米国なら繊維、日本・韓国なら農業など)のことも考慮して、コンセンサスづくりに尽力すべき。各国は何らかのこうした分野を抱えているものだ。これは、自然なことで、こうした分野が、APECの交渉において重要な問題にはならない。これは、単に程度の問題であるから、交渉を重ねることで、各国で少しずつ違うアプローチを、コンセンサスに導いていけると思う。

Warren Soiffer氏

NATOやEUといった他の組織と違い、組織にビジネス界の影響力が反映されるこのAPECは、地域でのビジネス環境を向上させるので、加盟各国の競争力も強まる。米国に対して、我々だけが、強行に速い段階での貿易自由化を力で押しつけているという誤解があるが、米国の求めるペースに同調する国は山ほどある。各国は、自由化の発展を通じてリーダーになれる。何も米国だけがその自己中心的論理でもって地域をリードしようなどとは言っていない。

Xiao Chen教授

中国は、IMFや世界銀行といった国際機関の発行する統計で、21世紀、早ければ今世紀末に、世界で第4位の経済力を持つようになる、などと予測されている。私の中国での経験からいうと、これは正しくない。中国では市場経済の考え自体が新しく、実現までには乗り越えなければならない問題が山積しているからだ。ギャップは皆さんが感じているものより大きい。米国は、第2次大戦以降、世界の牽引役としての役割を果たしてきたが、近年、議会の反対が強く国際社会への以前の様な積極的貢献はできない状態だ。しかし、戦後これまでに設立されたどの国際機関も、一部はそれがまるで米国の機関であるかと思えるくらい、米国の貢献によって設立された、米国的な組織であるし、我々が世界経済にアメリカの存在を必要としていることは明白だ。米国の興味は、大西洋から太平洋に移行してきた。冷戦終結によって、過去40年余り米国経済の発展を遅らせていた軍事負担などから米国は解放された。海外との間に債務を抱えるなどの問題はあがあるが、生産性は向上し、経済も成長を遂げている。現代経済において、製造業の地位は低下し、代わって米国の得意分野である無形の財・サービスが市場を席卷している。この流れの中で、経済統計や指標の抽出方法も変化するだろう。こう見ると、米国は過去に比べ、その経済状況を格段に向上させていくと思われる。米国が、リーダーの地位を失うことは、今世紀中、また来世紀もないのではないかと思う。対して日本は、どうか。

国際市場での日本製品の売れ行きを見ても、日本は経済的に非常に成功した素晴らしい国であると思う。しかし、日本も問題を抱えている。天然資源の少なさ、フォータイガースによる日本の国際市場でのシェアの一部奪取、米国からの圧力。これらを克服し、情報による生産性を高め、生産を効率的に組織化する時間が必要だ。R&Dも必要だ。努力をすれば、好調な米国との差も埋められる。日本や米国のこの地域でのリーダーシップは必要だし、中国も日本や米国の積極的技術・経済支援を期待している。しかし、長期的には、リーダーシップは多様化するだろう。各国はそれぞれの比較優位を持っている。各主体がそれぞれ重要なリーダーたりうる。恐らく我々は、既存のリーダーの形態とは異なったリーダーを、経営・金融・政治・文化の各方面で必要とするようになるのであろう。一国が不当な利益を追求するのは良くない。公平な市場経済での競争、市場原理の浸透とそれに伴う責任が各国に求められている。

今岡 日出紀教授

APEC 地域のリーダーシップについて語るとき、我々は、経済分野と安全保障分野を分離して考えねばならない。前者は日米の協同によって、後者は日本と中国という二大軍事大国によって導かれるべきだ。経済分野に限定して話を進めると、日本の市場経済への考え方と米国のそれは、明らかに異なっている。が、米国も、国際的経済学者が指摘してきたように、一方的な、二国間貿易主義を、あらゆる貿易交渉の場にしばしば持ち出す傾向があることにここでもう一度触れておく。米国流の市場経済のイメージを押しつけるのである。少なくとも公式に言われている限り、日本は、MFN など、GATT で提唱されてきた自由貿易のルールを遵守してきた。こうした日米両国間の市場経済に関するギャップを再考する活発な議論が APEC に必要だ。それなくして、両国は、この地域でのリーダーにはなれない。

< 学生発表 >

続いて行われた学生による発表では、米国(Howard 大学・Delauno Hinson/日米学生会議アメリカ側参加者)、中国(筑波大学・韓越さん/ゲスト留学生)、インドネシア(九州大学・Arifin Norrさん/ゲスト留学生)らによる発表がなされ、アジア・太平洋地域への長期的な投資の必要性、地域の自由貿易促進の為に国際規約の充実、APEC の(政治機構としてではなく)経済機構としての色合いを強めた役割の重要性、労働力の国家間移動・流動の必要性などが主張された。このあと、午後には、午前中に聞いた様々な講演や発表をふまえて、集まった参加者を、政治安全保障・経済通商・情報文化という3つのグループに、参加者の興味に沿って分け、さらに小グループに分けて、政治・安全保障では南沙諸島・香港の返還・中台問題・北朝鮮・EAEC をキーに、APEC 諸国間での経済協力関係の可能性・APEC 諸国の国際的役割についての検討がなされた。また経済・通商グループでは、この地域の経済的・社会的安定を引き出すには何が必要なのか、また日米はこの目的にどのような貢献ができるのか、といったところに焦点がおかれた。技術移転・海外直接投資・援助・インフラの整備によってどこまで加盟国間の経済格差を縮小できるのか、また、その実現がされたとき、この経済機構は EC のような政治的組織となりうるのかについても議論された。文化・情報グループでは、情報とコミュニケーションは、異文化間の摩擦の発生や解消にどのように関わるのか、異文化間の間違ったステレオタイプや認識のギャップを埋めるのにどのように情報を利用すればよいのか、APEC 諸国の価値観はどのように異なるのか、文化的共存・協力の為には情報がどのような貢献をするべきか、などについて人種・宗教・教育・家族・社会構造等の観点から議論された。

今後の本企画の展開

議論の内容のまとめは、この秋に、インターネット上に開設を予定している日米学生会議のホームページに掲載され、それをもって世界への発表とする。

参加学生の間には、インターネットを通じて継続的に議論を続ける環境が、名古屋大学と大阪大学有志の先生方のご協力のもとに整備され(Mailing List)、来年米国で開催される第48回日米学生会議の企画 Pan-Pacific Day (予定) にも、何らかの形で生かされることが期待されている。

最後に、この場を借りて、苦しいときにもいつも Counterpart としてわれわれ日本側を支えてくれた米国側実行委員の Jason Hays, Andrew Crawford の両人に深く感謝したい。また、本企画のために、睡眠不足や肉体的疲労に苛まれながらも走り抜いてくれた両国タスクフォースのメンバー、日米学生会議の参加者ならびに当日、遠路本企画の為に集ってくださった全ての方々、そして再度、この企画を実現するにあたって、多大なるご援助とご理解を頂いた皆様方に、第47回日米学生会議実行委員一同の心からの感謝の言葉を述べさせていただきますと思う。(文責: 山田通代)

学生による国際会議を主催している日米学生会議（事務局・東京都）は四日、「第四十七回公開プログラム APEC（アジア・太平洋経済協力会議 DAY）」を大阪市内で開いた。日米をはじめ、中国、オーストラリアなど九カ国から約百三十人が出席し、活発な学生版 APEC を繰り広げた。

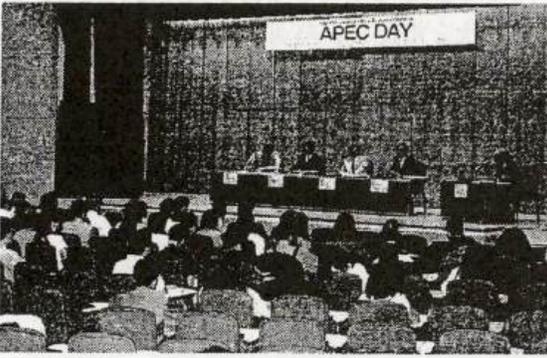
パネルディスカッションでは、米國、日本、中国の

大学教授や領事、官原が参加。ウォーレン・シンシアラ駐大阪・神戸米領事は公正なビジネスルールをアジアにも要求したが、中国の潘傑・北京大国際経済学部部長は「APEC各国は経済構造や経済レベル、社会システムが大きく異なるという協力を難しく」と述べた。今回日出版・筑波大国際総合学部長は「地域内には先進国と途上国のグループがあり、南北協力を注



お先に「学生版 APEC」

9カ国の130人が議論



活発な議論を展開した日米学生会議のAPEC DAY
—大阪市内で

「米中関係では政経分離が必要」 「自由市場に自由な人の動きを」

続いて、「APEC—我々のとるべき道」をテーマに、三人の学生が意見を述べた。米國ハワード大二年生のドクラン・ヘンソンさんは「APEC地域の将来的な発展は、長期的な投資とインフラの整備を進める一方で、自由貿易を進めるた

めに持続的な努力がなされるかにかかっている」と指摘。「自由貿易を完成させるためには、国際的な規格や条約にそって障壁を排除する努力をしなければならぬ」と強調した。

さらに経済が成長し、相互依存が進めば地域的な紛

争は鎮まり、「米軍の駐留は必要なくなるだろう」と述べた。

中国の留学生の韓越さんは「米中関係では、政治と経済を分ける必要がある。APECは経済的な機関であり、もし政治的な要素が多く入り込めば、経済政策にはマイナスの影響がでるだろう」と政治色が強まることに懸念を示した。中国の強みとして、労働力と消費者マーケットを挙げたが、「我々が望むのは、外国からの融資を増やすような雰囲気をつくることなどで、中国自身の状況を変えていくことだ」と述べた。

また、日本への注文として、「中国の環境汚染問題を指摘するが、先端的な技術を提供し、協力してほしい」と指摘した。

また、インドネシアの留学生のアリフィン・ノールさんは、インドネシアは一九六〇年代、成長を遂げたものの、現在は低迷しているとし、その理由として、「非効率的な経営、高コスト経済、国内での競争のなさ」などを指摘した。

さらに、力の弱い国の立場として、「自由なマーケットを求めるなら、自由な人の動きを要求する。技術を持った者もそうでない者

もあなたの国で働く権利を」と労働力の流動化を求めた。最後に「もし、あなたの国とほかの国で意見の衝突があっても、ランボーやサムライを送り込まないで欲しい。それは、行き止まりに似、合意をすべて壊してしまふことになるから」とユニークな話ぶりに会場も沸き返った。

学生の立場から提言を
11月に大阪で開かれるアジア・太平洋経済協力会議（APEC）に学生の立場から提言を、国際経済商学生会議（AISEC）東京大学委員会が主催する「東大太平洋学生会議」が17日から東京で開催される。4日間の日程で、APEC加盟のフィリピン、米、豪をからAISEC加盟の学生を招き、分科会、人材育成、貿易・投資、環境問題について提言をまとめる予定。

1995年8月5日付毎日新聞の記事

第1部～第4部：8月7日午前10時～午後4時 京都リサーチパーク
第5部：8月7日午後7時～午後9時 立命館大学衣笠セミナーハウス

MINORITY DAY

マイノリティーDAY

講師：和光大学人間関係学部人間発達学科助教授 伊藤武彦先生

概要

今日我々の属する人間社会では、人種的・社会的に少数派または弱者である人々は、何らかの形で差別や偏見を受けているといえる。現在彼らの置かれている状況を把握し、差別や偏見がどこから来るのかを認識したうえで、差別行動を断つことを目的として、このMINORITY DAYは企画された。

当日は以下のような五部構成で行われた。

第1部：マイノリティとは何か

講師をお招きし、偏見と差別の連関、その克服法などについてお伺いした。また学生からのプレゼンテーションも行った。

第2部：人種的マイノリティからの問題提起

ここでは米国側参加者を中心に、自身の被差別体験や苦悩、また歴史的な差別が紹介された。

第3部：社会的マイノリティからの問題提起

マイノリティとは人種に限った問題ではない。ここでは社会構造ゆえに圧迫を受けるマイノリティの実情が訴えられた。

第4部：“Cross the Line”体験

自身の差別意識を抉り出すゲーム“Cross the Line”を行ったあと、この際の体験について小人数に分かれて討論した。

第5部：マイノリティにまつわるスキット

プレゼンテーションによっては表現しきれないメッセージが、五本のスキットによって紹介された。ウイットに富みつつも核心を突くものばかりであった。なお、スキットが終了したあとも、自発的に前に進み出、それまで話していなかった自身の経験や決意を披露する参加者が相次ぎ、会場は緊張と熱気に包まれた。ここまで半月をかけて築き上げられつつあった参加者内の友情・相互理解が新たな段階へと入る、きっかけとなる夜であった。

当日の内容

第1部：マイノリティとは何か（講演+学生発表）

「マイノリティ、差別、偏見について～どう克服するか」伊藤武彦先生

先生は米国と日本での具体的なマイノリティ問題を例示した後、差別を更に差別、偏見、ステレオタイプの三つに分類した。

差別とはある集団に対する正当化されえない行動のことであり、偏見とはある集団に対する正当化されえない態度のことであり、ステレオタイプとはある集団の属性に対する信念である。

偏見とはどのように生まれるのだろうか。これには社会的、情動的、認知上の三要素がある。社会的偏見には、社会的不平等、身内びいき、多様性の否定、法や教育など制度上の要素が影響している。情動的偏見

には、欲求不満、自尊心、権威主義的性格などが影響する。特に、個人的な劣等感が、集団としての優越感によって補償されることがままある。認知上の偏見には、他の集団に対するステレオタイプ、固有の刺激による関心（韓国人女学生の制服などはその好例である）、個人の属性と社会の属性の混同、「身の程を知れ」的な思考などが関与している。

ではマイノリティに対するこうした差別や偏見をなくすためにはどうすればよいのだろうか。

社会的には、差別は法、偏見は教育と相互理解をもって克服すべきである。すなわち自由、平等、人権、民主主義そして平和を尊重する社会の構築である。また、集団への帰属によってではなく、個人としてアイデンティティを確立すること、「異なる」人々をも人間として尊重すること、偏見と差別を増幅する政策、政治家、教育制度、教科書、マスコミなどに異議を唱えていくことなどが必要となる。

情動的には、普遍的な目標に向かって競い、また協力すること、自分も他者も掛け替えのない個人として尊重することが挙げられる。

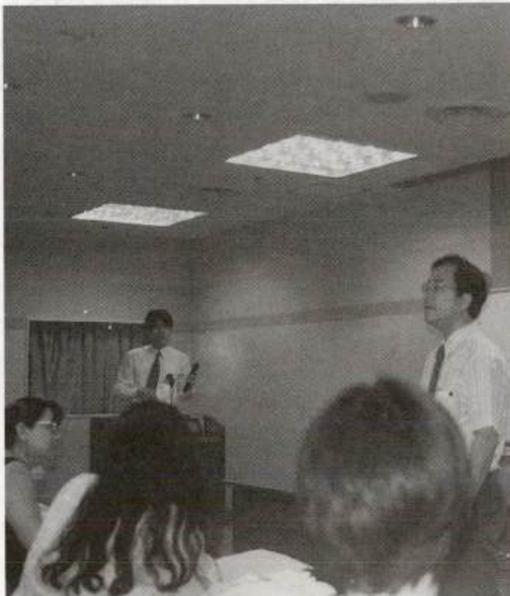
認知上の要素を克服するためには、対話を通してマイノリティの人々をよりよく知るべく努力すること、マイノリティ問題に対する正確な歴史的、社会的知識を身に付けること、自分自身のステレオタイプ思考を打破すること、身の程など本来存在しないことを認めることが必要である。

人類の歴史を振り返ると、奴隷制、アパルトヘイト、参政権など、差別の撤廃は、時期の早い遅いこそあれ、着実に進んできている。我々が学ぶ努力を怠りさえしなければ、差別のない理想郷はいつか到来するであろう。

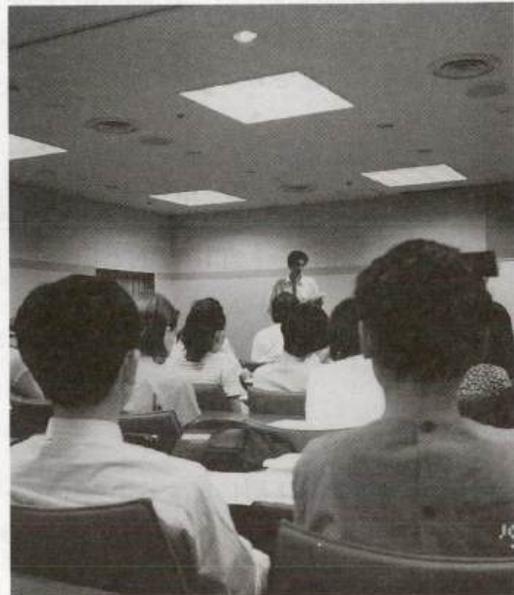
以上が講演要旨である。差別と偏見の構成要素を分析した上で前向きの見通しを示したこの講演が、この日一日の基調となった。講演後活発な質疑応答が持たれた。

「日本のマイノリティ問題について」窪田尊

窪田は差別を人種的なものと社会的なものに大別し、これらは集団間の力関係によって生じるとした。その後、日本の部落問題が例として出され、この根拠のない社会的差別がダーウィニズムによって増強された過程を紹介した。



伊藤武彦先生講演



学生発表



第2部：人種的マイノリティからの問題提起（すべて学生発表）

「ハッパ（日米混血の子供達）・アイデンティティ」 Basho Fujimoto

日本人と黒人米国人の混血として米国で育ったFujimotoは、日系人と黒人が戦後いかに自分達の存在を定義しようと試みてきたかを紹介し、現在ではアイデンティティが混血のマイノリティ“Fitty”であることをむしろメリットと捉えるよう努めていると述べた。（“Fitty”とは新しい造語であり、“Fifty-fifty who fit.”を約めたものである。）

「見えざる壁」 Helen Lee

Leeはアジア系の米国人として、アジア系米国人はみな優秀であるというステレオタイプ(“Model Minority Myth”)に曝されていることを話した。このステレオタイプが正当なものであるはずがなく、これによって苦しむアジア系米国人が多くある一方、反感や暴力の原因ともなっている。続いて本題であるが、昇進の場面などで、全てが平等であるのが建前ではあるが、やはりマイノリティは見えざる壁に突き当たるといふ。アフーマティブ・アクションはこれを避けるために一定の有効性を持つ政策であるが、能力評価など繊細な部分までは平等を保障し切れていないのが現実である。

「在日日系ペルー人三世」 善塔倫子

善塔は地元の中学校で、労働力として日本政府が迎えた日系ペルー人の子弟の指導補助を務める経験から、彼らの抱える問題点を指摘した。日本政府は彼ら日系人に対する一貫した政策を持たず、日本人社会を運営する上でのスケープゴートにしている。中学校でも、その身分の不安定性ゆえ、適応は必ずしもうまくは行っていない。逆に彼らは親愛の情を示す際に抱擁するなど、自分達の文化を日本に持ち込んでいるが、このような態度が誤解を招き、自ら困難を招いている面があるという。

「日系米国人に対する差別」 Tatsu Yamato&Gavin Tachibana

YamatoとTachibanaのプレゼンテーションは歴史に焦点を当てた。戦前米国では移民を制限していた。これには政治的には雇用の確保という意味があったが、裏を返せば、移民に雇用を奪われるとの被害意識が差別を助長したといえる。開戦直後の日系人強制収容は、名目上スパイ活動の防止をうたっていたが、実際には真珠湾攻撃以前から計画されていたことから分かるように、そこには明らかに政府レベルでの偏見、差別があった。

第3部：社会的マイノリティからの問題提起（全て学生発表）

「ベトナム難民として」 Tien Nguyen

Nguyenは、1984年にベトナム難民として渡米して以来の米国での様々な経験を語った。その中で「米国民は路上に彷徨う人々に対してもう少し憐れみを持ってもいいのではないか」と述べたのが印象的だった。

「ジレンマ」 Chris Matthews

Matthewsは、米国内では下層に属する黒人社会から、両親の方針と努力により例外的に高等教育を受けるに至った。その意味において彼はエリートであり、アメリカン・ドリームに向かって突き進むことができる。その一方、彼は黒人の地位向上のために、名誉を捨て黒人社会に戻って働くこともできる。ここに彼のジレンマがある。悩んだ末、彼は後者を選んだ。機知に、そして示唆に富んだプレゼンテーションだった。

「共に学ぶ」 廣瀬葉子

廣瀬は知的障害を持つ兄が特殊学級ではなく普通学級に登校できるようにするための家族ぐるみの取り組みについて紹介した。説得を重ねることで学校側の意思を変えるに至った経緯から、まず身近でできることから始めることの大切さを説いた。

「日本の社会的弱者」 宮崎佳代子

視覚障害者として宮崎は、視覚がいかに重要な情報源であるかを述べると共に、現在の社会が必ずしも身体障害者にとって過ごしやすいものでないことを指摘した。

第4部：“Cross the Line”体験（ゲーム）

このゲームは、マイノリティの問題を自分自身の問題と捉えることができるよう、米国側参加者が考案したもので、部屋の真ん中に一本の線を引き、全員が同じ側に立つ。司会者がある一文を述べ、自分がこれに当てはまると思えば、静かに線を越え、振り返って線を越えなかった人々と対面するというものである。文としては「私は人種の違う異性と付き合ったことがある」「私は他人を差別したことがある」などがあり、参加者は常にこれまでの自分を振り返り、葛藤や不快感を越えて率直な判断を下すことを求められた。

ゲームの後、小人数討論を行い、ゲームでの心の動き、感じたことなどを話し合った。

第5部：マイノリティにまつわるスキット

「ガイジン」米国側+日本側有志

外人として日本で暮らす上で遭遇する体験について。白人の学生はもてはやされるがアジアの学生は見向きもされないといった現実が紹介された。

「米国の大学におけるステレオタイプ」米国側有志

進路指導の職員が、アジア系の学生だから理系を勧める、背が高いからバスケットボールを勧めるなどのステレオタイプ振りを披露した。

「米国のマイノリティ」米国側有志

白人と同じように暮らそうとしてきた黒人少年が、黒人としての自分を正面から見据え、劣等感を誇りに転じる過程を描いた。





「在日韓国・朝鮮人と部落民」日本側有志

それまで問題もなく仲よく付き合ってきたカップルだが、いざ結婚となると韓国籍だから、同和地区出身だからという理由が持ち出され、諦めざるを得なくなる・・・。

「サード・カルチャー・キッズ」米国側有志

サード・カルチャー・キッズとは、母国を離れ米国に暮らす少年少女達のこと、どちらにも属さない、第三の文化に生きるという意味が込められている。アジア系移民の参加者達が、オムニバス形式で自己の体験を切々と演じ、語った。

予定されたプログラムはこれで終了したが、前述の通り、この後も前に歩み出て個人的な体験を語る参加者が相次いだ。

マイノリティの問題は米国でクローズアップされているが、実際は日本にも多くの未解決の、あるいは無意識に加害者となっている問題があることが浮き彫りとなり、日米双方学ぶところの大きいMINORITY DAYであった。

参加者の声から・・・

"I felt a great deal of sadness when I listened to the pain and loneliness that people went through in their lives as minorities. At the same time, though, I was comforted to know that there are other people in the country and in the world who have had similar experiences as mine."

Gavin Tachibana (Cornell University)

"Thinking of what I want to say for Minority Day, it is hard to describe when words don't convey all the meanings. Minority Day was something that language couldn't capture-a "You had to be there" experience. Not only was it the moment of the conference that brought the Japanese and American together as JASC, but it also was one of the greatest illustrators of the cultural differences between our nations, and gave us the chance to overcome these differences through a better understanding-the embedment of the original spirit of JASC."

Daniel McKelvey (Case Western Reserve University)

「少数者に対する差別は日本でも未だに根強いという現実がある。ひょっとしたらこの差別は消えないものかも知れないと思っていたが、今回互いに話しあい分かりあった中で友人になればお互いの幸せを思いそれが全ての人の幸せを願うようになると気付いた。」

加峯麻紀子 (九州大学)

コーディネーターから・・・

マイノリティの問題は、シンプソン裁判で囃らずも露呈したように、アメリカ社会が内包する重要なダイナミクスのひとつであり、その一方で「マイノリティ」という単語が日本語に訳せないことから分かるように日本では概念として確立しておらず、また日々接するものでもないというギャップが存在する。

日米学生会議の場でマイノリティを取り扱うにあたっては、従って日米の温度差や認識の違いを考慮してプログラムを組む必要がある。前年の場合、米国側の圧倒的な情報量と思い入れの深さゆえ日本側はただただ受け身になってしまっていた。いかに日米学生が共同して作り上げられるかが、このマイノリティデイの焦点だった。

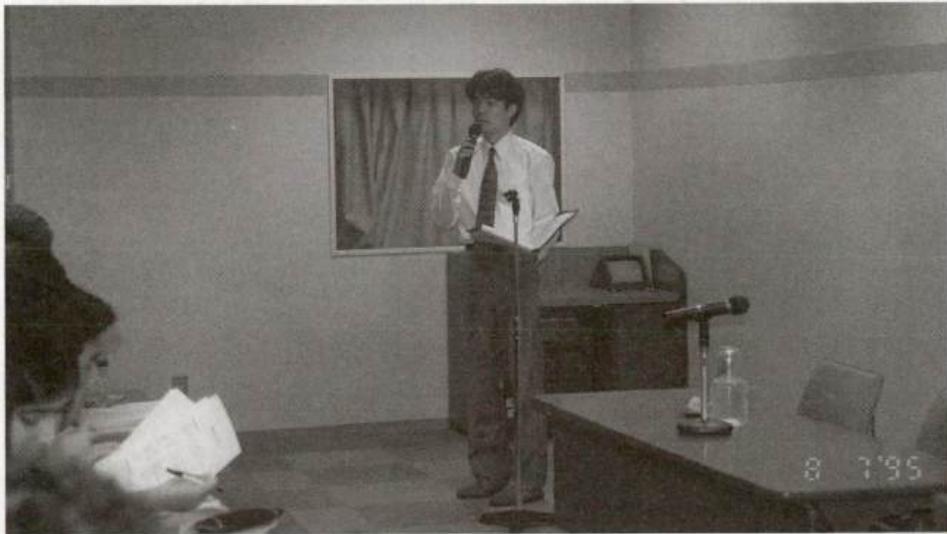
準備段階から日米実行委員の姿勢の違いは明らかだった。なぜマイノリティの問題が生じ、どう解決でき

るのか、あくまで理論的にアプローチしようとする日本側。それに対し、差別を受けた個人的な体験を発表することで、参加者内で感動を分かち合えればそれでよしとする米国側。米国側が「なぜあなたたちはそこまで頑なのか」と迫れば、日本側は「その日限りのイベントに終わらせていいのか」と反論し、議論は平行線を辿った。

最終的には実体験の欠如ゆえ説得力に劣る日本側が妥協する形で、当日は個人の体験を分かち合う場とし、ディスカッションもあえて到達目標を設定するのではなく、グループ毎に自由に行うこととなった。その分、マイノリティ問題を社会心理学的に分析する基調講演（和光大学・伊藤先生）を設定することで、日本側参加者もマイノリティの話題に入りやすいように配慮した。

結果的に当日は熱気がみなぎり、「私も話したい」といった飛び入り発表が相次いで夜の9時過ぎまでの文字通りマイノリティ色の日となった。また、個人としての必ずしも楽しくない、多くは苦しい体験を分かち合うことにより、第47回日米学生会議参加者としての一体感や親近感が大きく増し、会議そのものを盛り上げる契機となったのは予期せぬ成果だった。

私達会議参加者は近い将来に様々な立場で社会的な意思決定を下す立場に立つことが予想されるが、その際にこのマイノリティデイに受けた強烈な印象、それに伴う社会的弱者への理解を再び思い起こし、正しい判断を下し、理性をもって行動できてこそ、本企画が真の意味での成果を産み出したといえるだろう。（土井洋平）





1995年8月9日 京都府

Volunteer Day ボランティアDAY

活動内容： 障害児童サマースクール訪問 京都府下三市（宇治、城陽、八幡）
老人ホーム訪問 京都府美山町
フジの園、みやびのその（京都市内）

準備活動

ニューヨークにおいて行われた前回の第46回の会議でのボランティア・デイは、参加者はいくつかのグループに分かれて地域のボランティア・グループの活動に半日程度参加させてもらう、という形式で行われた。参加者は何をしに行くのか、ほとんど何も考えぬまま活動場所に移動し、現地の係員の指示に従い作業をし、帰途につき、デイは終了したのだった。これだけの活動ではボランティアについて考えた、とは言い難かったが、にもかかわらず今回の第47回の会議においても同じような企画を行うことになったのは、このニューヨークでの活動が、多くの参加者にとって会議参加者以外の人達と接する貴重な機会であり、ある意味では閉鎖的とも言える約1ヵ月間の会議生活の中で重要な役割を果たしていたとの結論に至ったからである。

今回の会議の準備を始めた当初、実行委員間で再び各プログラム内容についての検討を試みた。ボランティア・デイについても、考えれば考えるほど様々な問題、疑問点があがった。

そもそも「VOLUNTEER-ボランティア」とは自発的に仕事を引き受ける、という意味であり、会議のプログラムとして、参加者に活動を強制するのは不自然ではないのか、という壁にぶちあたった。これに対して米国側実行委員からは今回のこのデイの目指すべき点は、何か活動を行うことそれ自体ではなく、その活動をとおして、地域の人々と触れ合うことなのだから、プログラムの名称は「COMMUNITY DAY」の方がふさわしいのではないか、という意見があがった。

この米国側の意見からは、「ボランティア」という言葉に対する日米の認識の差がうかがえた。日本では「ボランティア」というと人のために何かをする、という意味の言葉として通常使われている。なんとなく特別なこと、という意識が多くの人にあるのではないだろうか。それに対して米国ではもっぱら「コミュニティー」との接点となる活動として、自らの満足感のために行うのが「ボランティア」活動として捉えられているようであり、「~のために」というよりは「~と共に」行う活動を指すようであった。また、このような日米間での認識の差については、六月に京都にて開催した渡邊一雄氏のフィランソロピーについての講演会からも学ぶことができた。結局、プログラムの名称自体は、このような認識の差を日米の参加者間で本会議中に考えることを期待して、あえてそのままにしておくこととなった。そして実際に、八十人ちかい日米の学生を、一日だけ、しかも会議のスケジュールの都合上、日程もこちらの指定、という条件で昨年と同じような形式のプログラムを日本で行うとなると、企画者側としても勝手なお願いであることが充分にわかっているだけに、その受け入れ先さがしはたいへんな困難が予想された。もちろん、社会貢献・奉仕活動としてのボランティア活動なのだから、人にお世話になりながら、お願いをしてまで何かさせてもらう、ということには少なからず矛盾も感じられた。しかし、一日そこそこの時間ではボランティア活動について考える、と言っても限界があるのは明らかであり、その限られた時間をできるだけ有意義に使うことを考え、私達が出した結論が、実体験を重視し、その体験から今まで見えてこなかった「何か」を見い出そう、というものであった。

受け入れ先さがしに関してはまず、京都府社会福祉協議会のボランティア活動振興センターに相談させていただいた。担当して下さった坂田徹氏はじめ、関係諸団体の皆様は、このような強引な企画にもかかわ

らず、アドバイスを与えてくださるだけでなく各方面に私達の活動を紹介し、実際の受け入れ先を見つけてくださった。

京都府社会福祉協議会、京都市社会福祉協議会、京都ボランティア協会の皆様には何度も時間を取っていただき、いろいろな相談にのっていただいた。また実際に受け入れ先としての場を提供くださったホーム、団体の皆様も同様である。特に京都府美山町では役場をはじめ町全体にご協力いただくなど、当初考えていなかったほど、周囲に支えられてのデイ開催となった。

この準備活動を通じては、自分達の行おうとする会議、プログラムが、いかに会議参加者以外の人々に支えられているかを痛感させられた。まがりなりにもボランティア活動を行おうとしている我々こそが、地域の人々に助けられ、文字通り「ボランティア」を受けているのであった。



障害児サマースクール訪問

当日の活動

前日のオリエンテーションに続き、当日は予定どおり、京都府下三市（宇治、城陽、八幡）で行われた障害を持つ子供達のサマースクール訪問、京都府美山町・京都市内の老人ホーム訪問の計五つのグループにわかれて活動を行った。サマースクールでの活動内容は三市それぞれ少しずつ違うものの、運動会や水泳、料理など、身体を動かすものがほとんどであった。子供達の反応は初めこそアメリカ人学生を前に一步下がるような場面も見受けられたが、好奇心に満ち溢れた彼らは、すぐに無邪気で屈託のない笑顔で話しかけてくれるようになったという。障害を持つ子供達と一口に言っても、一見障害児とわからないほどの子供がいる一方で、常に介護を必要とするものもいた。しかし、しばらく身体を一緒に動かすことで同じように喜び・楽しみを味わう中で、「健常者」「障害者」という違いを意識することはなくなっていったと参加者の一人は言う。言葉や文化の壁などもともしない子供達の正直で素直な心に触れられたことは、参加者にとって大きな感動であったようだ。

美山町を訪れたグループは限られた時間の中で様々な活動に接する機会に恵まれた。まず美山やすらぎホームに到着すると、町長直々に歓迎の言葉をいただき、学生一同はその歓迎ぶりに驚くばかりであったという。また反対に、お年寄りの方でもアメリカ人が、しかもこれほどの人数で訪問したのは初めてとのことで、かなり驚かれたようである。

学生側としては「ボランティア」に来たのだから歓迎を受けるばかりでなくお手伝いを、との意識はあるのだが、何をどのようにすればよいのかがなかなかわからない。ホームで働く方々は「何が必要なのか」を察知してすぐ行動にとりかかる。この機敏さが相手に気を遣わせないポイントのようであった。

午後には美山町の山でゴミ拾いをした。この頃には、当日一緒に活動した地元中学生が日米の大学生をリードしてくれる、という形ができあがっていた。美山町では過疎化が進んでいるため高齢者人口の比率が高



くなっているが、町の人々の交流が促進されるように、普段からボランティア活動が自然な形でできるような機会が設けられているとのことであった。この屋外での活動のあとには再びホームに戻り、介護実地体験（介護される立場で特殊浴槽に入る）や、日々の活動に参加するなどした。

そして美山町役場が提供くださったバスに乗り込み帰路につく際には、多くの者がホームの玄関まで見送りに来てくださった方々と涙で握手を交わしたとのことだ。京都市伏見区の老人ホーム、フジの園、みやびのそのを訪れたグループも同じような別れ方をしたという。こちらは美山町のような小さな町にあるホームとはまた違い、日本の標準的なまちにあるホームと言えるところであった。訪問するボランティアの数も多いため、そこに住むお年寄りの方々も私達のような一日ボランティアに慣れていらっしゃるようだった。しかし、その中で「一日に限定されたボランティアはもういい。気長に続けてほしい。」という声も耳にした。もっともな話である。

プログラム総括

どうして日本にはボランティアが根付かないのか。いつまでボランティア「体験」を促進し続けなければならないのか。

今回のボランティア・デイをとおして、参加者の多くは人とふれあうことの感動、よろこびを感じた。これは体験した人にしか決してわからないものである。接した人々と別れる時、純粋にまた来たい、再びこの感動を味わいたい、と思う。これは体験して初めてわかる活動の報酬である。まずこの感動を経験することなしには、ボランティアを継続することはできない。活動後の米国人学生の発表にもあった言葉であり、今回私達の多くがその感動を味わった。もちろん、毎回感動し続けることはないかもしれない。しかし、まだその経験をしていない人の多い現在の日本の状況下においては、まず「体験」、まず「入門」となってしまわざるを得ない。今回のボランティア・デイも形としてはまさにそのようなものであり、会議の中の一プログラムとしては反省点も多い。しかし、日本側、米国側を問わず、それぞれの参加者達はなんらかの新しい発見をし、感動を共有できた。そしてコミュニティーに支えられている自分達、日米学生会議を知ることができたというのは期待以上の収穫であった。

今後、この経験をどう活かしていくかは、参加者一人一人にかかっている。今度こそ、ほんとうの「volunteer（自発的）activity」として継続していくことが私達にとっての課題である。



老人ホーム訪問

日時・場所： 1995年8月 6日京都（平和DAY1） 1995年8月11日広島（見学）
1995年8月15日東京（平和DAY2）

Peace Programs

平和プログラム

講師：同志社大学教授 小野修 先生
協力：立命館大学教授 安齋育郎先生
広島修道大学教授 岡本三夫先生
協賛：財団法人 平和中島財団

プログラムの企画と目的

第47回日米学生会議では、「現代社会における平和創造者としての自覚を高める」ことを目的として、平和プログラムを企画した。このプログラムは「平和DAY1」「広島訪問」「平和DAY2」という三つのステップから成り立っており、80人の参加者それぞれが平和を問い直し、また平和創造者としての自分を見つめ直す場にしたいと考えた。決して派手な企画ではないが、平和追求の試みを一過性のお祭りに終わらせてはならないという思いから、各参加者が切実な動機をもって取り組める企画を目指した。

ひと夏の会議は無我夢中のままにすぎたかもしれないが、自分の目で見、耳で聞き、人々とふれあい、仲間と語り合ったその内容は、私たちの記憶に刻まれて残るだろう。立命館大学からはこの企画にふさわしい会場として「国際平和ミュージアム」を利用させていただくことができ、更に、8月という特別の時期に日米両国の学生が広島を訪問することの意義は、この意味からも計り知れないものがあつた。また米国側の参加者は、来日直前の合宿をハワイで行ない、真珠湾の史跡や、語るべき体験を持った人々との出会いの時を持った。そして会議最終日の代表団による硫黄島訪問は、この「平和プログラム」を含めた全会議活動の集大成であつた。平和の喪失、という体験がリアリテイを帯びるとき、追求すべき平和も、もはや机上の空論ではなく、感情論でもなく、現実的なひびきをもって語られる。平和は所与ではない、私たち自身の手で創り育てていくものだという「平和創造者」としての自覚を、強く裏付ける体験となつたことを願ってやまない。

太平洋戦争終結後50年目を迎えた本年度の日米学生会議では、「時代の創造～歴史に学び、理想の実現へ～」という総合テーマを掲げ、日米両国の過去に横たわる不幸な歴史に学ぶと同時に、歴史を縦断する様々の「平和創造」の営みに目を向けた。「平和プログラム」のテーマとして掲げた「平和の創造」とは、第47回日米学生会議の基調低音であつたのみならず、まさに60余年にわたる日米学生会議の営みそのものが、この言葉に集約されると言っても過言ではない。太平洋戦争前、戦中、そして特に戦後の50年間にわたって「平和」を模索し、その創造にたずさわってきた人々に学ぶことは、彼らの継承者たらんとする者のとるべき最初の一步であることは明らかである。先達の歩みを、成果は成果として正当に評価し、我々自身がそこにさらに何を積み上げ、世界平和に対していかに貢献するものであろうとするのかを誠実に模索することが、「平和プログラム」の一貫したねらいだったのである。日米両国学生の、共同生活を基盤とした交流と率直な意見交換を通じての相互理解・信頼の促進を図ることで、長期的展望における両国の友好関係の発展、さらには二国の枠を超えた地球規模の平和の増進に貢献してゆけるような人材を育成することは、この企画をはじめ、会議の諸企画全体を貫く目的であつた。自分達の生きてきた20余年の体験に基づく、ありのままの平和観を他の参加者と共有することで、「平和」の実現にむけたかけがえのない協力関係を築く手がかりになつたならば幸いである。

以下に会議中の活動の様子とその成果を報告する。



平和DAY1 <私にとって平和とは、平和にとって私とは>

「平和の創造」と題した平和プログラムの第一日目にあたるこの日の活動は、「私にとって平和とは、平和にとって私とは」というサブ・タイトルに表現した通り、平和とは何かという問いを会議参加者の間で共有するところから始まった。参加者ひとりひとりが「私にとって平和とは」を問い、さらには自らの平和観の実現にむけてどのように貢献するものであろうとするのか（「平和にとって私とは」）についての意見交換をすることが目的であった。

■早朝集会

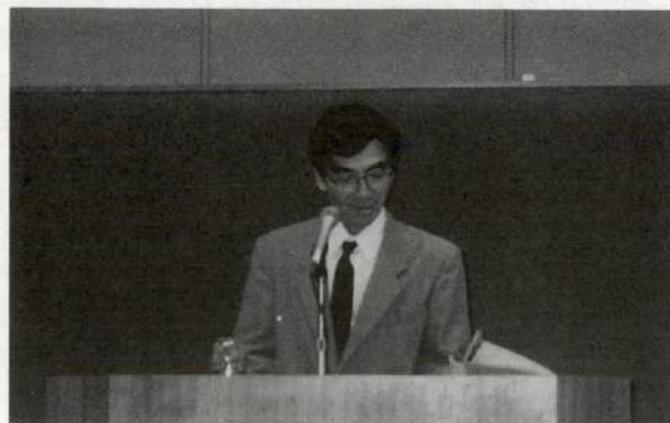
井伏鱒二の小説「黒い雨」の英訳から原爆投下直後の広島を描写した箇所を数カ所朗読した後、原爆投下の悲惨さを訴えるフィルム「ピカドン」を見て、黙祷の時を持った。

一年前に平和プログラムを企画しはじめた当初から、米国側実行委員は、原爆投下50年目のこの日を日米学生会議が日本で迎えることの意義を強調しており、是非とも「ヒロシマ」を追体験して戦争の悲惨さを胸に刻むような時間を持ちたいとの強い要望が出ていた。広島で同日に開催されている祈念式典に参列できないものかといった提案もあったが、日程の都合から8月6日は京都の立命館大学、我々の滞在先でもあった国際平和ミュージアムの一階ロビーで8時15分をはさんで内輪の集会を持つことになったのであった。

準備段階では私たちの集会にふさわしいフィルムがなかなか見つからず、直前になってから、折しも国際平和ミュージアムで開催されていた「戦争展」スタッフのご厚意で「ピカドン」を機材ともどもお借りすることができたのは大変ありがたいことであった。集会そのものは、通常の活動開始時刻より1時間も繰り上げて8時前から始めたが、内容が内容だけに会場は静粛かつ深刻な雰囲気であった。のべで三日にわたる平和プログラムの冒頭であることに配慮して、文学作品の朗読をするなど、できるだけイメージを喚起しやすいような工夫をした。原爆に関する映像表現は日本側参加者にとっては幼少時から嫌でも繰り返し目にする内容であるが、米国側参加者にとっては大変強烈かつ新鮮な印象を受けるものだったようだ。日米の平和教育の違いを垣間見る体験でもあった。



早朝集会



小野修先生講演

■講演会

「私にとって平和とは、平和にとって私とは」の題で小野修先生にお話を伺った。小野先生は敗戦を迎えた幼少時の体験や米国訪問時の挿話を交えながら日米の平和観の違いや、それに伴う個人ベースの平和貢献のありかたの違いについて講演して下さった。ピンチ・ヒッターとして会議直前に急遽お引き受けいただいたにもかかわらず、太平洋戦争終結後の50年間において実際に平和の創造に携わってこられた経験を、平和の喪失・創造・失敗・維持・伝承、等々の側面から個人的な体験のレベルで語っていただきたい、という些か前のめりな企画側からの依頼に前向きに応じて下さったことに心から感謝したい。

実はこの講演会を開催するにあたって念頭に置いたことの一つは、講師と参加者学生との間にできるかぎり応答的関係を築きたいということであった。質疑応答の時間を長くとったのはその工夫のひとつだったが、もうひとつの工夫は講演をいただく前に学生の側からの発題を行なったことである。日本側からは原大介が平和創造に取り組む際の「私利の追求」と「公益の追求」の対立緊張関係について、アニメ番組「一休さん」の挿話を引きながら述べた。米国側からはスーザン・デュバルが、湾岸戦争に従軍した兄をめぐって、日本に留学中に会った師や同僚から学んだ平和創造者としての態度について述べた。

■学生発表と討論会

この日の午後には、三つの学生発表を聞いてから小班にわかれて討論会を行なった。

発表者と内容：1、スコット・ブラッカー+宮地ゆう「日米両国民の原爆投下への理解」

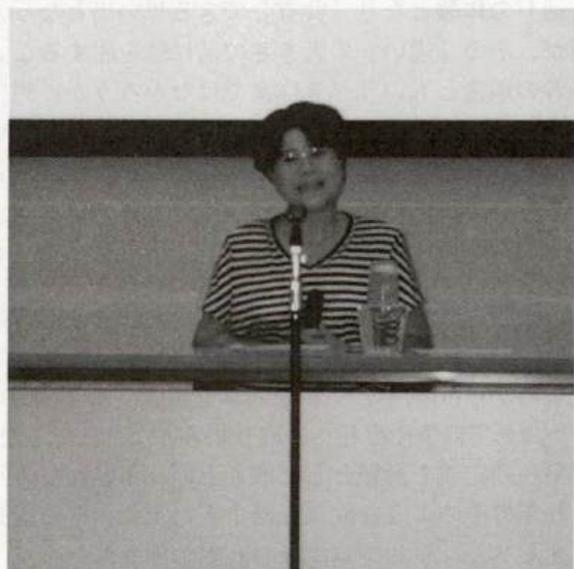
2、ケビン・サリ「米国側参加者一同によるハワイ真珠湾訪問体験の発表」

3、田尻雅「戦後日本における平和創造者として的大江健三郎」

討論会では講演会と学生発表を踏まえて各参加者が率直な意見交換をした。多様な背景を持つ78人の学生が集まって平和について意見を交換するというのは、大変に興味深い体験であったが決して容易なことではなかった。討論を始めるにあたって企画側からは二つの問いを提示したが、ひとつは「平和を創造する上で欠かしてはならないものは何か（What should forgers of peace keep in mind）」二つめは「異なる平和観を持つものどうしがどのように協力関係を結べるのか（How can "peace forgers" who have conflicting goals or definitions of peace cooperate with each other）」というものだった。各小班では参加者の問題意識と興味にしたがって様々な話題が取り上げられ、多様な討論が繰り広げられたが、かえりみて必ずしも生産的な議論ができたかどうかは評価の分かれるところである。



学生発表



被爆体験者の講話



広島訪問 <あなたにとって平和とは>

全参加者

自分とは異なる地理的・歴史的・社会的背景を持つ人々との交流を通じて自らの平和観への洞察をさらに深めた。

- 平和記念公園・資料館の見学
- ドキュメンタリー・フィルム『母たちの祈り』
- 被爆体験者による講話
- ホームステイ

平和DAY2

参加者ひとりひとりが平和の創造を担う一員であることを自覚し、またそのことに自信がもてるようになることを目指してワークショップを行なった。

■平和へのアピール

共同作業を通じて、平和創造における協力関係を象徴的に体験した。2~3m四方の大きな白紙のジグソーパズル(16ピース)を準備して小班にわかれ、各班で協力して各ピースに平和へのアピールを自由な形で表現した。

■平和の輪

のべ3日にわたった平和プログラムの締めくくりとして、これまでの活動を通して高め温めあってきた平和への思いや平和創造にかける意欲、連帯への信頼を全員で共有するセレモニーをおこなった。輪になってつないだ手から手へ、各人の思いを伝えてゆくという作業の持ったインパクトは説明し難い。しかし「平和のために私たちができることは何か」という問いかけに対して、悲観的になったりニヒルになったりすることなく、ひとりひとりが真摯に思念した貴重な体験であった。

一ヶ月の会議を通じて、特に平和観や平和創造者としての自己イメージを考える際に、国籍の違いや異文化の壁を体験するというよりも、日本人どうしもアメリカ人どうしも互いに余りにも違うという現実を目の前に突きつけられることの連続であった。互いに知り合えば知り合うほど、そのような違いを乗り越えることの困難に直面し、「きっとわかりあえるさ」とは楽観できなくなる。平和プログラム最終日のこの日の活動は、ピース・ソングを歌ったり絵を描いたり祈ったりと、一見遊びのような活動が多く、実際「楽しかった」「感動的だった」のであるが、このような体験が貴重であったと考えるのは、それが我々参加者全員の「共通」の体験となり「共有」できる思い出となったからである。互いの中に「違い」を見つけだすのは簡単だが、その「違い」の大きさの前に膝を屈することなく「共有財産」を積み立て続けてゆく、それは平和創造者の創造ともいふべき作業ではなからうか。絶望的なまでの「違い」の自覚無くして、ただ漫然と交流するだけでは、この「共有財産」の重みはわからない。(国際)交流とは共通点を見い出すために行なうのではなく、共通点を創り出すために行なうのであると自覚するとき初めて「相互理解」と「平和創造」という日米学生会議の理念の二本柱が交錯するのであり、「時代の創造~歴史に学び、理想の実現へ~」という第47回日米学生会議の画竜点睛を点じたことになるのであろう。

Peace Day 総括と反省

創設当時から60余年、平和を希求し模索する学生達の集う場でありつづけてきた日米学生会議では、例年なんらかの形で戦争や平和への取り組みがなされてきた。特に昨年第46回会議の「戦争と平和フォーラム」では、平和の定義を話題として取り上げ、相容れない平和観の対立関係が明瞭に描き出された。今年の会議では、昨年のような成果を踏まえた上で、平和創造を志向する者どうしの協力関係はいかにあるべきかを検討するべく「平和プログラム」が企画された。

しかし率直に言ってこのようなテーマ設定に全く問題がなかったかどうかは議論の余地が残るところである。終戦50年目という節目の年にあつて、日米関係の平和をめぐる世間の言説は安全保障、原爆論争、経済摩擦、等々の積年の話題で渦巻いていた。しかしながら、ここまでの報告からも容易に想像できるとおり、この平和プログラムは必ずしも会議にそういった話題を提供しなかったし、議論の場をもちたててもこなかっ

た。企画段階ではこれらの「具体的な」テーマを取り上げようという意見も強く上がっていたのであるが、それが実現にいたらなかった背景には、メディアの垂れ流すディベートの受け売り議論をしても仕方が無からうという判断があった。議論好きな日米学生会議参加者は放っておいても始終、わいわいがやがやと世間に意見しているのであるから、公式の企画においては敢えて、自らの日常的な思考様式を見つめ直してみる場を設けたいという意図も強くあった。しかしながら現実には、各種のミーティングに追われるという避け難い忙しさのなかで、前提としていた雑談の時間は極端に減り、せめて平和プログラムで上記のような話題を取り上げてもよかったのではないかという反省を迫られることになった。

現実の社会問題について学生が議論するということには、場当たりの熱気や充実感はあるものの、常にある種の空しさが付きまとう。その空しさをなんとか乗り越えたい、参加者の誰もが切実な問題意識をもって取り組めるような内容にしたい、という企画側の想いとは裏腹に、この企画の提供した思考枠組みそのものに入り込めないものを感じた参加者も多かったのではなからうか。企画の意図した方向性が間違っていたとは思わないが、その意図を事前にもう少し積極的に伝え、また「忙しさ」という現実に対応していたら、会議の雰囲気づくりにもう少し前向きな貢献ができたのかもしれない。

企画の成功度が参加者の経験した充実感によって計られるとするならば、控えめに言っても「充実感」よりは「困惑」、「！」よりは「？」の方が大きかったに違いない。秩序だった議論も、目に見える成果も想定されてはいなかったということに、たとえ気付いていたとしても我々のほとんどが耐えられなかった。映画、講演、ディスカッション、見学、創作…、個別の活動が楽しく有意義なものであったかどうかより、それらの持つつながりが見えてこないことへのジレンマがこの企画への評価を難しくする。しかし、それは同時に「平和」という、依然つかみどころのない大きすぎるテーマへの困惑でもあることを私たちは認識しなくてはならない。企画側としては、第47回日米学生会議にこのような企画がぜひ必要だ、というこだわりをもって企画運営してきた以上、その成果にもこだわるし、どう評価するかという点にもこだわりつつけてゆく。そして、そのようなこだわりが、今年の会議に参加した者たちの間に流れる対話の水脈に点じる一滴であればと願う。なぜならそれは、私たちが自分と「平和」との関わりをどうとらえるのか、にこだわり続けることと同義だからである。はっきりいって、このような「こだわり」は混乱しがちであるし、ある意味では効率がわるいとさえ言えるのだが、ここに生じているこの混沌こそが創造力の源泉であると敢えて言おう。ピラミッドも底面が広ければ、より高いものが建てられる。混沌も、深ければ深いほど「平和」へのより豊かなアプローチを可能にすると信じようではないか。



「平和のジクソーパズル」を囲んで



日時：1995年8月16日

場所：東京アメリカンクラブ

Japan-U.S. Relations Forum

日米関係フォーラム

講師：	政治分野	Dr. Ezra F. Vogel	Harvard University
		森本 敏 氏	野村総合研究所
	経済分野	Mr. Glen S. Fukushima	在日米国商工会議所副会頭
	文化・社会分野	Mr. T.R. Reid	The Washington Post
		田勢 康弘 氏	日本経済新聞社

当日スケジュール

政治分野	経済分野	文化社会分野
参加学生による、「日米関係アンケート」、集計報告		
学生（日・米）による発表		
分野別講演会		
★Dr. Ezra F. Vogel 「日米安保の歴史的経緯」 ★森本 敏 氏 「日米同盟の様々な側面」	★Mr. Glen S. Fukushima 「日米経済関係論」	★Mr. T.R. Reid ★田勢 康弘 氏 「メディアに因る 日米間文化ギャップ」 「文化ギャップを超えるには」

フォーラム概要

近年の日米関係の中で話題となっている事柄をより深く理解しようするために、政治・経済・文化の3分野にわかれて、講師の方々の生の体験談を元に、見識を高めることを第一目的とした。

第47回日米学生会議の開催時に話題となっていた事柄を中心としたため、政治分野では「日米安保」、経済分野では「日米自動車摩擦」関係、文化社会分野では「カルチャー・ギャップに及ぼすメディアの影響」を主題材として取り上げた。

講師の方々は皆著名な方々であり、多忙なスケジュールの中で第47回日米学生会議に協力していただき、予想以上に見識を高められたことに、感謝致します。

各講演の概要は以下のとおりである。

政治分野 <Political / Security Field >

講演 エズラ＝ヴォーゲル教授：「日米安保の歴史的経緯」

安全保障の概念はもともとアメリカの占領下にあった日本に「持ち込まれた」ものである。日本で在日米軍が今だに大きな問題であり続けている理由の一つは、在日米軍が、占領軍が使用していた基地をそのまま引き継いで使用していることにある。1988年から東西冷戦の緊張が高まり、アメリカは在日米軍を極東の重要な拠点と位置付けた。冷戦が終結した今、日米安保は大幅な見直しの時期にさしかかっている。ナイ・イニシアティヴによる日米の防衛戦略は、日米安保に新たな視点を与えるものである。

日本は、安全保障の意識が希薄な国であり、日本の政治指導者たちはしばしば「平和ボケ」していると言われる。これからの日米安保を考える上で欠かすことができないのは、日本の安全保障政策に関する積極的なヴィジョンであり、日本はこれからより一層、安全保障問題に関しての態度の見直しを求められることになるだろう。

講演 森本 敏氏：「日米同盟の様々な側面」

日・米両国とも、冷戦が終結した今、新しい日米同盟の意味を模索し始めている。まず、冷戦時の日米同盟の軍事的、政治的、経済的側面を確認したい。軍事的側面は、ソ連の封じ込めと極東地域、東アジア地域の平和の貢献である。在日米軍への「思いやり予算」と言われる資金援助は相当な額である。その負担率は現在では日本が100%。不公平であるとの意見も多々見受けられるが、実は日米安全保障条約は日米両国にとってどちらにも利益があるのである。

次に、この同盟の政治的側面は、日米は当然のこと、東アジア極東地域との外交関係に大きく貢献したことである。最後に経済的側面だが、それはこの同盟が両国の経済の相互依存を強め、極東地域の経済発展の土台をもたらしたということである。

しかし、その日米安保は冷戦時と同じようには説明できない。両国政府はその意義付けのために、現在多くの会談をもっている。日米安保を国際社会のなかで位置づけようとする試みは両国政府が共通して目指していることである。

また、今、めざましい経済発展をみせる中国の動向も重要である。中国は軍事予算も20%以上の伸びをみせ、中国が不安材料となることは明白である。ここで日米安保体制が重要になるのである。今や、我々は冷戦時と同じ方法で中国を封じ込めようとは考えていない、そのような否定的な側面ばかりで中国をみるのではなく、どのように中国を地域安全保障の対話に取り込むかということが重要なのである。

地域安全保障が日本にとって米国との二国間同盟の代替になることはありえない。もし何らかの紛争が起きるとすると、多国間安全保障システムはうまく機能するかどうかわからないからである。これに対して日米安保のような二国間安全保障はうまく機能するのである。このように日米同盟の様々な側面を考察してきたが、最後の結論として、日米同盟は東アジアの安定のキーフaktorであるということを強調したい。この要素なしに日米安保の将来は考えることはできないのである。



経済分野 < Economics Field >

・アメリカ側学生による発表 (Emil de Gomma)

1992年のブッシュ大統領訪日の際のアクションプランに端を発し、昨年9月以来橋本通産大臣とカンター米通商代表による会談を通じて行われてきた、日米自動車協議の経緯と論点に関して、日本メーカーの自主的購入計画、補修部品分野の規制緩和、完成車の市場アクセスという3点を順を追って説明をした。

・日本側学生による発表 (来嶋光江)

多国籍企業の活躍が大きくなり、国家が国内の産業を保護する以前の体制から、国境の意味合いが薄くなり、モノ・カネのみならず人や概念まで国境を越えて移動するようになったボーダーレスエコノミーへ変遷した状況について説明した。

講演 グレン・S・フクシマ氏：「日米経済関係論」

学生側からの自動車協議に的を絞った質問事項への解答の後、全体としての日米経済関係が論じられた。

●質問と解答●

Q：自動車協議と今までの日米経済協議の違いは？

A：日本側の対応が違っていた。民間部門に関して、政府が介入することは出来ないと言う回答を政府は徹底的にするようになった。

Q：経済摩擦に政府介入は必要であるか？

A：産業自体を保護し、ともに働くという概念が日本では発達しているが、政府が特定企業を保護することはない。アメリカでは特定企業の利益を代弁することがある。従って、両国の政府観は異なる。日本における密接な企業と政府の関係に基づく障壁のためアメリカ企業は政府に頼らざるを得ない。

Q：政府の役割と多国籍企業の台頭の関係は？

A：アメリカに関して言えば企業の国籍はもはや重要性を持たない。だが、日本企業にも官僚にも、国益という観念がまだ存在しているように思われるし、ボーダーレス・エコノミーという概念があることは事実だが今もなお政府の役割は重要である。

●講演の内容●

包括的な日米関係を鑑みるに、政治・安全保障の分野では、密接・協力的であるのに、経済分野に関しては、一貫して競争的であり、結果的には、経済的非対称性という事実を生み出している。二国間経済不均衡、製造物輸入の低比率、分野別障壁、特定企業別障壁、外国による直接投資の低さなどである。

これに加え、いくつかの言葉の概念上の食い違いは、二国間に横たわる重要な問題の一つであり、「障壁」や「製品の競争力」という言葉をとってみても、日米間において違うものを頭に思い描いていることが、摩擦解消への障害となっている。

日米経済を考える上で、経済システム全体を検証し、その主要な相違点について着眼する事が重要になっている。二国間の根本的な問題を考え直さねばならない。

最後に、二国間の問題を解消するためには、マスメディアの役割は重要であり、経済摩擦などに関しては、特に冷静で、客観的な報道が求められるのではないだろうか。



文化社会分野 < Cultural & Social Field >

学生による発表（日本側：北澤咲弥花）

発表者の在米経験の中で感じた、日米の文化的「差異」について発表・考察した。日本人の感じる「差異」は日本（人）の体格、言語、宗教、生活様式が「均質的」であるがゆえに、些細なことがらも重大に感じてしまう性向をもつのに対し、アメリカ（人）における同様なファクターが「多様」であるがゆえに、ここの「差異」を認め、受容する術を体得している。アメリカで自分らしさを探し出す姿勢を学んだと結んだ。

講演 トム・リード氏：「メディアに因る日米間文化ギャップ」

普通のアメリカ人は日本のことをほとんど知らない。

一方日本人は、アメリカのことを良く知っていると言われるが、それはとても断片的であってアメリカ全体を捉えてはいない。

かえってアメリカ人は日本の集団主義や戦後の経済発展など、日本の根本的な姿を捉えているといえるであろう。

私は記者として、いくらおもしろい題材でも、その記事によって間違った日本のイメージを与えてしまいそうなものは記事にしない。この点で日本のメディアはもうすこし気をつけるべきだと思う。アメリカのセンセーショナルでもの珍しいニュースをこれがアメリカだと言わんばかりに報道している。それがますます日本人に片寄ったアメリカの一部を見せることになっているのである。

講演 田勢 康弘氏：「メディアに因る日米間文化ギャップ」

アメリカにある日本の新聞社はほとんどすべてがワシントンD.C.にあるため、それ以外の地域では情報が入りにくく、それが情報ギャップの原因となっている。

一方で、日本人の米国人に対するステレオタイプも問題である。

私がアメリカで旅行をしたとき、泊まった宿は鍵もなく、私が帰る時、宿主は不在で「宿泊費を置いて行ってください。」とメモがあるだけだった。

アメリカ＝犯罪大国という印象の強い私たち日本人にとってこういう場所があることは驚きであろう。

このような情報ギャップをなくすことはメディアの使命であると認識している。





日米関係フォーラム総括

当初設定していた目的に対する理解はかなり達成されたと思う。もう一度、簡単にポイントをまとめると、以下のようなになるだろう。

日米関係フォーラム：講演のポイント

- < 政治分野 > (1)日本の安全保障政策に関する積極的なヴィジョンが必要。
(2)安全保障問題に関して日本のより一層の態度の見直しが必要。
(3)日米同盟は東アジアの安定のキーファクターであり、東アジアの情勢を加味した議論が必要。
- < 経済分野 > (1)政治・安全保障分野とは違い経済分野では、一貫して競争的。
(2)言葉の概念上の食い違いは、二国間に横たわる重要な問題。
(3)日米経済を考える上で、経済システム全体を検証し、その主要な相違点、つまり二国間の根本的な問題について着眼する事が重要。
- <文化社会分野> (1)普通のアメリカ人は日本のことをほとんど知らない。と同時に日本人は、アメリカのことを良く知っていると言われるが、それはとても断片的であってアメリカ(人)全体を捉えてはいない。
(2)日本の新聞社はほぼ全てがワシントンD.C.にあるため、それ以外の地域からの情報が入りにくく、それが情報ギャップの原因。
(3)面白い題材でも、その記事によって間違った日本・アメリカのイメージを与えてしまいそうなものは記事にしない姿勢が必要。

これら諸問題に対する所見の他には、各講師の方々のプレゼンテーションの仕方など、吸収すべき事の多い刺激的なフォーラムであった。

今後、諸問題に対する理解の向上に加え、両国に存在する問題・意見を相手国に上手に伝えること、理解しようとする事に対し、今以上の努力を払う必要を感じた。



VII. その他の活動報告

第47回日米学生会議の足跡

本会議中の活動

連続講演会

準備活動



第47回日米学生会議の足跡

本会議まで

<1994年>

- 8月17日 第47回日米学生会議実行委員選出（日本側10名、米国側10名）
- 8月18・19日 第47回日米学生会議実行委員会ミーティング、Seattle Agreement採択
- 9月 日米両国で第47回日米学生会議の準備開始

<1995年>

- 2月4日 連続講演会 第1回 岡本行夫氏（会場：日米会話学院）
「日米新時代の幕開け」
- 2月10日 連続講演会 第2回 柿澤弘治氏（会場：日米会話学院）
「新時代の日本外交」
- 3月 第47回日米学生会議参加者決定（日本側40名、米国側40名）
- 4月1・2日 第1回日本側参加者全体合宿
- 4月1日 連続講演会 第3回 山室勇臣氏（会場：代々木リビックセンター）
「戦前の日米学生会議と戦後復興」
- 5月3～5日 第2回日本側参加者全体合宿
- 5月27日 連続講演会 第4回 石川好氏（会場：早稲田大学）
「アメリカニズムと日本」～人はなぜアメリカに魅かれるのか～
- 6月10日 連続講演会 第5回 渡邊一雄氏（会場：立命館大学）
「ボランティアで時代の創造はできるのか」～日米フィランソピー徹底検証～
- 7月21～23日 第3回日本側参加者全体合宿（直前合宿）



シアトルでの実行委員ミーティング



事務所（四谷）にて

そして、本会議

- 7月23日 日米参加者、猿島（茨城県）にて対面
- 7月24日 ジョイント・オリエンテーション第1日
オリエンテーリング、自己紹介、文化紹介スキット
- 7月25日 ジョイント・オリエンテーション第2日
野外炊飯、分科会#1、キャンプファイアー
- 7月26日 仙台へ移動（バス）
第47回日米学生会議開会式（ワシントンホテル）
- 7月27日 ジェンダーDAY
- 7月28日 分科会#2・3
- 7月29日 科学技術フォーラム
- 7月30日 自由行動
- 7月31日 分科会#4・5
- 8月1日 京都へ移動（飛行機、バス）
立命館大学主催レセプション
- 8月2日 分科会#6・7
- 8月3日 武者小路千家茶道体験 / 分科会#8
- 8月4日 APEC DAY
- 8月5日 硫黄島勉強会 / 自由行動
- 8月6日 平和DAY#1
- 8月7日 マイノリティーDAY
- 8月8日 分科会#9・10
- 8月9日 ボランティアDAY
- 8月10日 硫黄島勉強会 / 自由行動
- 8月11日 広島へ移動（バス、新幹線）
広島県知事表敬訪問、記者会見（10名）
平和プログラム
- 8月11～13日 ホームステイ
- 8月13日 東京へ移動（飛行機）
- 8月14日 分科会#11・分科会成果発表
- 8月15日 平和DAY#2
第48回日米学生会議実行委員決定
- 8月16日 外務省、通産省訪問
日米関係フォーラム
デミング公使主催レセプション
- 8月17日 自由行動 / 新実行委員ミーティング
- 8月18日 硫黄島訪問
- 8月19日 閉会式
- 8月20日 自由行動
- 8月21日 米国側参加者帰国



本会議中の活動

ジョイントオリエンテーション（茨城県立さしま少年自然の家/7月24・25日）

日米の学生が対面してから最初の2日間は、お互いに知り合うことを第一の目的として、いくつかの気軽なイベントが行われた。豊かな自然の中、燦々と降り注ぐ太陽の下で、われわれは友情の第一歩を記したのである。



オリエンテーリング



日本側文化紹介スキット



米国側文化紹介スキット



野外炊飯



キャンプファイアー

開会式（仙台・ワシントンホテル/7月26日）

開会式では、仙台担当実行委員の磯部美香、実行委員長の細野恭平、ジョン・ハーディング、(財)国際教育振興会理事長の板橋並治氏（代読）、JASC Inc.代表のジャック・シェレンバーガー氏が挨拶した後、宮城県出納長の山川敏彦氏、仙台市長の藤井黎氏、東北経団連副会長の黒田四郎氏からご挨拶をいただいた。

立命館大学主催レセプション（立命館大学/8月1日）

立命館大学学長の大南正瑛氏の主催によるレセプションが立命館大学内で行われ、実行委員長の細野恭平、ジョン・ハーディング、関西地区担当実行委員の山田通代が挨拶し、大南氏や、APEC DAY関連の来賓の方々からお言葉をいただいた。



開会式での日本側実行委員長の挨拶



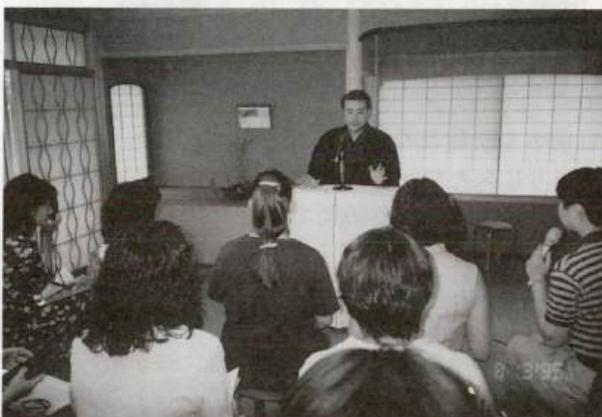
立命館大学主催レセプションでの米国側実行委員長の挨拶

武者小路千家茶道体験（京都・官休庵/8月3日）

伝統文化体験として、日米学生会議参加者は武者小路千家の官休庵を訪れ、家元の千宗守氏から茶道に流れる精神をご講義いただいたあと、お茶席の体験をさせていただいた。滝に見立てた一幅の掛け軸、滝壺に見立てたガラスの水差し、魚籠に生けた野の花などによる涼感の演出は見事であった。さらに、お茶室や庭園を案内していただき、心休まるひとときを過ごすことができた。

広島県知事表敬訪問（広島県庁/8月11日）

実行委員を中心とする10名（日米各5名）が広島県知事の藤田雄山氏を表敬訪問し、会議について説明した。知事は、将来のJASCの広島開催に対し、前向きな姿勢を示された。なお、この模様は、広島のテレビ局のニュースでも紹介された。



武者小路千家家元のお話



広島県知事表敬訪問



広島ホームステイ (8月11~13日)

(第47回日米学生会議実行委員会 広島地区担当 土井 洋平)

第46回会議の終盤にシアトルで行われた第47回会議の実行委員会ミーティングにおいて、アメリカ側の実行委員は、何としても被爆地広島または長崎を第47回会議中に訪問したいとの強い意向を示した。戦後50年を迎えるにあたり、50年前の日米関係の顛末を象徴する被爆都市を訪れることに大きな意味がある、というのが彼らの主張だった。第45回会議を開催した長崎市からは、50周年記念行事が忙しくなるのでJASCを迎え入れることはできない、との事前連絡があり、それならばということで広島でホームステイを行うことで日米が合意した。今思えば、広島市への事前の打診もなく「長崎が駄目ならば広島で」と即断したのは全く実現可能性の裏付けに欠いていたが、当時の情報が極めて不足した状況では止むを得ない選択であった。

準備活動の過程で広島地区の自治体、財団等と接触し支援をお願いすることとなったが、広島が既に高度に国際化された都市であるということ、フォーラム等なしにホームステイのみ行うという企画であったことなどから、大方の反応は「よい活動だとは思うのだがねえ、ウチではちょっと・・・」と芳しくないものであった。しかし幸いなことに、広島市国際交流協会の斡旋で、全国的な民間語学研修団体であるヒッポファミリークラブ西日本事務所が、ボランティアとして我々80名を受け入れる旨表明してくださったため(この時の安堵感といったらなかった!)、平和記念資料館での平和学習および広島周辺での日米2人1組によるホームステイが予定通り実現できる運びとなった。

8月11日、平和プログラムの一環として、平和記念資料館を見学し、被爆体験談を伺ったあとで、会議参加者は2人ずつのユニットで滞在家庭に入った。この週末は会議を通して唯一80人が離散する機会であり、日本の家庭生活を経験するとともに息抜きのチャンスでもあった。ホストファミリーの数だけユニークな体験があった。

Although being in Hiroshima was pretty cool and I was excited about the homestay, I was afraid of making blunders in etiquette. Also I still don't know much Japanese and I was worried about the communication aspects of it. Despite all my worries, I did enjoy it very much. Not so much because it was in Hiroshima, but because I was getting to know my host family.

Bringing pictures from home really helped for them to get to know me and for me to communicate with them, especially because my Japanese vocabulary still remains limited to words like "yes" and "thank you". (Melinda Ng)



日曜日の夕方に広島空港に再集合した際には、つい3日前のやや疲れた表情とは打って変わってすっかり回復した様子で自分の体験を分かち合っている姿、また見送りに来たファミリーとの別れを惜しむ姿などがあった。広島コーディネータの仕事が終わったことを実感し、安堵感に浸る瞬間であった。

それにしても、シアトルでの打ち合わせの際、米国側があれだけヒロシマにこだわった理由は一体何だったのだろうか。「一度見てみたい」という欲求以上のものは結局私には理解しえなかった。ただ、彼らが広島を「アメリカによって破壊された街」としてではなく、「人類の平和への希望を象徴する街」と、より普遍的、抽象的に捉えていたことは間違いない。幼児から日常的に原爆のストーリーに接し、修学旅行と言えれば広島・長崎であった我々の方が素直でない、つまり、被災地で、心の底から、平和を祈念しようという、人間としての純粋な感情が発露しにくくなっているのかも知れない。

こうした思いを巡らせる中、われわれ80名を乗せた日本エアシステムの虹色の機体は、夕闇迫る中を一路最終開催地の東京へと向かった。

第48回日米学生会議実行委員決定（代々木オリンピックセンター/8月15日）

8月15日の夜、参加者は日本側と米国側にわかれ、それぞれの方法で、新しい実行委員を選出し、日本側10名、米国側9名からなる第48回日米学生会議実行委員会が発足した。

その後の話し合いにより、1996年夏に米国で開催される第48回日米学生会議の概要が決定され、現在は、日米両国にわかれた実行委員が、会議開催に向けて準備活動を行っている。

＜ 第48回日米学生会議 ＞

期間：1996年7月25日～8月22日（予定）

開催地：ミズーリ州セントルイス、モンタナ州ビリングス、ワシントンDC

総合テーマ："Accepting Personal Responsibility to Strengthen Our Global Partnership"

「日米から世界へ：今、問われる私たちの使命」



第48回日米学生会議実行委員

外務省・通産省訪問（霞ヶ関/8月16日）

外務省と通産省を訪れ、第一線で活躍されている方々から、日米関係などについてのお話を伺った。

デミング公使主催レセプション（六本木・デミング公使邸/8月16日）

駐日公使で、米国側参加者ジェニファー・デミングの父君でもあるデミング氏から公邸へお招きを受けた。

閉会式（代々木オリンピックセンター/8月19日）

本会議日程のしめくくりとして、オリンピックセンターで閉会式が行われた。第47回日米学生会議実行委員や新しく決まった第48回日米学生会議実行委員、そして、(財)国際教育振興会理事長の板橋並治氏が挨拶し、乾杯の時には、三菱電機営業本部長代理の渡邊一雄氏からユーモアあふれるお言葉をいただいた。米国側実行委員のノリーン・ターは、1ヶ月間にわたる会議でのエピソードを振り返ったのちに、静かに、ゆっくりとかみしめながら、"The 47th JASC is officially over."と宣言した。日本側実行委員の多くは、1年間の苦労を重ねた日々を思い出し、この言葉に涙した。そして、誰からともなく、固く抱き合った。

閉会式を終え、午後は、参加者全員で集い、一人一言ずつそれぞれの想いを述べていった。そして、多くの涙が爽やかに流された。





連続講演会

私たちは、第47回日米学生会議の総合テーマ「時代の創造 ～歴史に学び理想の実現へ～」に基づき、5回にわたる連続講演会を企画した。

第1回（2月4日）岡本行夫氏

＜講師＞岡本行夫氏（国際コンサルタント、元外務省北米第一課長）

＜演題＞「日米新時代の幕開け」

＜会場＞四谷・日米会話学院

岡本氏は、豊富な経験に基づいて現在の日米関係を分析し、これからも日米関係は重要であり続けると述べるとともに、われわれ若い人間に課せられる役割が大きいことを指摘した。また、この講演の中で、岡本氏は、「若い人こそ硫黄島を訪問して、太平洋戦争を生身で感じるべきだ」と述べ、この言葉が、本会議での硫黄島訪問へと結びつくこととなった。

第2回（2月10日）柿澤弘治氏

＜講師＞柿澤弘治氏（衆議院議員、元外務大臣）

＜演題＞「新時代の日本外交」

＜会場＞四谷・日米会話学院

柿澤氏は、外務大臣時代の経験などに基づき、世界各国の現状について例を挙げて説明し、今後、日本は世界の先頭ランナーとして確固たる信念を持って進むべきだと述べた。

第3回（4月1日）山室勇臣氏

講師：山室勇臣氏（ダイヤモンドリース相談役・元三菱銀行副頭取）

演題：「戦前の日米学生会議と戦後復興」

会場：代々木オリンピックセンター

戦前最後となった第7回日米学生会議（1940年・東京開催）で日本側実行委員長を務めた山室氏から、当時のエピソードや、参加者のその後の活躍ぶりについてお話をうかがった。参加者決定から間もない時期であったこともあり、日米学生会議の理念について思いを新たにさせられた。

第4回（5月27日）石川好氏

講師：石川好氏（作家・評論家）

演題：「アメリカニズムと日本」～人はなぜアメリカに魅かれるのか～

会場：早稲田大学

石川氏は、アメリカは逃げ場（挫折したときに行く場所）も行き場（成功したとき次に行く場所）もない人が集まる場所であり、バラバラの習慣は「憲法」によってまとめられるのだと述べた。また、アメリカには共有する過去がないため、未来志向であり、「約束を先送りする」資本主義が発展すると分析し、戦後日本の例も交えながら、今後のあり方について述べた。講演会后、石川氏は、日米学生会議参加者とのディスカッションに長時間にわたって応じて下さり、現代日本の政治などについて辛口の批評をされた。

第5回（6月10日）渡邊一雄氏

講師：渡邊一雄氏（三菱電機参与・営業本部長代理、三菱総合研究所客員研究員）

演題：「ボランティアで時代の創造はできるのか」～日米フィランソロピーの徹底検証～

会場：立命館大学西園寺記念館

渡邊氏は、フィランソロピー（社会貢献活動）という言葉について説明したあとで、自身が米国でフィランソロピー精神に目覚めていった過程を詳しく述べ、日本におけるフィランソロピー・ボランティアの必要性を強く訴えた。また、日本と米国の違いとして、宗教（米国におけるキリスト教の影響）、税制度（フィランソロピーへの税優遇が米国の方が大きい）、市民意識（日本にはあまりない）、第三セクター（政府でも企業でもない、ボランティア活動を進める団体が米国にあって日本にない）、ボランティアコーディネーター（日本では少ない）などを挙げ、今後、ボランティア教育を進め、ボランティアコーディネーターを育成していくことが必要だと述べた。終始熱のこもった講演で、フィランソロピーというのは「素敵な生き方」だ、と言い切る渡邊氏に共感せずにはいられなかった。

準備活動

全体合宿

第47回日米学生会議の日本側参加者は、準備活動中に、代々木オリンピックセンターでの合宿を3回行った。また、この3回以外にも、6月10～11日に、京都・立命館大学で非公式の合宿が行われ、30人近くが参加した。

第1回（4月1・2日）

3月末に第47回日米学生会議の日本側参加者40名（うち10名は実行委員）が決定し、最初の顔合わせとなったのが、この第1回全体合宿である。自己紹介、山室勇臣氏講演、実行委員からの会議の概要の説明、プログラム企画を担当するタスクフォースのミーティング、分科会ごとのミーティングなどを行った。

第2回（5月3～5日）

企画の進行に合わせて、タスクフォースミーティングや分科会ミーティングを行い、その情報を発表し合った。

第3回（7月21～23日）

本会議の直前の合宿であり、本会議に向けた詰めの準備が行われた。

定例会

4月15日から、毎週土曜日に東京、関西、および名古屋で定例会が開かれ、タスクフォースミーティングや勉強会などが行われた。

"THE FORGERS!"発行

日本側参加者向けに、各種報告、エッセイなどを掲載した会報"THE FORGERS!"が週刊で発行された。

勉強会

参加者が自主的に集まって、日米関係、第二次世界大戦史、憲法第9条、ボランティアなどについての勉強会を行った。東京では毎週水曜日と金曜日の夕方、定期的に行われ、毎回10名前後が参加した。

フィールドトリップ

準備活動中に、いくつかのフィールドトリップが行われた。

4月3日 人体プラスティネーション展（東京大学総合資料館）

参加者：JASCer11名、non-JASCer2名

日本解剖学会に合わせて、日本で初めて行われていた「人体プラスティネーション展」を見学した。この企画の立役者である養老孟司氏ともお話しすることができ、様々な感想や意見が出された。科学技術フォーラムでの人体展示も有意義だとする声が多かった。

4月11日 NTTサイエンスフォーラム「ヒトゲノム解析の最先端」（東京・経団連会館）

参加者：JASCer3名

ヒトゲノムプロジェクトで世界をリードする科学者などが講演、パネルディスカッションを行い、その後のレセプションで実際にお話しさせていただいた。結果として科学技術フォーラムに大きな影響を与えることになった。

4月22日 アジア保健研修財団(AHI)（愛知県）

参加者：JASCer4名

アジアの各国から医師やソーシャルワーカーが研修に訪れている施設で、この日は、名古屋大学AIBSECのメンバーらも交えて、交流活動やディスカッションを行った。



4月24日 関西情報センター

参加者：JASCer3名

インターネットの体験をするとともに、日米学生会議が中心となってAPEC諸国間に築こうと考えているネットワークに対する意見をうかがった。

5月20日 「憲法9条の会」 (大阪)

5月26日 「憲法9条の会」 (東京)

5月28日 「憲法9条の会」 (名古屋)

参加者：JASCer5名 (大阪)、JASCer8名 (東京)、JASCer3名 (名古屋)

「日本の平和憲法を世界に広めよう」というオハイオ大名譽教授のオーバービー氏の講演会を聞いたが、理想と現実のギャップが大きすぎるというのが、大方の参加者の感想であった。

6月5日 座禅会 (東京・長谷寺)

参加者：JASCer4名、non-JASCer2名

長谷寺を訪れ、座禅の作法などを教わった後、実際に座禅堂で座禅を行った。

6月27日 フィランソロピー研究会 (東京)

参加者：JASCer6名

連続講演会の講師としてお呼びした渡邊一雄氏の紹介で、月に一回、企業・団体でフィランソロピーを実践している方々が集う「フィランソロピー研究会」(通称「おなべを囲む会」)に参加させていただいた。本会議が終わった後も、この研究会には数名が参加し続けている。

6月29日 テレビマンユニオン (東京)

参加者：JASCer6名、non-JASCer4名

テレビ制作会社最大手のテレビマンユニオンを訪れ、社長の重延浩氏から、多チャンネル化への世界の流れと日本の動き、テレビの料金体系のあり方、制作費と番組の質、マルチメディアの有用性、放送局と制作会社の関係、視聴率至上主義の弊害などについてお話をさせていただいた。具体的な数字を挙げての、わかりやすい説明で、テレビの裏側についていろいろと知ることができた。

7月4日 「世界ふしぎ発見」収録見学 (東京・TBS)

参加者：JASCer15名

テレビマンユニオンが制作している「世界ふしぎ発見」のリハーサルと収録を見学させていただいた。



第3回全体合宿にて



第47回日米学生会議日本側参加者

青山 絵美	筑波大学	生物学類
磯部 美香*	国際基督教大学	教養学部社会科学科
海老原 憲*	早稲田大学大学院	理工学研究科工業経営専門分野
大石 詔子	立命館大学	国際関係学部
大沢 枝里子	筑波大学	第三学群国際関係学類
加藤 愛太郎	大阪大学	理学部物理学科
加峯 麻紀子	九州大学	経済学部
北澤 咲弥花	東京大学	教養学部国際関係論
木村 伸吾	早稲田大学	政経学部
窪田 尊	筑波大学大学院	地域研究研究科アメリカ研究コース
来嶋 光江	東京大学	教養学部文科Ⅰ類
小林 洋子	名古屋大学	法学部
鮫島 如	フェリス女学院大学	文学部英文学科
島田 恭子	国際基督教大学	教養学部教育学科
善塔 倫子	武庫川女子大学	文学部人間関係学科
大保 敦子*	慶應義塾大学	法学部政治学科
高野 利実*	東京大学	医学部医学科
田尻 雅	慶應義塾大学	総合政策学部
田中 智子*	大阪外国語大学	国際文化学科
土井 洋平*	名古屋大学	医学部
都路 恵子	大阪大学	文学部哲学科
中山 真	早稲田大学	政経学部
難波江 功二	浜松医科大学	医学部医学科
原 大介	立命館大学	国際関係学部
原田 芳衣	早稲田大学	法学部
平野 功	同志社大学大学院	法学研究科政治学専攻
廣瀬 葉子	東海大学	医学部
藤野 淳史	国際基督教大学	教養学部社会科学科
藤本 直子	筑波大学	医学部
藤本 まどか*	国際基督教大学	教養学部社会科学科
細野 恭平*	東京大学	文学部スラヴ語スラヴ文学科
見市 礁	慶應義塾大学	法学部政治学科
宮崎 佳代子	筑波技術短期大学	視覚学部鍼灸学科
宮地 ゆう	慶應義塾大学	総合政策学部
村田 知子	東京大学	教養学部文科Ⅱ類
柳井 哲史*	麗澤大学	国際経済学部
山田 亜紀	慶應義塾大学	法学部法律学科
山田 通代*	同志社大学	経済学部
湧永 裕子	国際基督教大学大学院	比較文化専攻

(*印は実行委員)

第47回日米学生会議米国側参加者

Connie Beson*	Michigan State University
Scott Blacker	University of North Carolina
Rachel Brunette	Stanford University
Ross Chaney	American University
Andrew Crawford*	Wesleyan University
Emil Morada de Goma	Harvard University
Jennifer Deming	Stanford University
Sarah Drummond	University of Puget Sound
Susan Duvall	University of Washington, Seattle
Basho Fujimoto	University of California, Davis
Harumi Furuya	Harvard University
John Harding*	University of Pennsylvania
Jason Hays*	University of Puget Sound
Delauno Hinson	Howard University
Stacey Holmes	University of Washington
Nellie Hsu	Duke University
Maureen Johnson	University of Colorado, Boulder
Linda Kang	Harvard University
Rollie Lal*	University of Maryland
Helen Lee	Princeton University
William Lucas*	University of Colorado, Boulder
Julie MacDonald	University of Puget Sound
Lowell Matthews	University of Delaware
Daniel McKelvey	Case Western Reserve University
Robbie Miller	University of Pennsylvania
Alexander Millkey	Guilford College
Meghan Murnion	Rocky Mountain College
Melinda Ng	University of California, Berkeley
Tien Nguyen	University of Colorado, Boulder
Melfi Penn*	Howard University
Kristin Peterson*	University of Washington, Seattle
Malik Rashid	Columbia University
Kevin Saari	University of Kansas
Dimple Shah	Stanford University
Ai Tanaka*	University of California, San Diego
Gavin Tachibana	Cornell University
Kai Tao	University of Colorado, Boulder
Noreen Tarr*	University of Hawaii, Manoa
Tatsu Yamato	Amherst College

(*印は実行委員)

IX. 会議開催にご協力下さった方々

- | | |
|-------------------------------------|----------------------|
| Michigan State University | Connie Beeson |
| University of North Carolina | Scott Blaker |
| Stanford University | Rachel Brantley |
| American University | Ross Chang |
| Western University | Andrew Crawford |
| Hawaii University | Emil Mordeha de Gons |
| Stanford University | Jennifer Dening |
| University of Puget Sound | Sarah Drummond |
| University of Washington, Seattle | Susan Duvall |
| University of California, Davis | Basho Fujimoto |
| Howard University | Debra Hinson |
| University of Washington | Stacey Holmes |
| Duke University | Nellie Hsu |
| University of Colorado, Boulder | Marcus Johnson |
| Harvard University | Linda Kang |
| University of Maryland | Rollie Lal |
| Purdue University | Helen Lee |
| University of Colorado, Boulder | William Lucas |
| University of Puget Sound | Jillie MacDonald |
| University of Delaware | Jawid Mathews |
| Case Western Reserve University | Daniel McKelvey |
| University of Pennsylvania | Robbie Miller |
| Gulford College | Alexander Milkey |
| Rocky Mountain College | Meghan Munton |
| University of California, Berkeley | Melinda Ng |
| University of Colorado, Boulder | Tien Nguyen |
| Howard University | Melb Penn |
| University of Washington, Seattle | Kristin Peterson |
| Columbia University | Malik Rashid |
| University of Kansas | Kevin Scott |
| Stanford University | Dimple Shah |
| University of California, San Diego | Al Tanaka |
| Cornell University | Gavin Tachibana |
| University of Colorado, Boulder | Kai Tao |
| University of Hawaii, Manoa | Noreen Tan |
| Amherst College | Tatsu Yamato |

第47回日米学生会議

主催・後援・協力

主催	財団法人 国際教育振興会
後援	外務省 文部省 国際教育交換協議会 (CIEE) 日米文化センター
協力	立命館大学

会議開催協力

第47回日米学生会議全般

財団法人 国際教育振興会	理事長	板橋 並治 様
	理事 事務局長	鈴木 堯 様
	事務局長	稲田 脩 様
	事務課	西部 あゆみ 様
学校法人 国際大学	理事長補佐	伊部 正信 様
京王観光 株式会社		吉水 康夫 様
株式会社 日本エアシステム	営業本部・国内営業グループ	斉藤 勝 様
西濃運輸 株式会社	東京地区営業部営業課主幹	堀川 利久 様
株式会社 実業公報社	常務取締役	古屋 繁 様
くにたち工房		大野 一男 様

連続講演会講師

株式会社 岡本アソシエイツ	代表取締役	岡本 行夫 様
衆議院議員・元外務大臣		柿沢 弘治 様
ダイヤモンドリース株式会社	取締役相談役	山室 勇臣 様
作家		石川 好 様
三菱電機株式会社	営業本部長代理・参与	渡邊 一雄 様

仙台地区開催協力

財団法人 仙台コンベンションビューロー		
仙台市勤労者保養所 茂庭荘		
AIESEC仙台委員会		
東北経済連合会	副会長	黒田 四郎 様
	総務部担当部長	福島 昭夫 様
財団法人 仙台コンベンションビューロー	前事務局次長	鈴木 正己 様
	事業第二部長	矢部 武志 様
	事業第一課主任	庄司 大 様
宮城県	出納帳	山川 敏彦 様
	総務部国際交流課	高橋 義博 様
仙台市	市長	藤井 黎 様
	企画局国際交流課	岩澤 克輔 様
東北日米協会・カメイ株式会社	総務部秘書課課長	工藤 政夫 様



仙台商工会議所	調査部国際室室長	伊藤 均 様
NHK福島放送局	局長	伊東 律子 様
財団法人仙台市勤労者福祉協会	茂庭 荘 フロントマネージャー	会川 泰二 様
株式会社 仙台ワシントンホテル	宿泊課予約担当主任	伊藤 淳 様
東北大学医学部		笹野 公伸 様
東北大学医学部	助手	荒井 由美子 様

科学技術フォーラム

<後援>

宮城県	仙台市	日本医師会	日本解剖学会
宮城県医師会	仙台市医師会	上廣倫理財団	

<協力>

株式会社 メタ・コーポレーション・ジャパン		
NHK/NHKエンタープライズ21		
東北医療福祉専門学校		
東京大学医学部標本室		
アロアロインターナショナル		
仙台市科学館		
仙台市青年文化センター		
日本通運株式会社		
日本コンベンションサービス		
元東京大学医学部教授		養老 孟司 様
東京大学医科学研究所教授、ヒトゲノム解析センター長		榊 佳之 様
国際日本文化研究センター助手		森岡 正博 様
東北大学電気通信研究所教授		沢田 康次 様
元東北大学総長		石田 名香雄 様
東北大学名誉教授・東北医療福祉専門学校長		田崎 京二 様
東北大学名誉教授・医学博士		石井 敏弘 様
仙台市科学館館長		鶴巻 勝雄 様
大阪大学細胞工学センター所長		松原 謙一 様
東京大学名誉教授		多田 富雄 様
国際基督教大学教授		村上 陽一郎 様
生命誌科学館副館長		中村 桂子 様
筑波大学教授、Eubios Ethics Institute代表		Darryl Macer 様
京都大学文学部教授		加藤 尚武 様
東京大学医学部標本室主任		吉田 穰 様
ハイデルベルグ大学医学部教授		Gunter Von Hagen 様
NHKサイエンススペシャル「驚異の小宇宙・人体」エグゼクティブプロデューサー		林 勝彦 様
メタ・コーポレーション・ジャパン マーケティングプロデューサー		町田 聡 様
通訳		野口 由紀子 様
		富田 嘉子 様
		河合 ひろみ 様
東北医療福祉専門学校理学療法科科长		鈴木 一 様
東北医療福祉専門学校理学療法科教員		久家 直巳 様

関西地区開催協力

立命館大学
京都府国際課
京都市国際交流室
京都経済団体協議会
立命館大学

同志社大学
関西大学

アメリカン大学 (米国)
日新電機 株式会社
京都経営者協会
京都商工会議所

社団法人 京都経済同友会
社団法人 京都工業界
大阪商工会議所
社団法人 関西経済同友会
関西経済連合会
駐大阪神戸米国総領事館
米国大使館
京都紫野ロータリークラブ
朝日新聞東京本社
京都支局
大阪本社

学長
教授
教務課
教授
教授
教授

会長
専務理事
前専務理事
専務理事
理事兼国際部長
事務局長
専務理事
常務理事
常任幹事
専務理事
領事
広報・文化交流局
理事・国際奉仕委員長
国際本部国際営業部
記者
夕刊記者クラブ記者

大南 正瑛 様
安斎 育郎 様
小川 礼 様
西村 理 様
鶴飼 康東 様
鈴木 俊光 様
内田 敬子 様
小松 新 様
久納 浩三 様
宇野 浩 様
小堀 脩 様
岡田 滋 様
藤本 圭司 様
植田 哲次 様
杉本 道夫 様
萩尾 千里 様
村田 様
Warren H. Soiffer 様
熊谷 俊樹 様
丹下 康夫 様
遠藤 美和子 様
諸永 祐司 様
稲垣 えみ子 様

武者小路千家茶道体験

武者小路千家

家元
秘書家元付

千 宗守 様
藤岡 正明 様

APEC DAY

<講師>

筑波大学
北京大学 (中国)
駐大阪神戸米国総領事館
外務省

第三学群国際総合学類長
国際経済学部学部長
領事
経済局開発途上地域課企画官

今岡 日出紀 様
Xiao Chen 様
Warren H. Soiffer 様
軽部 洋 様

<コーディネーター>

朝日新聞社大阪本社

経済部次長

小此木 潔 様

<協力>

財団法人 関西情報センター
NTT関西支社 マルチメディア推進室
国際学生協会
模擬APEC実行委員会
関西大学
大阪大学KRTFNET運営グループ
株式会社 明治亭



平和プログラム

財団法人 平和中島財団
同志社大学文学部
広島修道大学

教授
教授

小野 修 様
岡本 三夫 様

マイノリティーDAY

京都リサーチパーク株式会社
和光大学

助教授

伊藤 武彦 様

ボランティアDAY

京都府社会福祉協議会、京都市社会福祉協議会、美山町社会福祉協議会、
宇治市社会福祉協議会、城陽市社会福祉協議会、八幡市社会福祉協議会
京都ボランティア協会
京都府美山町
フジの園、みやびのその
美山やすらぎホーム

広島地区開催協力

広島県、広島市
財団法人 広島平和文化センター
ヒッポファミリークラブ西日本事務所
広島県
湧永製薬株式会社

知事
専務取締役
非常勤顧問

藤田 雄山 様
不破 亨 様
深崎 敏之 様

東京地区開催協力

国立オリンピック記念青少年センター
外務省
通商産業省
米国大使館

書記官

Deming 様

日米関係フォーラム

Harvard University
野村総合研究所
在日米国商工会議所
The Washington Post
日本経済新聞社

教授
主任研究員
副会頭
極東総局長
論説委員

Ezra F. Vogel 様
森本 敏 様
Glen S. Fukushima 様
Tom R. Reid 様
田勢 康弘 様

硫黄島訪問

外務省
防衛庁
衆議院議員・元内閣総理大臣
株式会社 岡本アソシエイツ
オンキヨー株式会社

代表取締役
代表取締役社長

宮澤 喜一 様
岡本 行夫 様
大舘 直人 様

賛助財団・団体・企業

仙台開催・賛助団体

仙台市企画局国際交流課
財団法人 未来の東北博記念国際交流基金
社団法人 東北日米協会

社団法人 東北経済連合会
仙台商工会議所
仙台コンベンションビューロー

関西開催・賛助団体

社団法人 京都経営者協会
京都経済団体協議会
社団法人 京都経済同友会
社団法人 京都工業会
財団法人 京都市国際交流協会
社団法人 京都商工会議所
京都日米協会

京都紫野ロータリークラブ
APEC大阪会議関西協力協議会
大阪商工会議所
社団法人 関西経済同友会
社団法人 関西経済連合会
大阪日米協会
神戸日米協会

一般賛助財団・団体・企業

財団法人 石橋財団
財団法人 上廣倫理財団
財団法人 鹿島平和研究所
財団法人 国際教育財団
国際交流基金日米センター
財団法人 日商岩井国際交流財団
財団法人 庭野平和財団
財団法人 平和中島財団
財団法人 三菱銀行国際財団
財団法人 吉田茂国際基金

社団法人 証券投資信託協会
社団法人 日本歯科医師会
日本自動車工業会
日本証券業協会
社団法人 日本信託協会

株式会社 あさひ銀行
アサヒビール 株式会社
味の素 株式会社
伊藤忠商事株式会社
株式会社 イトーヨーカ堂

エッソ石油 株式会社
オムロン 株式会社
鹿島 株式会社
カテックス・オイル・ジャパン 株式会社
関西電力 株式会社
キッコーマン 株式会社
株式会社 九州電力
株式会社 キューピー
協栄生命保険 株式会社
株式会社 協和発酵
株式会社 国際電信電話
コニカ 株式会社
オンキヨー 株式会社
さくら銀行 株式会社
三共 株式会社
三洋証券 株式会社
三洋電機 株式会社
株式会社 三和銀行
塩野義製薬 株式会社
ジャパンエナジー 株式会社
新日本製鐵 株式会社
住友海上火災保険 株式会社



- 株式会社 住友銀行
住友商事 株式会社
住友信託銀行 株式会社
住友スリーエム 株式会社
住友不動産 株式会社
セイコーコンタクトレンズ 株式会社
積水ハウス 株式会社
セコム 株式会社
ゼネラル石油 株式会社
ソニー 株式会社
第一勧業銀行 株式会社
第一工業製薬 株式会社
第一生命保険 相互会社
大成建設 株式会社
株式会社 ダイナワード
株式会社 大丸
株式会社 大和銀行
大和証券 株式会社
武田薬品工業 株式会社
竹中工務店 株式会社
中部電力 株式会社
TDK 株式会社
出口 麻紀子
デュボン 株式会社
株式会社 電通
東京海上火災保険 株式会社
東京急行電鉄 株式会社
東京銀行 株式会社
東京コカ・コーラボトリング株式会社
東京電力 株式会社
株式会社 東芝
凸版印刷 株式会社
トヨタ自動車 株式会社
株式会社 ニッカウキスキー
日興証券 株式会社
日産自動車 株式会社
日本アイビーエム 株式会社
日本興業銀行 株式会社
日本国際通信 株式会社
日本生命保険 相互会社
日本電気 株式会社
日本マクドナルド 株式会社
野村証券 株式会社
日立製作所 株式会社
日野自動車工業 株式会社
ファイザー製薬 株式会社
株式会社 富士銀行
藤沢薬品工業 株式会社
富士ゼロックス 株式会社
富士通 株式会社
本田技研 株式会社
松尾橋梁 株式会社
松下電器産業 株式会社
マツダ 株式会社
松屋 株式会社
三井海上火災保険 株式会社
三井信託銀行 株式会社
三井物産 株式会社
三井不動産 株式会社
三菱銀行 株式会社
三菱地所 株式会社
三菱自動車工業 株式会社
三菱重工業 株式会社
三菱商事 株式会社
三菱信託銀行 株式会社
宮澤 喜一
明治生命保険 相互会社
安田海上火災保険 株式会社
安田生命保険 相互会社
山崎製パン 株式会社
山種証券 株式会社
UCC上島珈琲 株式会社
雪印乳業 株式会社
横河電機 株式会社
ロイヤルホテルグループ 株式会社

編集後記

大変長らくお待たせいたしました。ようやく、ここに、第47回日米学生会議日本側報告書をお届けすることができました。この一冊の本に刻まれた、78名の学生の熱い息吹を感じていただければ、幸いに存じます。

私はよく、「JASC=自己創出系」ということを言います。日米学生会議（JASC）というのは、代々の実行委員が、創始時から綿々と受け継がれてきた根本理念を守りつつ、その理念の上に、時代に適応した、あるいは、時代を先取りした会議を築き上げることで、成り立ってきました。JASCを生命体にたとえるならば、実行委員はDNAということになります。第47回実行委員は、第46回会議という親から産み出された受精卵の中の新しいDNAであったわけで、そこには第1回の会議からほとんど変わることなく遺伝されてきた情報がみっちり詰まっています。しかし、生命体というのは、遺伝されたDNAだけで機械的に決定されてしまうような単純な存在ではありません。もちろん、DNAのはたらきは重要ですが、生命体は、DNA情報を発現させる段階で、柔軟に環境に適応し、個性というオリジナリティーを獲得していきます。「自己創出系」というのは、そういった生命体の特徴を表したもので、JASCの特徴もそこにあるのではないかと、私は思うのです。つまり、JASCの根本理念に基づきつつ、時代の流れにも敏感で、かつ、オリジナリティーを追求すること、それこそが、各回のJASCに課せられていることではないでしょうか。

第47回日米学生会議日本側実行委員10名は、創始時の理念を振り返って議論し、現代という時代に相応しい理念を模索し、そして、あらゆる面でオリジナリティーを追求しました。「日米で日米を考えるだけでなく日米で世界を考えよう」という発想のもと、APEC DAYを企画し、「単なる交流ではなく、成果を出すことを第一に考えよう」ということで、会議のシステムを見直し、「『学生だからこそできること』を追求しよう」ということで、大きな企画を多数打ち出しました。また、「連続講演会」企画を始めたり、準備活動を1ヶ月早めたり、「実施要綱」をはじめとする出版物の内容・形態を刷新したりするなど、47回のオリジナリティーを様々なレベルで存分に発現しました。この報告書も、以前とはかなり違ったものになっているというのは、お気づきの通りです。

日本側実行委員はみな夢追人であったと思います。話し合いを重ねているうちに、どんどん大きい方に話が進んでいく傾向がありました。JASCというのが、夢を実現することのできる場であるという確信のもと、どの企画も巨大化の道を歩んでいきました。「硫黄島訪問」の実現にも、この性格は大きく影響したわけです。しかし、企画が巨大化すると同時に、われわれは、膨大な仕事という現実的な問題を抱えることになりました。勉強や日常生活を犠牲にして、朝から晩までJASCの仕事に追われる日々が続きました。実行委員間で連絡を取りつつ、徹夜で仕事を進めたことも何度もありました。ミーティングや合宿は頻繁に行い、オリンピックセンター、あるいは、私の六畳二間のアパートで、夜通し議論しました。とにかく、われわれの頭はJASC一色だったわけです。1年前に経験していたこの怒涛のような日々を振り返ると、決まって、涙がこみ上げてきて、不思議な感情に襲われます。JASCが私にとってどういうものであったのか、未だに結論を得られずにいますが、われわれ日本側実行委員10名で共有した経験というのが、かけがえのないものである、ということは確かだと思います。この報告書で、78名の参加者の中の10名のみについての話を書くのは適切ではないかもしれませんが、どうしても書かずにはいられません。磯部美香、海老原憲、大保敦子、田中智子、土井洋平、藤本まどか、細野恭平、柳井哲史、山田通代、ついでに、高野利実も入れて、この10人に心より感謝し、その永遠の友情を誓いたいと思います。

「時代の創造 ~歴史に学び、理想の実現へ~」というのは、われわれの思い入れの強い、47回会議の総合テーマですが、理想を実現させ、時代を創造していくのは、これからの私たちの仕事です。JASCは私たちに、それがけっして不可能ではないことを教えてくれました。私たちは、大きな夢と理想を抱きつつ、JASCの精神を忘れずに、それぞれの人生を歩いていくことになると思います。第47回日米学生会議参加者78名の今後の活躍と、日米学生会議の永続、発展をここにお祈りいたします。

最後に、第47回日米学生会議の開催にあたって、われわれの活動を暖かく見守って下さり、多大なるご協力とご賛助を下さいました皆様に、重ねて御礼申し上げます。

第47回日米学生会議実行委員会
日本側報告書編集責任者 高野 利実



第47回日米学生会議日本側実行委員

左から、大保、土井、磯部、海老原、山田、細野、田中、高野、藤本、柳井

第47回日米学生会議日本側報告書

発行日：1996年4月10日

<編集> 第47回日米学生会議実行委員会
 磯部 美香 海老原 憲 大保 敦子 高野 利実 田中 智子
 土井 洋平 藤本 まどか 細野 恭平 柳井 哲史 山田 通代

<編集責任者> 高野 利実

<発行> 〒160 東京都新宿区四谷1-21
 (財)国際教育振興会内 日米学生会議事務局
 ☎03-3359-0563

<印刷> 株式会社 実業公報社

1996



SINCE 1934

主催 **NIPEC** 財団法人国際教育振興会
企画・運営 第47回日米学生会議実行委員会